

研究集録第20号

昭和58年度

重
要

子供経営の
基礎に

特別活動の特質をふまえた

豊かな人間性の育成

昭和59年3月1日

東京都小学校特別活動研究会

目 次

○ 会長あいさつ	
○ まえがき	1
○ 昭和58年度研究発表大会要項	2
○ 新春座談会	3
○ 青木先生講演要旨	5
○ 各研究部の研究	9
I 学級会活動	9
II 児童会活動	33
III クラブ活動	57
IV 学級指導	81
○ 役員・本部幹事・理事名簿	105
○ あとがき	106

— 今までの研究集録一覧 —

第1集(昭和39年度)	特別教育活動における指導計画作成上の諸問題
第2集(昭和40年度)	特別教育活動の本質をふまえた指導計画のあり方
第3集(昭和41年度)	特別教育活動の本質をふまえ望ましい指導計画と実施計画
第4集(昭和42年度)	望ましい指導計画による実践事例とその考察
第5集(昭和43年度)	望ましい指導計画による実践事例とその考察
第6集(昭和44年度)	改訂指導要領実施のための具体的方策と問題点
第7集(昭和45年度)	改訂指導要領実施のための具体的方策と問題点
第8集(昭和46年度)	新教育課程実践上の諸問題
第9集(昭和47年度)	教育課程実践上の諸問題
	— 各内容相互関連と他の領域等の関連 —
第10集(昭和48年度)	特別活動と他領域との関連
第11集(昭和49年度)	ひとりひとりを生かす特別活動の特質と指導のあり方
第12集(昭和50年度)	ひとりひとりを生かす特別活動の特質と指導のあり方
第13集(昭和51年度)	ひとりひとりを生かす特別活動の指導のあり方
第14集(昭和52年度)	楽しく充実した学校生活をめざす特別活動
	— 新教育課程をふまえて —
第15集(昭和53年度)	楽しく充実した学校生活をめざす特別活動
	— 新教育課程をふまえて —
第16集(昭和54年度)	楽しく充実した学校生活をめざす特別活動
	— 新教育課程をふまえて —
第17集(昭和55年度)	楽しく充実した学校生活をめざす特別活動
	— 新教育課程をふまえて —
第18集(昭和56年度)	豊かな人間性を育てる特別活動
	— 集団活動の指導原理とその実践的解明 —
第19集(昭和57年度)	豊かな人間性を育てる特別活動
	— 集団活動の指導原理とその実践的解明 —
第20集(昭和58年度)	特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成

研究集録第二十集によせて

会長 広瀬 英二

本会創設以来の、記念すべき研究集録第二十集の発行をみたことは、四百七十六名の会員の皆さんとともに、喜びにたえないところであります。

十年一昔といいますが、二昔前の第一集を発行した当時は、経済的にも、運営の面においても、多くの困難があったと思います。以後、組織の充実に伴い、ほのぼのとした人間関係を基盤として、常に、同じ方向に向かって、新しさを求め、質的向上をめざす、生き生きとした研究が積み重ねられてまいりました。伝統と歴史の重味をひしひしと感じるとともに、歴代の会長さんはじめ、これらの研究にたずさわった数多くの会員の皆さんに、心から感謝の意を捧げたいと思います。

本年度の研究主題は、「特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成」であります。

都小特活では、特別活動が教育課程に位置づけられた意義を原点に、研究を進めております。

教育課程の理念である「自ら考え正しく判断できる児童の育成」には、幾多の人的資質の啓発が希求されています。「豊かな人間性」もその中に包含されます。豊かな人間性の育成は学校の全教育活動を通して行われていることであり、特別活動では、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達を図り、個性を伸長するとともに、集団の一員として自覚を高め、協力してよりよい生活を築こうとする、自主的・実践的態度を育てる」の、特別活動の目標の達成を通して、これに迫るものであります。

特別活動は授業であり、教師の適切な指導が根底にあってこそ、その目標を達成することができます。すなわち、児童活動の特質（児童の自発的・自治的な実践活動を通して）と、学級指導の特質（好ましい人間関係が基盤、日常生活の行動の仕方等）をふまえた指導が重要であります。「なすことによって学ぶ」集団の実践活動の指導は、児童の体感を通して、自己の生涯をたくましく生きていく「豊かな人間性の育成」につながります。

この一年間、竹石専門部長を中心に、岩下・新倉・安岡副部長、学級会（大谷部長）児童会（星野部長）クラブ（関口部長）学級指導（米本部長）研究幹事の方々、お忙しい中、ほんとうにご苦勞様でした。皆様のご協力に深く感謝いたします。

継続は力なりとか。教育実践にはこれによしとする終点はありません。人間性豊かな児童の育成をめざす特別活動の指導実践の道は厳しく遠いものです。だが、常に、新しさと質の向上をめざして、ただひたすらに、しかも地道に、研究を継続していくことあるのみだと考えます。

都内各学校で、この冊子を活用して下さい。各学級の特別活動が、一歩でも前進することを切望してやみません。

本年度の研究をふりかえって

専門部長 竹石 善一

57年度は「集団活動の指導原理と、その実践的解明」という研究目標を設定し、各研究部がそれぞれ具体的に研究に取り組み、研究授業をとおして相当の成果をあげることができました。

本年度は研究紀要第20集ということもあり、積み重ねの財産を基盤にして、特別活動ならではの指導することができえない特質を今一度みなおしながら、一人一人の子どもに豊かな人間性をもたせる指導を追究することにしてスタートいたしました。

「なすことによって学ぶ」という体験的・実践活動の教育活動が特別活動の特質でありますから、多様な内容をもっていると思います。したがって指導にあたっては、計画的・意図的でなくてはならない面がありますが、一方、自治的・自発的活動にしないでなりません。あまりにも強すぎる指導になりがちな点、むしろ放任的指導になっている点等、指導の難しさ、運営の複雑さがありましよう。そこで本年度は次の様なテーマを設定しました。

○ 共通テーマ

『特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成』

○ 各研究部の研究テーマ

- 学級会研究部 「学級経営を基盤にした学級会活動のあり方」
- 児童会研究部 「児童活動の特質をふまえた望ましい指導のあり方」
- クラブ活動研究部 「クラブ活動の特質を高める集団活動のあり方」
- 学級指導研究部 「展開部分の深め方の工夫」

各研究部は部長を中心に幹事・会員の先生方が特に話し合いの研究だけでなく、授業・指導をとおしての研究を12・13回平均に、都内各地区に出向いての深めが、精力的に行われたことも、本年度の特徴の一つの研究会のもち方でした。

都特活の研究は、足もとをかため、展望しながら、たえず実践をとおしての研究で深めてまいりました。各研究部はそれぞれ具体的にすすめていく中で、たえず、学級会・児童会・クラブ活動・学級指導の相互関連についても研究を深め、工夫を加えてまいりました。その成果は少しずつではありますがあらわれてきているものと確信しております。

特別活動は、一人一人の児童の人格形成上重要な役割りを果たす領域で、特に各教科の授業時数の削減により生じた時間の活用なども考慮しながら、一層の充実を図ることが大切です。しかし、研究を深めれば深めるほど、味があり同時に十分対応していない部分がでてくるものです。各学校の実態に即してさらに深めていくことが必要だろうと思います。

特別活動の特質を考えながら研究を充実・深めてきた一年間、部長・幹事・会員の先生方に感謝し、来年度へむかって歩ゆんでまいりたいと思います。

東京都小学校特別活動研究会

昭和58年度 研究発表大会要項

1. 日 時 3月1日(木) 午後1:30～4:00
2. 会 場 北区立滝野川小学校
3. 研究主題 「特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成」
4. 時 程

	1:30	1:50		2:20	2:30		3:00		3:40	4:00
受	全 体 会				移	分科会(児童会・学級会・クラブ・学級指導別)				
付	あいさつ オリエンテーション				動	研究発表	研究討議	講評		

5. 研究会

- (1) 全体会 1:50～2:20 進行……………庶務部長 石川 和 男
- ◆ 開会のことば……………副会長 外村 近
 - ◆ あいさつ……………会 長 廣瀬 英二
 - ◆ 祝 辞……………東京都教育委員会
 - ◆ "……………全国特別活動研究会
 - ◆ オリエンテーション……………専門部長 竹石 善一
 - ◆ 閉会のことば……………副会長 古橋 宏
- (2) 分科会 2:30～4:00

	学 級 会	児 童 会	ク ラ ブ	学 級 指 導
テ ー マ	学級経営を基盤にした学級会活動の在り方	児童会活動の特質をふまえた望ましい指導のあり方	クラブ活動の特質を高める集団活動のあり方	授業を通して指導過程の在り方と資料の活用を考える一展開部分の深め方の工夫一
運 営 部 長	大谷 武夫(港・高輪台小)	星野 隆治(中野・桃三小)	関口 照治(墨田・菊川小)	米本 滋雄(葛飾・梅田小)
司 会	飯沼 宏(立川・柏小) 吉田 健二(板橋・金沢小)	今野 正保(新宿・淀三小) 柏村喜久子(板橋・若木小)	後藤 治司(荒川・第二瑞光小) 湯田 耕司(三鷹・井口小)	高松 和彦(武蔵野・第四小) 篠原 昌子(中央・月島第一小)
発 表 者	飯田 晃(中野・上高田小) 名取 幹夫(江戸川・第四葛西小) 野村みや子(小平・第三小)	山田 雅子(武蔵野・大野田小) 小幡 賢司(港・東町小) 佐々木善光(文京・真砂小)	塚越 正昭(墨田・両国小) 長田 信彦(豊島・高松小)	森山 裕夫(三鷹・井口小) 二田 孝(多摩・東愛宕小) 朝倉深太郎(世田谷・代沢小)
記 録	松村 二美(江東・南砂西小) 山本 英一(文京・柳町小)	鈴木 秀雄(江東・香取小) 岩堀 早苗(江東・越中島小)	野口 アヤ(新宿・淀六小) 中嶋美沙子(墨田・緑小)	飯田 良一(千代田・西神田小) 篠崎たか子(荒川・赤土小)
助 言 者	豊島区立仰高小校長 古橋 宏 墨田区立二葉小校長 大西 弘 港区立竹芝小教頭 門倉 昭三 江戸川区立下鎌田東小教頭 小野 真澄	多摩市立東永山小校長 外村 近 足立区立栗島小校長 早坂 一 新宿区立天神小教頭 岩下 紀夫 板橋区立志村一小教諭 松野 彰夫	八王子市立清水小校長 岩園 敏明 江戸川区立篠崎小校長 北村 康富 東大和市立東大和九小校長 関口 圭一郎 港区立松町小教頭 小川 国寿	中央区立月島第一小校長 小河 一久 豊島区立平和小校長 石川 和男 世田谷区立千歳小教頭 新倉 剛 練馬区立泉新小教頭 安岡 正凱
* 全体の助言者	元東京都小学校特別活動研究会会長 白井 健二, 小谷 威, 久納 六郎, 小島 明 前東京都小学校特別活動研究会会長 中田 英義			

新春座談

『都特活・'84年を語る』

59.1.15 合宿研修会より

広瀬英二 外村 近 古橋 宏 小河一久 岩園敏明 石川和男
松崎 繁 小野真澄 安岡正凱 大谷武夫 星野隆治 関口照治
米本滋雄 松野彰夫 渡辺 寿 早坂 一 合原 渡 石岡勝彦

昭和59年1月15日、新春の明るい日差しを反射した青い海を一望するニュー熱海ホテルを会場にして恒例の新春座談会が開催された。

広瀬会長のあいさつに続いて安岡専門部副部長の司会により、各研究部の研究経過、集録のまとめのめやすについて報告された。

以下、「本年度の研究をふまえ、残された問題、59年度への研究の抱負」について専門部及び各研究部長に語っていただいた。

○専門部

特別活動の特質の一つは、実践活動であるから、研究も実態を持ちより実践を確かめながら進めたい。教育課程の改訂後は、どうしても理論的な研究が多かったが、年々、実践的な研究が少しずつふえてきた。本年度は、どの研究部も、いわゆる「きれいごと」や「理想」を話し合うのではなく、各地区や各学校の実情に応じて、「あるがままの姿」から出発し、少しでもよりよい方向へ高めたという実践事例を出し合い、これらの事例を中心に研究が進められている。さらに、研究授業や発表及び集録の原稿執筆など、若い先生方が意欲的・積極的に取り組む姿勢が多くなったことは心強い限りである。

特別活動は、教師の共通理解の最も大切な領域であり、教師によって集団の発達も差異が見られる。来年度は、「望ましい集団活動を通して……」という特活の本質をふまえ、好ましい集団の発達課題と特活のあり方についての研究が一層深められればよいと考える。

○学級会活動研究部

57年度の研究と反省をふまえて、残された課題から、学級会活動が、週一時間の活動だけでなく、児童の学校生活全てに関連していることがわかった。特に指導する教師の学級経営そのものに左右される傾向がある。そこで、本年度は、学級経営を基盤とした学級会活動のあり方をテーマに研究を進めてきた。

本年度は、研究の糸口として、授業研究を進めて、その中から学級経営と特別活動、とりわけ学級会活動との関連をさぐるうとした。授業そのものは、指導案の中に、学級目標や方針がもりこまれ、その時間に何をねらっていたのかがわかり、成果があげられた。しかし、研究のまとめの段階で、学級経営と学級会活動との関連のとらえ方が、不明確であったために、問題が残った。来年度の研究の方向は、授業研究を中心にして、その関連を明確にするために研究

を深めていきたい。

○ 児童会活動研究部

- 全都的な特別活動の動向をふまえ、全体テーマを設定する。また、それに付随した基調提案のようなものを専門部を中心にきちんと作成し、4研究部がそれらをきちんと受けて研究がすすめられるように切望したい。
 - このためには、役員会や専門部会又は部長会を早い時期に開き、共通理解を決めておく必要がある。
- 全都的な特別活動実施の実態を把握するために、しかるべきアンケート調査の実施が必要であると考え。
 - 児童活動（学級会・児童会・クラブ）の特質をふまえた適切な指導とは何か、その本質論を究明したい。
 - いわゆる「ゆとりの時間」と児童会活動とのかかわりについて、今後さらに研究を深めていく必要性を痛感している。

○ クラブ活動研究部

クラブ活動の特質を高める集団活動のあり方を研究課題として研究を進めてきた。

クラブの構成のあり方では、どうしたら1つの学年だけのクラブや男だけ、女だけのクラブが出来てしまうのだろうか。クラブだけの問題でなく、学校全体の問題として普段から取り組んでいかないと解決しない。また、クラブ長・副クラブ長などリーダーの育成はどうあるべきか、よりよいクラブ活動に向かってどのようにしたらよいかの研究を深めてきた。

実態調査の問題点から研究課題を求めてきたが、どうしても調査に追われたり、その都度出席者が異なるため2度3度と同じ問題を繰り返したりした。今後は、年度当初に前年度の反省や今後の課題から、早い時期に研究課題を決め、研究に取りかかりたいものである。実態調査は研究と併行したり、研究の結果必要に応じて実施するようにすれば、充実した研究が出来るものと考えている。

○ 学級指導研究部

57年度に引き続き、「授業を通して指導過程のあり方と資料の活用を考える」をテーマとし「展開部分の深め方の工夫」のサブテーマを設け、研究を進めた。

展開部分は、学級指導の授業における中心であり、問題に対する原因追求、対処の仕方などの方法理解、児童自身の意志決定が行われる重要な場面である。

本年度、3つの授業を通して感じたことは、子どもは生きているんだ、それぞれの環境の中で、ということだ。授業を展開するには、その主題に対して、一人一人の実態をとらえ、指導過程を組んでいく必要があると感じた。また、資料一つとっても、なんのために使うのか、どの部分で使うのか、作文の方法をとるのか説話の方法をとるのか等、工夫の余地はたくさんある。

来年度は、導入・展開部分を充実して展開した上で、実践力を身につけさせる点で重要な意味を持つ終末部分に研究の視点を当てていきたい。

講演要旨

『特別活動の歴史と展望』

文部省初等中等教育局主任視学官 青木孝頼

私自身が文部省に入りましたのは昭和33年1月でした。33年と申しますと、道徳を特設した年であり、まずその仕事から取り組んだのであります。実際には委員会を開き経験豊かな先生方のお力によって学習指導要領(以下指導要領と書く)の改訂がなされたわけです。担当者の1人として私自身小学校の内容がよくわかりませんでしたので、昭和22年と26年に出された指導要領一般編を丹念に読み一応理解いたしました。そして改訂の仕事を終えました。ご承知のように名称を小学校においては『特別教育活動および学校行事等』の2つの領域の教育活動としてまとめられたわけです。これ以前は『教科以外の活動』といていたものをこの2つにまとめ、そして各教科、道徳ということで当時は教育課程は4領域で編成するということにしたわけです。

昭和26年の指導要領の知識で各学校の実際の活動場面を見させていただく機会がふえたわけですが私が理解していたような活動が実際に行われているかどうかということに気づいたわけです。昭和26年の指導要領には教科以外の活動として例が示されていましたので、当時の学校でもすでに学級会活動、児童会活動、クラブ活動は行われていました。そこで私自身拝見してみますと26年の指導要領一般編に書かれているような趣旨の教育活動が展開されていない学校が多いことに気づいたわけです。どのように違っていたかと申しますと26年の指導要領にはおよそ次のように書かれています。『学校にはさまざまな教育活動がある。その中には正規の教育活動として教育課程に位置づけられているものもあれば、また正規とは言わなくても、いわゆる教育課程外の教育活動として各学校でいろいろなやり方をしている学校もある。』と。当時の教育課程は教科が正規の教育活動でした。文化財の伝達だけを目標にするならば教科だけを教えておれば十分かもしれません。しかし日本はこのような考え方だけでは来なかったわけです。事実、大正から昭和の初期にかけても全国のいくつかの学校では教科だけでなく特別活動にあたるような活動がありました。これは全国的に広まることもなくて、昭和10年代にはほとんど陰をひそめてしまいました。そして戦後、昭和22年、26年の改訂期に次のような考え方が急に強まってきました。それは、学校教育目標が単に文化財の伝達だけでいいという時代ではないということです。教育機能をもっと広くとらえ、子供の全人的発達をすべて助長するのが学校教育の目標である。ということです。そこで、教科だけでは不十分で全人的発達を促すためには教科のほかに子供自身の経験活動を入れていくべきであり、その中には、子供の自治的活動を学校で行わせることである。というように変わってきました。現在それぞれの学校の教育目標は文化財の伝達だけを目標にしているものはほとんどなく、豊かな人間形成ということを加えています。(20数年前は全人的教育という言葉で示してあり

ました。

昭和26年の指導要領の『教科以外の活動』の趣旨として先に申しました子供自身の経験活動、特に子供自身による自治的活動をわずかでも学校教育の中に正規に位置づけるべきであると述べられています。このような自治的しかも教育的な集団活動が高く評価され、例示ではあります。このように自治的しかも教育的な集団活動が高く評価され、例示ではあります。その目で各学校の活動を見ていきますと、大部分の学校では子供の自治的活動が行われていない。そこで展開されているものは、教師の意図的・教育的指導であったわけです。学級会を例にとりますならば、教師が子供にこうあってほしいという意図を一時間の学級会の話し合いを通して実現する方向へ指導を加えていかれた。前もって教師が考え、意図していた通りの話し合いが進み、結論も教師が考えていた通りのものが得られた時、よい学級会だったと評価していたわけです。おそらくここに居られる先生方は『そんな学級会はない』とはっきり自覚されていらっしゃるでしょうが当時はそれが学級会だったわけです。そういった状態を拝見いたしました時に、これは私自身の解釈がまちがっているのか、それとも、全国のほとんどの学校がまちがっているのか、どちらかである。結局、私どもとしましては全国の先生方がまちがっているということで、これを何とか改めなければ昭和26年の指導要領の趣旨が通らない。その趣旨を受けて昭和33年の指導要領が作られていますし、また昭和43年の指導要領にも受け継がれているわけです。そこで、これは相手が多様であろうと変えなきゃいけないということになったのです。

さて昭和20年代から30年代にかけて、なぜそういう児童活動が行われていたかといいますと、これは学者によって解釈が違いますが、私自身次のような解釈をしております。それは昭和20年の敗戦後アメリカの教育の影響をかなり受け、日本の教育界が新しい教育思潮として、全面的に受け入れた教育理論としてガイダンス理論があります。これによるものと思われます。ガイダンスという言葉の解釈についてはゆれ動き、はじめは指導、次に生徒指導となり、そして生活指導と変わり定着しました。ガイダンスは2つのやり方に分類できます。ひとつは、その場その場における必要なガイダンス。もうひとつはガイダンスだけのために特に一定の時間を設けて行うガイダンス。このガイダンスは計画的に行うものでした。日本で取り入れた時に前者は抵抗なくやれましたが、後者は時間をどこにとるかという時に、それを学級会活動の時間にとったわけです。一週一時間の中にとることで昭和20年代から30年代にかけて全国的に広まっていきました。学級会活動の時間にある学校では学級指導に道徳を加味したようなものだったし、また別な学校では生活指導でありました。これに加えてソ連の影響の集団主義教育が広まりました。最盛期から比べれば、それほどでもないともっていますが、生活指導という名で日本の中に定着したのです。ソ連の中に個より集団を優先するとはっきりうたっています。これを日本の学者たちは修正して、日本は集団のために個を犠牲にしないで、個も集団も尊重するというようにした。この流れが生活指導に受け入れられました。朝の会をどのようにやっていくか、班作りをどのようにやっていくか、これに対して子供の自治的学級会にしたい、自治的クラブにしたいということで、賛同者も多く全国的に変わってきました。

現在の自発的、自治的活動は常識としてあります。それにもかかわらず、教師の意図が強い活動が現在でもなお行われている。この点、みなさんの学級、学校の問題として、これをいつもふりかえってみていただくことが必要ではなかろうかと考えます。まだ教師の意図が強いと思われるのは昭和20年以前のものであるということに気がつけていただきたいと思います。

学級会は自治的にやってほしい。それではこれまでやってきた生活指導はどこでやればいいのか。この考えが当然出てきたのです。答えは2つしかない。ひとつは学校行事等の中でやる(学校行事以外のところで)。もうひとつは教育課程以外の活動でやるようにする。たとえば朝の会、帰りの会などである。しかし何年も生活指導をまじめに取り組んでこられた先生方には不十分であると思われました。そこで昭和43年の指導要領の改訂の時、学級指導の柱を設け、従来考えられていた生活指導を学級指導の中で行うことにし、学級会の時間にもちこまないように十分整備されてきました。

児童活動につきましては、教師の狭い意味でも意図的指導はやめてみよう。一人一人ぜひやってほしい。広い意味でとりますと、学級会を時間割の中に位置付けたり、クラブの時間数を計算したりすることが意図的、計画的意味になりますが、そうでなく、もっと狭義の意図的、計画的なことはやめてほしい。それに徹していただければ、ほとんどの学校で短期間(1年あるいは2年)に自治的活動がめざましく変化をとげて展開されるであろうと考えています。これはむずかしいことではありません。先生方はむずかしいと言われる。それは子供自身に自治的活動の能力があるか、ないかで見ているか、ないかで見ているかです。先生方は子供は能力が身についていない。できない。という前提になっています。ところが、子供は発達段階に応じて1年生なり、2年生なりの自治的活動の能力があるのです。それが無いと「何年かたって身についたらまかせましょう」が多いのです。これでは何年たっても身につかなくて自治的活動はむずかしいと考えます。小学生が活動するわけですから、大人が期待しているようなものは出てこないでしょう。しかし5年生は5年生なりの活動はできる。それをやればよいと考えていただければ楽になります。こんな程度しかできなかったとがっかりされている。それは先生の要求が高すぎたわけでそんな大人のりっぱな自治的思考をもっているからだめなのです。最初から期待してはいけません。やれる子供なりにやらせない人が常に1人いる。こう考えていただければいいのです。『指導がなくてはならない。』この指導は最後の『先生の話』のところで必ずきちんと指導してほしいのです。これが無いと指導者とは言えません。それ以外のところでは見ていてほしい、できるだけやらないでほしいのです。そのすれば子供は必ず動きます。委員会にしても、クラブにしても、必ず自分たちでやります。こういうやり方に切り換えれば、去年までと比較して、見違えるようになってくるはずですが、また、終わりまで何も言わないかと言うとそうではありません。教育活動の中で必要ならば指導しなければならないところが出てくる。おこななければならない時はおこるのです。それを見過ごしているならば指導者として適切ではありません。どういう場合に言わなければならないか。これは子供の活動が自治的範囲をこえる場合は必ず指導しなければならない。学級会活動は自治的活動であるが、

無制限に行われていい自治ではありません。教育的に設定された自治的活動の範囲を教師が心得ていなければならない。そしてその心得方は全校で共通しておさえられているべきである。それが指導計画であり、学校ごとになければならない。それを逸脱するものは認めないのだという計画を各学校できちんとおさえしてほしいのです。これがあるとどの先生も同じようにやるものであるし、これができていない学校は担任によって指導のしかたが違ってくるわけです。たとえば、司会の輪番制。あるクラスでは交代制。あるクラスでは固定制。これでは子供が不幸である。司会ひとつにしても指導計画をきちんとたてて歩み歩調でやれるような学校でなければならない。そのためには校長先生の考え方が大事になってきます。今もって教科の学力だけを強調している校長先生は時代遅れで、みんなで取り組んで豊かな人間形成に役立つということをやってみようとする時に、相変わらず教科だけに力を入れている校長先生は20年ほど前まででよかったのです。豊かな人間形成を考えるならば、一番弱いところは八割がた特別活動であります。これからの課題として校長先生方には考えてもらいたいのです。道徳をつぶして学級会や学級指導をやるのではよくない。学校の計画を計画的にやっていない証拠です。

学校行事につきましても、ほんとうに計画的に実施しているところは少ない。運動会を春に実施する学校がありますが、一年生にとってはできるものではありません。4月以降、約半年間体育などの指導をしてきて、その結果を運動会で結集できればいいわけですから、秋が望ましいのです。また運動会のための練習だけをやっているはいけません。学校の計画に基づいて計画的に学校行事の特質をふまえてやっていかなければなりません。その特質とは私なりに3つ考えています。

- ① 総合的教育活動の場である。教科等で培われたものも多いので、行事のために多くの時間をかける必要はない。
- ② 生活に節目をもたせるものである。言いかえると秩序と変化をもたせるものである。
- ③ 大きな集団活動の場である。学年単位、あるいは学校単位という集団の活動の場である。

以上の3つが満たされなければ学校行事としてはふさわしくないのです。そして学校というところは楽しく、きびしく、暖かいところでなければなりません。

今後の展望といたしましては、個人的見解としまして、学級指導をふやせるようにしてみたいのです。ということは切実感は中学校にあるわけですが、小中一環した教育を何とか実現したい。できるかどうかは未知数であるのですが何とか……。それを果たすためには、裏付けとしての実態をとっていただきたいのです。そして計画をきちっとたてた学習指導を行ってほしいのです。全体的に指導要領では時間数をおさえる方向ですので計画的に必要性を感じてやってほしいと思います。

昭和58年7月4日 都特活20周年記念講演 於 滝野川小より収録

(文責 編集部)

I 学級会活動

テーマ 「学級経営を基盤とした学級会活動の在り方」

I まえがき	11
1. 研究主題について	
(1) 学級経営と学級会活動	11
(2) 個と学級集団を成長させる学級会活動	12
2. 研究への取り組み	13
II 実践事例	
1. 「林間のバスの中でのリクレーシヨンを計画しよう」	14
品川区立戸越小 5年 浅井学級	
2. 「ファイトだ、ソフト・ボール大会をしよう」	17
小平市立第三小 5年 野村学級	
3. 「おもしろまじめの班対抗新聞コンクールをしよう」	20
江東区立南砂西小 5年 松村学級	
4. 「なかよく指ずもう大会をしよう」	26
武蔵野市立関前南小 4年 森学級	
5. 「冬休みの、自分たちの宿題を決めよう」	29
江戸川区立第四葛西小 5年 名取学級	
III 研究の反省と今後の課題	32

◀ 学級会コーナー ▶

コーナー 1.	学級集会における教師の指導助言	13
コーナー 2.	係活動のくふう	16

○ 研究の経過

58. 5. 26 (火) 定期総会, 分科会, 組織づくり, 学級会の問題点を出し合う。
 58. 6. 27 (月) 研究の方向について, 研究テーマ検討, 決定
 58. 7. 12 (火) 授業研究 品川区立戸越小 5年 浅井学級
 58. 9. 16 (金) 授業研究 小平市立第三小 5年 野村学級
 58. 10. 12 (水) 授業研究 江東区立南砂西小 5年 松村学級
 58. 11. 18 (金) 授業研究 武蔵野市立関前南小 4年 森 学級
 58. 12. 8 (木) 授業研究 江戸川区立第四葛西小 5年 名取学級
 59. 1. 12 (木) 執筆原稿検討
 59. 1. 20 (金) 執筆原稿検討
 59. 2. 17 (金) 研究発表打合わせ, 諸準備
 59. 3. 1 (木) 研究発表会

研究・執筆者名簿

部 長	大谷 武夫	港 ・高輪台小	桜井 晴美	豊 島・池袋五小
副部長	飯沼 宏	立 川・柏 小	松本 展子	豊 島・平 和 小
(司 会)	飯田 晃	中 野・上高田小	山口 雄民	北 ・王子二小
(発 表 者)	吉田 健治	板 橋・金 沢 小	小泉 信義	北 ・滝野川五小
(司 会)	名取 幹夫	江戸川・第四葛西小	橋本 利男	北 ・志 茂 小
(発 表 者)	野村みや子	小 平・三 小	佐藤 晴彦	荒 川・尾 久 小
(記 録)	松村 二美	江 東・南砂西小	篠崎 淳子	荒 川・尾 久 小
	松原 茂	中 央・有 馬 小	高野 フサ	板 橋・板橋二小
	穂積 輝子	新 宿・淀橋一小	久富美智子	板 橋・高島二小
	藤田 研治	文 京・駕籠町小	柴山 守	足 立・綾 瀬 小
(記 録)	山本 英一	文 京・柳 町 小	鈴木 毅	葛 飾・新小岩小
	木部 久子	文 京・関口台町小	揚野 好子	江戸川・上小岩小
	菊池 啓子	墨 田・文 花 小	森 秀伸	武蔵野・関前南小
	浅井 良久	品 川・戸 越 小	高橋 大造	府 中・住 吉 小
	若月 秀夫	品 川・大井一小	森田 公子	昭 島・つひ丘小
	清水 一豊	目 黒・八 雲 小	両部一江子	昭 島・東 小
	秋元 桂子	目 黒・東 根 小	福元 弘元	小金井・本 町 小
	宮崎紀代美	大 田・多摩川小	鶴沢 典子	小 平・四 小
	池田 繁子	茨 谷・常盤松小	鈴木美津子	東村山・東萩山小
	大数見 仁	中 野・大 和 小	高野 富	東村山・東萩山小
	金成 美枝	杉 並・西 田 小	木内 悦雄	多 摩・西永山小

I まえがき

1. 研究主題について

(1) 学級経営と学級会活動

① 学級経営をどうとらえるか。

日常のすべての教育活動は、教育目標（学校の教育目標）の具現化をめざすものでなければならない。

学年の児童の心身の発達的な特徴を考慮し、教育目標（学校の教育目標）を基に、達成しうる学年の目標を定める。学級担任は、学級の児童を理解し、ひとりひとりの児童と学級集団に対して、各教科・道徳・特別活動・その他の教育活動を通して働きかける。それらの教育活動のねらいを十分に達成することによって、好ましい人間関係で営まれる豊かな学校生活、豊かな学級生活を学級のすべての児童に体験させ、豊かな人間性を育てるわけである。

したがって、学級は目標をもった集団でなければならない。その目標を実現するために児童は多面的な活動が要求される。児童が要求された多面的な諸活動に答えるためには、各教科・道徳・特別活動・その他の教育活動の特質とねらいを十分に把握し、児童ひとりひとりの個性と学級集団の特質をふまえ、学級担任自身の個性を生かし、学級集団が目標に向って十分に機能するように、教育活動の計画立案、集団の条件整備、学習環境の整備をすることが当然必要になってくる。

以上のことを行うことが学級経営であると考えてるのである。

② なぜ、学級経営が基盤なのか

先に述べた様に、学級会活動が教育活動の一貫として行われることを考えても、学級経営と切り離して考えることはできない。学級会活動をより確かにするためにも、もう一度学級経営の中で見直す必要があるのではないだろうか。

なぜなら、学級会活動は学級の中で、児童ひとりひとりが自発的に学級の一員として何らかの社会的役割を受けもち、児童全員が共同の目的の下に行う自治的な活動であり、学級のふんい気や学級の全体的な傾向が生まれてくるものである。

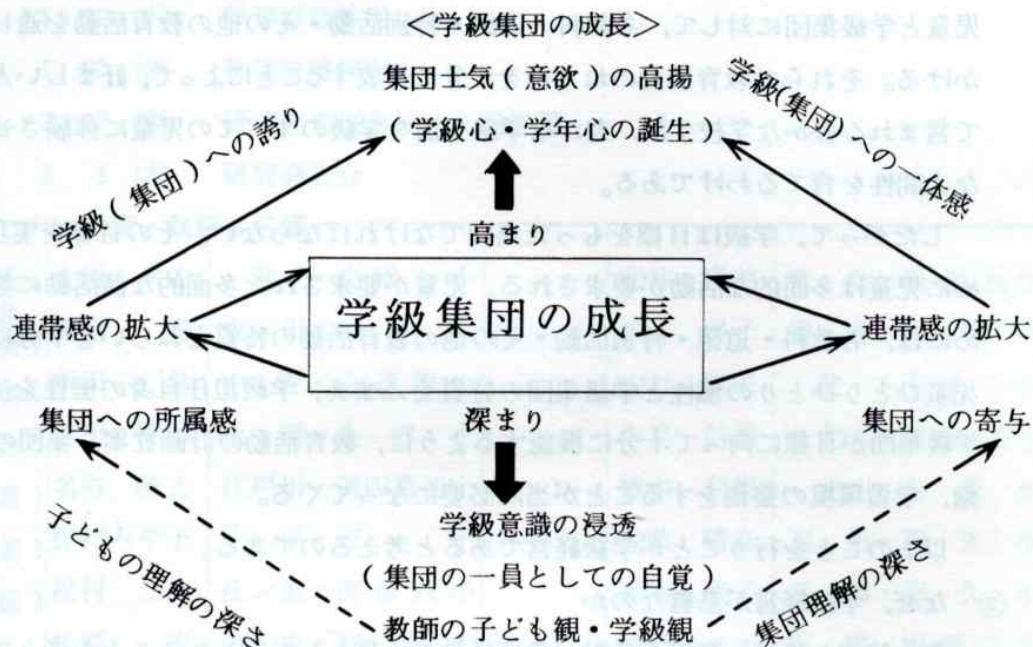
そして、話し合い活動では、潜在していた人間関係が顕在化してくることがしばしばある。また、係の所属や集会活動でグループを決定するときにも同様な問題があり、これらは学級会活動だけで解決することは難しい問題なのである。

研究会（話し合い活動の授業を見て）では、ともすると話し合いの技術を高めることが話題の中心になることがある。話し合い活動において、話し合いの技術が上手になることは必要なことであろう。しかし、週一単位時間の学級会の時間で、話し合いの技術を高めることが可能であろうか。むしろ国語科を中心とした他の教育活動で、話し合いに関する基本的な事項を指導すべきである。

そこで、各教科・道徳・その他の教育活動との関連を見直すとともに、児童の学級での生活の中で学級会が果たす役割を考える必要があるのではないかと思い、われわれ学級会活動研究部は、「学級経営を基盤とした学級会活動の在り方」を主題として設定した。

この主題は、全体テーマ「豊かな人間性を育てる特別活動」を受け、学級経営を基盤として学級会活動を見直し、学級会活動と他の教育活動の有機的関連をより一層確かなものとして、全体テーマ「豊かな人間性を育てる特別活動」に迫ろうとするものである。

(2) 個と学級集団を成長させる学級会活動



今年度、何回かの研究会で、講師の先生方にご指導いただいた。そして、個の成長をなくして学級集団の成長は有り得ないのではないかと考えるようになった。

上の図は、学級集団の成長に関して講師の先生からご指導いただいたことを図に示したものである。学級会活動は、日常生活の諸問題を全員で話し合ったり、学級生活の維持向上のために役割を分担したり、学級の全児童が集まって楽しく充実した生活を送るための活動などが内容としてあげられる。これらの活動は、集団の一員としての自覚を高めることに有効な活動であり、集団の一員としての自覚が高まることによって集団への所属感や集団へ寄与したいという心が育ち、連帯感が拡大していく。そのことが、学級への誇りや一体感を誘発し、学級心の誕生へとつながり、学級集団が成長していく。このことは同時に個の成長を意味するものであるのではないだろうか。

このことを授業(実践)を通して確かめようとしてきた。後にあげられる実践記録は、それぞれの学級集団の特質と児童ひとりひとりを理解して行われた実践である。これらの実践は画一的な実践ではなく、学級経営を基盤としたもので多面的な見地から見直された学級会活動であり、個と学級集団の成長を願うものである。

2. 研究への取り組み

本年度は、昨年度の研究「ひとりひとりが役割を意識し活動する学級会活動」の成果と残された問題点を見なおすことからはじめた。

第1回の部会で、各部員から、各地区、各学校、各学級での学級会活動の現状について、次のような問題点や悩みが出された。

- ・ 計画委員会の指導をどうしたらよいか、その活動の時間が十分取れない。
- ・ 係活動が班単位の当番活動になっている。
- ・ 低学年の係活動の在り方はどうしたらよいか。
- ・ 自分から進んでやるのが少ない、与えられたものとして、やっている傾向がある。
- ・ 担任が児童に愛情を持ってやるのが先決である。
- ・ 活動が低調のため代表委員会で苦勞する。
- ・ 活動内容を見直して、学級の問題としてやっていく。
- ・ 担任が「学級会」が好きであるかどうかによって、活動が左右される。
- ・ 学級経営を見直して、学級経営を通してやっていかなければならないのではないのか。

以上の様な事柄から、結局、指導する教師の学級経営と大きな関わりがあるのではないかと考えた。

そこで、部員同志、学級経営を見直すことから、研究を進めていくことにした。

研究を進め、また、深めていくために、授業研究を通して検証していくことにした。

研究の方向は、次のような考えで行った。

- (1) 各地区、各学校の学級会活動の現状を話し合い問題点を分析する。
- (2) 昨年度の問題点、部員から出された問題点からテーマを設定する。
- (3) 授業研究を中心に問題点を分析し、テーマに迫る。
- (4) 講師をお迎えして、授業後の問題点、方向づけなどのご指導をいただく。

— <学級会コーナー 1> — 学級集会における教師の指導助言

学級会活動は自発的活動であるということで自由放任の状態であったり、また反対に結果のみを重視した過剰な指導であったりする実態を見うける。学級集会もその例にもれない。そんな中で、これが本物だという5年生の学級集会を参観した。この集会までの指導助言はどうだったのか担任の先生に聞いて見た。

- ① この集会のめあてを考えさせ、形式的な研究発表会にならないよう助言した。
- ② テーマの設定と、練習計画作成では、教師の経験や他校の例などを情報として提供して、計画全体に無理がないようにした。
- ③ 経験を生かした発表形式を工夫するよう助言した。
- ④ 各係や各グループに活動予定表をつくらせ、集会までの見通しをもって進めるよう助言した。

学級集会における教師の指導助言の大切さを改めて考えさせられた話であった。

〔実践事例 1〕

品川区立戸越小学校

5年3組（男19名、女21名）

指導者 浅井 良久

1. 本学級の研究主題

「学級経営に基盤を置いた学級会活動の指導の工夫」

————— 話し合い活動を通して —————

2. 主題設定の理由

児童活動の基盤は学級会活動，とりわけ話し合い活動にあると考える。そして，その話し合いが意欲的に行われることが，活発な学級会活動へと結びつく。しかし，いくら話し合いが意欲的に行われても，その内容が自己中心的で他人のことなど全く考えていないような発言が多くては，望ましい集団活動は育たないであろう。

そこで，本学級では人権尊重の立場から，思いやりのある望ましい学級集団を作り上げるためには，どのような指導が大切なのかを探るべく本主題を設定した。

3. 学級の実態

5年生になる時に学級編成替えがあり，最近やっとまとまってきたところである。学級会活動の経験もそれぞれさまざまで，話し合い活動に参加できない児童が多く，集会活動は「お楽しみ会」的なものが多く，係活動では当番活動ばかりという状況であった。しかし，経験を重ねるごとに改善されてきた。特に話し合い活動は，とても意欲的になり多数の児童が意見を発表できるようになってきた。これから育てなくてはならない点は，友達の意見をよく聞き自分の意見と比べ，よりよい方向へと話し合いを進められるようにすることである。

4. 指導の実際

話し合い活動が苦手な児童が多く，1回目の学級会は感心してしまうほど不活発であった。そこで，学級会ノートを作り事前に自分の考えを書かせるようにした。また，計画委員会も経験がなかったので，全員の前でやり方を指導した。やがて軌道に乗り学級会コーナーの活用も上手にできるようになり，学級会の3日前には予告ができるようになった。また，朝や帰りの会も十分に活用し，係や個人の発表を，どんどんやらせるようにしてきた。時には，テーマ（ごはんとパンはどちらがいいか・など）を決め，学級の児童を2つに分けて，短時間の討論会などもやってみた。

やがて話し合いの仕方が分かるようになり「話し合い活動」に抵抗がなくなってきた。教科は好きではないが学級会では生き生きと意見を発表したり，言語に障害を持っている児童も，一生けん命に自分の考えを発表できるようになった。議長団も輪番制にし，様々な経験をさせる中で，会を進める上で役立つような意見なども出てきた。話し合いは，できるだけ多数決をさけ，意見を十分に出させるように指導を続けている。

5. 学級会活動（話し合い活動）の実際 —— 授業研究 ——

(1) 議題 「林間バスの中でのリクレーションを計画しよう」

(2) 選定経過

1学期に入り8回目の話し合い活動である。学級会係が議題案を整理・分類した。「みんなのねがい」コーナーに議題案を掲示しておき、帰りの会で選定を行った。（7月5日）
 ・学級のマーク（旗）を決めよう・けん玉大会をしよう・音楽のグループで対抗合奏をやろう・林間のバスの中でお楽しみ会をやろう・おばけ屋しきを作ろう…などが出された。提案者が提案理由を公表し、意見を出し合った結果、全員で上記の議題に決定した。

(3) ねらい

- 一人でも多くの児童が自分の考えを公表できるようにする。
- 友だちの意見をしっかり聞き自分の考えと比べられるようにする。
- 実践可能な計画を立てられるようにする。

(4) 実施計画

第 8 回 学 級 会 の 計 画				
議 題	林間のバスの中でのリクレーションを計画しよう。			
めあて	明るく楽しくできるような計画を立てよう。			
役 割	議 長	狩 野 祐 樹	黒 板 書 記	上 妻 貴 行
	副 議 長	上 野 章 江	ノ ー ト 書 記	伊 達 南 美
提 案 理 由	バスの中は、箱根林間につくまで時間が長いので、その間にみんなでお楽しみ会をやりたい		提 案 者	須 永 朋 美
話 合 い の 順 序	1. はじめのことば 2. 役割の紹介 3. 議題とめあてのたしかめ 4. 提案理由の発表 5. 質 問 6. 話し合いの内容と順序、時間の配分を説明 7. 話 合 い ① やることを決めよう。 ② グループの分け方を決めよう。 8. 決まったことの発表 9. がんばった人の発表 10. 先生の話 11. おわりのことば			
準 備	原 案 バスの座席表			

(5) 指導上の留意点

- みんなが発言できるように、自分なりの計画をカードに書いて発表させる。
- めあてにそった意見が出せるように意識させる。
- 意欲的な話し合いができるような学級の雰囲気大切に作る。

(6) 評価

- 多くの児童が自分の考えを発表できたか。
- 友だちの意見と自分の考えを比べられたか。
- 実践可能な計画を立てられたか。

6. 指導後の児童の変容

「友だちの意見を聞いていたら自分の考えが変わりました」とか、「私の考えは〇〇さんと同じようなので二つ合わせて〇〇〇にしたいと思います」など活発な話し合いの結果、林間学園に参加する姿勢が意欲的になってきた。各グループごとに積極的に準備をやり始めた。

夏休みに入り心配な面もあったが、係やグループで集まり計画・準備をきちんとやり当日をむかえることができた。バスの中を飾り、雰囲気を盛り上げ、司会もスムーズに進行できていた。グループごとの出しものもバスの中ということを考え、それぞれ工夫してゲームや歌などを楽しみ、時間のたつのも忘れ目的地に着くことができた。

7. 反省と今後の課題

簡単に多数決を採らずに、“じっくりと話し合う”ということをしつこく続けてきた結果自分と反対の意見に対しても耳をよく傾け、よりよい結論を出そうとする姿勢が身に付いてきた。自己主張ばかりではなく、一致する考えをさがしたり、“よい”と思った意見には、素直に同調することもできるようになった。更に小さな問題については、朝や帰りの会で、すぐ話し合いが始まり、自分たちの手で自発的・自治的に解決しようとする姿勢が現われてきた。このように、話し合い活動は意欲的になってきたが、「問題に気付く」という点がまた弱いので、経験を積み重ねながら、問題意識を高めるように指導を続けていきたい。

＜学級会コーナー 2＞—— 係活動の工夫 ——

学期はじめは比較的に活発に活動するが次第に停滞し、マンネリ化の傾向が目立ってくるようになりがちである。そこで、活動計画の中に、常時活動以外に、どの係も学級全体に働きかける活動内容を盛りこませた。

- 例. • 新聞係 班紹介の新聞を班毎に作製してもらい、表彰をする。 • 飼育係 メダカ等の飼育している生き物について調べ、クイズ形式の問題を作り、クイズ大会をする。 • 図書係 個人やグループで絵本を創作してもらいコンクールをする。

目先のかわった活動に子供達は、自分の発想が生かされ、積極的に仕事に取り組み、クラスのみんなが喜んでくれたことに満足し、係は更に活発となる。

【実践事例 2】

小平第三小学校

5年2組（男18名 女17名）

指導者 野村みや子

1. 本学級の研究主題 連帯感を育てる学級会活動の在り方

2. 主題設定の理由

素直でおとなしい児童が多い学級である。お互いの行動に関心が薄く、積極的に集団活動をしようとはしない。めんどろで回りくどい手続きや手順を避けて、教師の指示を待って行動するような傾向がある。友だちとの遊びは、三人以上で遊ぶということが少なく、二人で遊ぶ方がトラブルも少なく、楽でよいと考えている児童が多い。

これでは、人間関係が希薄になり、集団で力を合わせて事を成し遂げる素晴らしさを味わうことが出来にくくなる。

このような実態をふまえて、学級経営の重点目標に、“連帯感を育てる”ということを設定した。特に、学級会活動の中で、最も連帯感を育てることが可能であると考え、以下のような指導を行った。

3. 学級の実態

明るく、まじめできちんとした生活態度の児童が多く、教師の指示したことには素直に従うが、みんなの知恵と力を出し合って創造的な活動をするという面はあまりみられない。ボスのな児童が一人もいない。温和な雰囲気、けんかが少ない。休み時間や放課後、大勢で遊んではいるが、下校後も親しくするような強い友だちどうしの結び付きは少ない。

5年生になる時に編成替えのあったクラスである。当初の学級会の話し合い活動では、人の話はよく聞かすが、あまり自分の考えは発表しなかった。また、発言の声小さく、語尾のはっきりしない者が多く、よく発言する者は、数名に限られていた。係活動に対する意識は、奉仕的な活動をするというイメージが強く、創造的な活動を考えようとはしなかった。集会活動は大好きである。しかしながら、立案計画、実施までの推進の仕方、調整、点検などは、そのつど、教師の指示が必要であった。

4. 指導の実際

(1)前段の指導

学級会係を6人選出し議題収集、選定、計画委員会の持ち方、話し合いの進め方、実際の活動の推進、反省など、係の役目をはっきり理解させた。また、発言のルールを国語科で指導し、学級会活動で生かすようにした。個々の発言力を分析し、その力に応じて成長の度合を認め、さらに励まし、自信をつけていくようにした。学級会カードを6月から活用

し、事前に各自の意見をまとめさせた。中段の指導から行う予定の学級会係輪番性をスムーズに行うために、日直の活動の一つである朝、帰りの会の司会を全児童に十分体験させるようにした。

集会活動の中心に誕生集会を位置づけ、その中で協力することの楽しさ、一人一人が主役になれる素晴らしさ、友だちに目を向けることの大切さ、が十分味わえるようアドバイスをした。誕生会の内容の一つに“お祝いの言葉”というプログラムがある。友だちからの言葉（全員か各自カードに書いたもの）を手渡したり、家の人からの言葉を教師が代読したりする。このことは、お互いの連帯感を育てるのに大いに意味があると考えた。

(2) 中段の指導

前段の学級会ではほぼ基本の型ができたので、2学期初めという機会を利用して、生活班単位の学級会係の輪番制をとった。また、班と班の調整役として学級会まとめ役を置いた。

5. 学 級

—— 授業研究 ——

(1) 議題 ファイトだ！ ソフト・ボール大会の相談をしよう。

(2) 議題選定経過

9月5日(月) 議題会議（全員参加）①2学期の係を決めよう。②ソフト・ボール大会をしよう。③詩を作って発表しよう。④8、9月生まれの人たちの誕生会をしよう。の4つが出されたが、①を最初に行い、②は1学期からの懸案だったので次に行い、③、④の順で行うことにした。

9月12日(月) 第15回学級会「ソフト・ボール大会をしよう」についての計画委員会を開く。役割分担・話合いの柱を決定し、資料の検討をした。また、集会の愛称をつけることを決定し、原案を考えた。

9月13日(火) 朝の会で「ファイトだ！ ソフト・ボール大会をしよう」と議題名が決定。

(3) ねらい

①ソフト・ボール大会の相談のため話合いを通して、友だちの意見にしっかり耳を傾け、自分の考えが言えるようにする。

45分 40分 5分	時間 話し合いの順序	役割 話し合いの野君 話し合いの中村君 話し合いの田中君 話し合いの田中君 話し合いの東さん	計画委員会カード(6月)百層三頭(前)五年二組 学級会の実施日(第15回学級会)九月廿五(金)午後四時 議題「ファイトだ！ソフト・ボール大会」の相談をしよう 提案理由「みんな楽しくソフト・ボールをやりたい。」
	決まったこと		
			準備する物 ルールの説明 と書いた紙
			反省

②楽しいソフト・ボール大会が出来るような計画が立てられるようにする。

(4) 実施計画 前のページ，下段，計画委員会カード参照のこと。

(5) 留意点

①自分の考えを十分友だちに伝えられるように，あらかじめ学級会カードに意見をまとめておき，それをもとに発言できるようにさせる。

②学級会係が輪番制となったばかりであることから，進行のつまずきなど，フォローが助けてあげる発言もさせる。

③意見が分かれても，両者が納得のいくように話し合って結論を出させる。

(6) 評価

①楽しく仲よくソフト・ボール大会を行うために，一人一人の発言をお互いにしっかりと聞き合い，認め合うことが出来たか。

②楽しく仲良く行えるようなソフト・ボール大会の計画が立てられたか。

6. 指導後の児童の変容

10月半頃からは，話合いの時間配分，学級会係からの原案の提案が行えるようになり，短時間の中で充実した話合いが出来るようになってきた。定例の誕生会の内容も，よりおもしろいもの，自分たちに合ったものを考えるようになった。全員での議題会議の定着，昼食後の計画委員会の定例化，話合いの柱の予告，司会の仕方など，成果が上がった。

学級会に対する意識は，7月と12月では，大好き40%→44%，普通52%→56%，嫌い8%→0%となり，発言の量に対しては，よく発言する11%→16%，普通52%→72%めったに発言しないが，37%→12%と変容した。

なお，学級会が好きな理由として，児童が挙げているものをまとめると次のようになる。

自分自身の発言について“はっきり言える，発言できるようになって楽しい”と述べている。友だちとの関連については，“いろいろ分かり，友だちの考えも分かる，組のことを詳しく考えられる，発言すると答えを返してくれる，いろいろなことが，みんなで決められる，友だちの意見がおもしろいし，なるほどと感心する，いろいろな会が開ける”などである。友だちの前に自分を素直に出せるようになったり，仲間意識も出来てきた。

なお，学級指導で友だちどうしのトラブルなどの話合いの折も，相互に悪い点を指摘し合っても素直に反省し，問題が後に残らないようになった。相互に高め合える学級になりつつある。

7. 反省と今後の課題

児童相互の連帯意識は強くなりつつあるが，楽しく仲良く活動するという段階である。今後は，より強い連帯意識を育てるために児童相互が一層協力せずにはいられないような創造的で魅力ある内容をみつけながら，学級会活動を盛り上げていく必要がある。

〔実践事例 3〕

江東区立南砂西小学校

5年2組（男子22名 女子22名）

指導者 松村 二美

1. 本学級の研究主題

すべての児童に活躍の場を持たせる学級会活動の在り方。

2. 主題設定の理由

一人が三步前進するより、クラス全員が一步前進するような学級にしたい。これが、私の学級経営の方針である。しかし、残念なことに、学級会活動は、特定の児童の発言で話合いが展開し、実践化の段階でも興味と積極性がある児童に独占されがちであった。このままでは、特定の児童だけが活動できる喜びを知って終わってしまう。児童は、誰しもみんなの役に立ちたいし、認められたいと、ひそかに活動の場を待っている。役に立てる場、認められる場がないと、その気持ちは生かせない。だから、活動の場を与えてやらねばならない。児童は、一つ一つ活動の場をふまえて大きくたくましく成長するものである。経験なくしてリーダーは育たない。児童の自主的・自発的活動の原動力となるのはリーダーとしての経験であると考える。すべての児童にリーダーとしての活躍の場を持たせたら、学級会活動は、ますます活発になるのではないかと考え、本主題を設定した。

3. 学級の実態（当初）

編成替えをした学級である。

話合い活動には、女子より男子の方が興味関心を持っていて、意欲もあるが、特定の児童の発言で話合いが進行する。時には、数人の男子が1時間のうちに10数回も発言して、それで決まる傾向にある。また、情緒不安定児が数名いて、誰かがけんかごしに泣きながら学級会が進んでいくこともある。反面、女子の発言は、ほとんどない。今迄に一度も発言の機会を持っていない児童が7名もいる。議長団も5年生になって初めて輪番制にしたため、話合いがスムーズに進展しない。フォロワーの中には、議長を助けられる児童も少しずつではあるが出てきている。

係活動は、5月半ば頃より活動を開始したため、6月現在、まだ軌道にのっていない係もある。しかし、掲示係は、いち早く新聞を発行した。図書係は、4種類の貸し出しカードを作り活動も順調である。飼育係も、メダカや学級園の世話をよくしている。活動時間の確保が困難。

集会活動は、好きである。転入生を迎え、その日のうちに開いた歓迎会は、20分休みと昼休みしかない準備時間がなかった割には結構うまく進めていた。しかし、一部の児童が活動を独占していた嫌いがある。男子は、明朗・活発で個性的、女子は、消極的でやや迫力に欠けるが、こつこつと地道に活動する。最近、男女仲よく遊ぶ姿も見られるようになった。

4. 指導の実際

- 学級会とは何かという点を学級指導であつかった。
- 4年生迄は固定化していた議長団を輪番制にした。役割を分担することによって議長団の身になって考え、次回から議長団を助けようという意識が持てるようにした。
- どんな小さな活動でも、どんな幼稚な活動でも、それが自主的自発的に行われたものであれば、オーバーに賞賛した。
- 話し合い活動は、国語科を初めとした各教科や日頃の学級経営が基盤になるので、常日頃から発言できる学級に育つようにしてきた。
- 集会のための話し合いは、帰りの会やゆとりの時間をあてた。
- 班の話し合いや、係の話し合いの場を少しずつ持たせるようにしてきた。
- 計画委員会を定期的に関かせ、能率的に話し合いを進めるように助言した。
- 発言しようと思ってもなかなか発言できない児童には、同じ考えの友達の発言に注目し、拍手をするように指導する等の配慮をした。

5. 学級会活動(話し合い活動)の実際 —— 授業研究その1 ——

- (1) 議題 「5の2のみんなで楽しめる時間と楽しむ内容を決めよう」
- (2) 議題選定経過 先週、議題箱に入っていた議題、直接計画委員会に申し出があった議題、教師が日記から発見した議題は、次の通りであった。① 係活動をみなおそう。② 野球大会をしよう。③ 学級の歌を作ろう。④ 学級で何かを飼おう。⑤ 5の2のみんなで楽しめる時間と楽しむ内容を考えよう。以上である。検討した結果①は、まだ活動を十分行っていない係もあるので、もう少し先にのぼす。②は、運動会が1学期なので2学期頃にやった方がよい。④は、今メダカを飼うのに精一ばいなので我慢しよう。③と⑤にしぼられて、⑤の方が、毎日の学校生活と関係があるので、先やりたいという意見が圧倒的だったので、⑤に決定した。
- (4) 実施計画

第8回学級会		6月8日(水)			
議 題	議 題	5の2のみんなで楽しめる時間と、楽しむ内容を考えよう。			
	議 案	1. 5の2のみんなで楽しめる時間と、楽しむ内容をみんなでよく話し合って決める。 2. 発言者の方をよく見る。			
題 意	提 案 者	レクリエーション係 (森田、阿久津、斉藤、森久保、竹内、森繁、渡辺)			
	提 案 理 由	1. 個人個人で本を読んだり少数で遊んでもあまり楽しくないの でみんなでゲーム等をして楽しくしたい。そうしたあとは勉強も より楽しい。 2. 朝の十分間や給食の時間や放課後をむだに使っているもった いない。 3. クラスのみんなで何かをやると仲間ははずれがなくなりもっと まとまる。 4. みんなで時間を大事に使ったら、もっとみんなが発言できるよ うになるかも知れないから。			
話 合 い の 順 序	議 長 団 員	議 長	岸 健幸	ノート書記	小沢 直之
	副 議 長	安藤 礼子	黒板書記	荒井 崇宏	
	発 言 記 録	平野 真弓			白尾 里奈
話 合 い の 内 容	1. 初めの言葉	2. 歌	3. 議題とめあての確認		
	4. 提案理由の説明と質問	5. 話し合いの順序の確認			
	6. 話し合い (1) いつやるか (2) 何をやるか (3) いったい何をやるか (4) だれがやるか (5) 賞品や賞状は作った方がよいか				
	7. 決まったことの発表	8. 議長団からの感想・反省	9. その他の人からの感想・反省	10. 先生の言葉	11. 終わりの言葉

(3) ねらい

- ① 一部の者だけが楽しめる内容でなく、あくまでもみんなで楽しめる内容を、みんなでよく考える。
- ② 発言者の方をよく見、よく聞く。

(5) 指導上の留意点

- 5の2のみんなで楽しめる時間と、

楽しむ内容をよりよいものにするために、一人一人に自分の考えをもたせ、発言できるようにさせる。

- 発言力をつけられる機会がある内容もとり入れるようにさせる。
- 全員を何らかの担当者にし、仲間意識が高められるようにさせる。

(6) 評価

- 議長団やその他の児童が自分の役割を果たしたか。
- 全員が、みんなで楽しめる時間と楽しむ内容をよりよいものにしようという意識を持ち、その内容は発言力をつけるものや、仲間意識が高まるものを取り入れられたか。
- みんなが担当できるものもあるか。

6. 授業研究その I の活動の様子と問題点

- 運動会のすぐあとで、計画委員会を開く時間がほとんどなかったので、話合いの柱を精選できず、話合うべき内容が多すぎて残ってしまった。
- 5年生になって初めて議長団をやるという児童ばかりがいる班に議長団の順番がまわってきたため、進め方がスムーズにいかなかった。おまけに副議長の女子は、ふだんほとんどしゃべらない児童だったので、多勢の参観者の中でますます萎縮していた。
- 一部の男子のみ意欲的で、同一人物が、同じような意見を、何度もくり返し発言していたため議事が進行しなかった。
- レクリエーション係が事前にとったアンケートで“何をやるか”の内容は、全員が書いていたので、その時迄に1度も発言していなかった児童の発言に期待していたが、とうとう全員の発言は、見られなかった。
- 話合う内容がみんなに十分に意識づけできていなかったなので、話合いが盛りあがらなかった。

< 問題点 >

- ① 10数回も発言する児童への指導・助言 ② 今迄で全く発言しない7名への指導・助言
③ 議長団の育成 ④ 計画委員会の指導の徹底 ⑤ 各教科での発言の機会の見直し
⑥ 話合いの柱の研究 ⑦ 個人の変容の追跡 等が考えられるので真剣に取り組み、努力を重ねたい。

7. その後の指導（新たな指導）

① 目立ち表の作成

すべての児童に活動の場を与えるために目立つ仕事をした児童には、その活動内容を記入させ、目立つ仕事にたずさわる回数を平均化し、リーダーとしての経験を積ませた。

② ほめられ表の作成

教師は、ともすればほめるべき点を見のがし気味である。また、特定の児童にばかり目

をむけてしまいがちである。どんな小さな活動でも、どんな幼稚な活動でも、それが自主的に行われたものであれば、見のがさずほめたい。その回数に偏りがないように表を作り、児童に書き込ませ、時々教師がチェックをし、公平にほめた。ほめて意欲を喚起した。

③ 任せます朝の5分

朝の会10分間のうちの5分間を児童に与え、児童の発想に任せた。その日の日直がアイデアを出し5分で終了する。1度行われた物は、2度とできないし、大きな声で指示しないとクラス中が動かないし、も

№	名前	ほめられ表 (公平に)	№	名前	目立ち表 (公平に)
1	T・A	水泳バック速い、目標の感想いっぱい書いた、習字うまい、まん画を読むのは悪いかの感想を三人に聞いた。マツ開脚後転、日直に仕事のことで声をかけた。	1	T・A	家庭科班長、水泳記録会出場、那須林間出し物責任者、班副班長、連合学芸会出
	T・I	とび箱、バスケのドリブル、学級会の良い発言、帰りの会、マツ、班長にすぐ立候補した。漢字で、オール百点をとった。まじめに班活動をした。友達にやさしくした	2	T・I	班長、運動会の審判、プール開きの初めの言葉、家庭科班長、
2	T・I	とび箱、バスケのドリブル、学級会の良い発言、帰りの会、マツ、班長にすぐ立候補した。漢字で、オール百点をとった。まじめに班活動をした。友達にやさしくした	3	T・K	音楽班長、図工の班長、歓迎迎会のお別れの手紙読み、リレーの選手、班須班長、
	T・K	とび箱8段、学級会の発言、漢字のじゅく語調べ、夏休みの作文3種類書いて、研究授業の作文で、緑化ポスター入選して、友達の見舞に行つて、意味調べで、	4	N・K	代表委員会役員、図工の班長、音楽の班長、応援団、読書感想文出品、
3	T・K	とび箱8段、学級会の発言、漢字のじゅく語調べ、夏休みの作文3種類書いて、研究授業の作文で、緑化ポスター入選して、友達の見舞に行つて、意味調べで、	5	H・K	班長、対面式呼びかけ、応援団、キャンドルサービス審査員、代表委員、音楽長、

たもたとしていっていると、それだけで5分が経過し時間切れ終了となる。児童の創造性を養い、話す場を踏ませる方法としては、最適だと思われる。

④ 発言しない子には、感想をひとこと

発言しないままで、学級会が終わってしまうことは、発言のできなかった児童にとっては残念であろう。そこで、反省・感想を、ひとこと述べさせて満足感を味わわせた。

8. 学級会活動(話し合い活動)の実際 — 授業研究そのII —

(1) 議題 おもしろまじめの班対抗新聞コンクール大会をしよう。

(2) 議題選定経過

先週出された議題は、①がんばれマラソン大会をしよう。②百人一首大会をしよう。③班対抗バスケットボール大会をしよう。④あつと驚くかくし芸大会をしよう。⑤おそろじの班長を決めよう。⑥みんなのニックネームを決めよう。⑦給食の食器のかたし方を決めよう。⑧学校横断ウルトラクイズをしよう。⑨班対抗漢字覚え大会をしよう。⑩班対抗仮装大会をしよう。⑪のどじまん大会をしよう。⑫班対抗なるほどザ・ワールドをしよう。⑬おもしろまじめの班対抗新聞コンクールをしよう。⑭みんなに広げよう交換バザーの和。⑮雨の日の遊びを考えよう。⑯教室の環境整理をしよう。である。9月28日(水)の学級会の時間に検討し、今回は、上記の議題に決まった。

(3) ねらい

- 班で協力しておもしろくてまじめな新聞を作らせる。
- 自分の考えをはっきり述べさせる。

(4) 実施計画(次のページ)

(5) 指導上の留意点

- 原案に基づき、自分の意見をまとめておき、発言しやすくさせる。
- おもしろい新聞とは、テレビのものまねや下品な物ではなく、心から笑えるもので

あり、まじめな新聞とは、読むことにより何かを学べる新聞であるという事を理解させる。

- 全員に書くスペースを持たせ、協力して物を作る喜びを味あわせる。

(6) 評価

- 全員がおもしろまじめの班対抗新聞コンクールをよりよいものにするという意識を持ち、自分の考えをはっきり発言できたか。
- 協力し、工夫して行えるような、おもしろまじめの班対抗新聞コンクールの計画が立てられたか？

(4) 実施計画

第17回学級会		10月12日(水)			
議 題	議 題	おもしろまじめの班対抗新聞コンクールをしよう。			
	めあて	○ 班で協力して、おもしろくてまじめな新聞を作る。 ○ 自分の考えをはっきりのべる。			
議 案 と 理 由	提案者	尾関 智美 森繁 静世			
	提案理由	1. 二学期になり、新しい班ができたのでみんなで協力して新聞を作り、班がよくまとまり、学級の友達関係もよりよくなりたい。 2. 一学期に係が作った新聞がおもしろくてためになったので、今度は学級のみんなで工夫してよりよいものを作りたい。			
役 割 の 担 当	班 長	議 長	高塩 恵美子	ノート書記	服部 アツサ
	副班 長	副議 長	吉田・森田	黒板書記	降旗 崇志
議 案 の 順 序	団 会	発言記録	永池 孝徳	“	渡辺 里佳子
	議 案	1. 初めの言葉 2. 学級の歌 3. 議題とめあての確認 4. 提案理由の説明と質問 5. 話し合いの順序の確認 6. 話し合い(班長会の原案を見ながら) ① もぞう紙にするか印刷にするか ② 色・かたち・大きさ・枚数について ③ 内容は決めるか ④ 審査員を決める ⑤ 新聞の審査の仕方(どういう所を見て審査をするか) ⑥ 賞状と賞品について(〇〇賞という名前を決める。) ⑦ その他 7. 決まったことの発表 8. 議長団からの感想・反省とその他の人からの感想・反省 9. 先生の言葉 10. 終わりの言葉			

9. 指導後の児童の変容

- 原案をもっとしっかり立てようという意識が育ってきた。
- 発言が少しずつ活発になり、発言できない児童がなくなった。
- 発言の内容に、思いやりや、アイデアが見られるようになり折衷案も出せるようになった。
- 係活動等も教師の手を借りず、自主的に、かつ創意工夫をとり入れて行えるようになった。“係活動を最も楽しみに学校へ来ている”という日記さえ出て来た。
- 班長や、代表委員に立候補する児童がふえた。その中には、一学期にほとんど発言できなかった児童も含まれるようになった。
- 集会活動にも意欲が出て来て、小声だった女子も、大きな声で会を進められるようになった。特に、“クリスマス会”には、手づくりのツリーや、自分達で考えたゲーム等を取り入れ、時間配分もびったりおさまった。
- 全体的に言って、学級会活動に対する取り組みに真剣さがみられるようになった。

10. 反省と今後の課題

進歩がないと教師じゃないと思った。今後、○ 拍手の指導 ○ 聞く指導 ○ 班長会の指導 ○ 色々なサインの改善 ○ 能率よく話し合いを進める工夫等が必要である。1つ1つ研究をし、実践を積み、児童に満足を与える授業、感動を与える授業ができるように、さらに努力を重ねなければならない。

〔実践事例 4〕

武蔵野市立関前南小学校

4年2組（男18名，女17名）

指導者 森 秀 伸

1. 本学級の研究主題

信頼関係を育てる学級会活動のあり方

2. 主題設定の理由

3学年当初，よく児童の衝突が見られた。話し合い活動は，心を閉ざしたりはずかしくて，話せない児童が見られた。そのような原因としては，教師と児童，児童と児童の信頼関係が不足していると考えられる。そこで，本主題を設定した。

3. 学級の実態

4学年になって，徐々に明るさが出はじめ，少しずつ男女の交流も見られるようになってきた。しかし，話し合い活動は，進んで発言する児童が少なく，発言内容も自己中心的で，友達のよい点を率直に認める姿勢に欠けていた。したがって，まだ教師と児童，児童と児童の信頼関係は不十分と思われた。

4. 指導の実際

(1) 心から通じ合う人間関係をいつも配慮した。

児童の話をよく聴くことを基本とし，学級生活上の諸問題をいっしょに考え，児童の言動を素直に認め，ほめてはげました。話し合い活動では，事前指導で計画委員会を開き，話し合いの内容と順序を具体的に書かせた。そして，話し合いの結果をあたたく見守った。

(2) 児童の所属している集団に目を向け，ひとりひとりに役割意識をもたせた。

学習と生活とを密着させ，児童の1日の生活を班単位で活動させ，小集団活動の徹底を図った。班の構成を，班長・学級会活動の係長・給食当番長・清掃当番長の4人とし，班長に依存することなく，相互に補うようにした。

5. 学級会活動（話し合い活動）のこれまでの指導

3学年では，議題を見つけ，班の輪番制による計画委員会で，話し合いの計画を立てて話し合わせた。

4学年では，ひとりひとりが進んで話すようにするために，話し合いの準備として，学級会プリントに自分の考えをまとめさせた。話し合い活動をより活発にさせるため，係活動と連動させた。

6. 学級会活動（話し合い活動）の実際 —— 授業研究 ——

(1) 議 題 「なかよく指ずもう大会をしよう」

(2) 選定の経過

11月1日（火） 計画委員会で、「11月の係の仕事を決めよう」という議題の話し合いの内容と順序を話し合う。その結果を記録用紙に書き、教室側面の黒板に掲示した。

11月4日（金） 計画委員会から、議題と話し合いの内容と順序を知らせ、自分の考えを用意しておくよう呼びかけた。

11月8日（火） 学級会話し合い活動で、こまっていること・やってほしいこと・よくしたいことを直接話し合い、各係に仕事の分担をした。それを受け、11月の係の仕事を出し合い、各係で11月の仕事を決めた。集会係から、「指ずもう大会」の計画を出した。

※ 6日は日曜父母参観のため、7日の学級会を延期

11月10日（木） 計画委員会で、「なかよく指ずもう大会をしよう」という議題の話し合いの内容と順序を話し合う。集会係に、ルールと係の提案の用意をさせる。

11月11日（金） 計画委員会から、議題と話し合いの内容と順序を知らせ、自分の考えを用意しておくよう呼びかけた。

第10回 学級会		11月18日	
議 題	仲よく指ずもう大会をしよう	提 案 者	榎 本
提 案 理 由	10月にできなかったので、11月に仲良く指ずもう大会をやりたいと思います。		
話 合 い の 順 序		時 間	分 担
	1. 開 会		沢
	2. 議題の確認		棚田
	3. 提案理由の説明		榎本
	4. 質 問		沢
	5. 話 合 い		
	(1) いつ、どこでやるか（先生から）		棚田
	(2) 個人戦か、グループ戦か		沢
	(3) 試合の進め方		棚田
	○制限時間は	○カウントは	
	○勝負は何回戦か		
(4) ルール（集会係）		沢	（大月）
(5) どんな係を作ろうか		棚田	
6. 決まったことの発表		川上	
7. 先生の話			
8. 閉 会			沢
準 備	ルールを書いた紙	計 画 委 員 会	沢 棚田 川上 高野

(3) ねらい

友達の話最後まで聞いて、進んで自分の考えを話せるようにする。

(4) 実施計画 上の表

(5) 留意点

- ① あらかじめ、学級会プリントに自分の考えを書かせ、それをもとに、進んで発言できるようにさせる。
- ② 学級会の始めに、目標「友達の話最後まで聞いて、進んで自分の考えを話そう」を話す。終わりの先生の話で、適切に評価する。
- ③ いつ・どこでやるかは、担任の指導計画によることが大きく、時間をかけない。
- ④ 会の進行について、必要な助言を行なう。

(6) 評価

友達の話最後まで聞いて、進んで自分の考えを話せたか。

7. 指導後の児童の変容

(1) 話し合い活動と係活動を連動する以前

話し合い活動は、議題を見つけるために議題ポストを設けたが、その内容は個人的な問題が多かった。そのため、班長会・係長会などを開いて議題を見つけることがあった。実際の話し合いも、個人の提案されたことが、学級全体の問題となりにくく、低調であった。係活動は、話し合いを受けたものではなく、活動内容も学期中は同じで、具体性に欠け、意欲に乏しく、他の児童の理解も深まらなかった。しだいに指導、助言が多くなり、教師と児童、児童と児童の信頼関係は、いつも不十分であった。

(2) 話し合い活動と係活動を連動した以後

話し合い活動と係活動をひと月単位とし、月の初めに計画をたててしまうので、児童は、見とおしが持ちやすくなった。そして、月の初めの話し合いで、直接全員でこまっていること、やってほしいこと、よくしたいことを話し合い、各係にその仕事を分担するので、話し合いの内容がひとりひとりに通じ合い、信頼関係が深まった。その結果、話し合いが充実し、意欲的になった。係活動も、月ごとに仕事に変化し、1つの仕事が深められ、活気が見られるようになった。

8. 反省と今後の課題

研究協議会で、講師の話は、「信頼関係を育てる」ということは、きらわれている、いainではなく、学級集団を深め、広めることである。そのためには、何よりも学級の一員としての所属感を育てることが大切で、ひとりひとりのつながりとしての連帯感の拡大が、信頼関係であるとした。

今後の課題としては、講師の話に出されたように、「よく聞く」ことを、信頼関係を育てる学級会活動の在り方の中で、どう探っていくかである。

〔実践事例 5〕

江戸川区立第四葛西小学校

5年2組（男24名，女16名）

指導者 名取 幹 夫

1. 本学級の研究主題

“児童達が自らの活動と実感できる学級会活動をめざすための在り方”

2. 主題設定の理由

子供達の様子を見ると、学級会活動は自らの活動というよりも、学校で行なわれる学習のひとつ、教師の指示によってなされるものという根強い意識の傾向が見られる。活動についても自らの意欲や関心に支えられたものというよりも、むしろ義務的・他動的なものとなって現われている実態がある。そこで、子供達の自発・自治性に支えられた学級会活動をめざすためには活動自体に対する指導と併せて、子供達の学級への所属意識や仲間との連帯意識を高めるための学級経営の方策が重要な視点になるであろう、との観点から本主題を設定した。

3. 学級の実態

5年生進級にあたって編成替えの行なわれた学級である。担任してまず気のついたことは、基本的な生活習慣について、年齢に相応した成長が不十分であったことである。衛生的な面・学習環境の整備の面・基本的な学校生活のルールに関する面、等において問題が多かった。学級の児童の特徴を具体的に見ると、①音声的な刺激に対する反応が鈍いこと、②自己の行動を周囲の状況に関連づけることなしに無意識・衝動的に決定してしまうこと、③依存的であり、単独での言動ができにくいこと、④覇気がなく声が小さく創意工夫性に乏しい、以上の点が主なこととして指摘できた。

学級会活動に関しては、①話すことに慣れていない………思いつきで話すことはできても、自ら挙手して発言したり、順序よく話したりすることができない。単語を並べるだけのような話し方が多い。②話合いの活動に慣れていない………いいっぱなしが多く、他人の意見を聞きさらにその上で自分の考えをまとめるといった訓練ができていない。従って何のために話し合っているのかあいまいになりやすい。③活動の楽しさが実感にない………係の活動では当番的な意識が強く、わずらわしさが先に感じられてしまう。集会の活動についても、集団で創り上げたというような充実感や楽しさの体験は実感の中に無く、個人レベルのおもしろさの体験にすぎない、といった実態であった。

4. 指導の実際

以上の実態から、学級会活動としての指導は前面に出さず、学級経営の中で徐々に集団での活動の意欲を高めていくことを当初の目標とし、「よりそい、みちびき、つきはなす」、を基本

の考え方として指導を試みた。

(1) 前段の指導“よりそい”……まず一人一人の児童が自らの学級に自然にとけこんでいけること、自らの主体的な意識のもとで行動できること、の2点を中心にし、学級生活の楽しさを感じさせる配慮に重点をおいた。

㉞. 学習はやらされるものでなく、自ら行なうことにより喜びや楽しさが得られる、ということを実感させる指導をくふうする。

㉟. 調べられる、罰せられるという意識を持たせぬよう点検的なことは最小限におさえる。

㊱. 自分達の教室であるという愛着を持たせるために、教師からの掲示物は最小限にする。

㊲. 教室環境の整備に関して児童に任せる部分を多くし、問題発掘・議題化の感覚を養う。

㊳. 学級の歌等、学級独自のものを創る活動を通して、学級への愛着やほこりを持たせる。

㊴. 常に児童とのスキンシップやコミュニケーションに心がける。

(2) 中段の指導“みちびき”……学級全体の集団活動の前提として、まず小集団での活動を円滑に行なっていける資質を伸ばす機会を多くするくふうをするとともに、集団の一員であるという意識の育成を図ることに重点をおいた。

㉞. 係の活動の充実を図る……当番・義務的活動から創意工夫ある活動への発想の転換。

㉟. 時間や用具等の物理的な援助とともに、情報提供や発想の援助をして、活動にはばを持たせ、活動に対する魅力を高めさせる指導のくふうをする。

㊱. 教科における学習においても積極的にグループ研究等の集団活動を行なわせる機会を多くとるようくふうをし、自分達の力で課題を解決していく喜びを体感させる。

(3) 後段の指導“つきはなす”……自分達の責任に任されている、自分達のための活動であることを認識させることに重点をおいた。(学級会活動は、自分達の自分達による自分達のための活動である”, という自覚の育み)

㉞. 司会者グループの育成……教師司会から、「これからは君たちの力で進めてごらん」。

㉟. 失敗体験を有効に……例えば、話合いがうまくいかない、「今度は計画を立ててやってみたら。」……計画委員会、実施計画の有効性に気づかせ、実際にやらせてみる。

㊱. 発言はさせられるものではなく、自ら主張すべきものであるという自覚への援助のくふう……“きれいな箱を作ろう”……発言ごと、司会グループ経験ごとに色紙の短冊を配布し、箱の色どりが進むにつれ、発言意欲が高まることをねらった。

㊲. 文具・用紙類の自主管理……一定量の用具、用紙類を一括して児童に託し、自分達の採量で管理・使用させる。

5. 学級会活動(話し合い活動)の実際 —— 授業研究 —— 昭和58年12月8日 木曜日

(1) 議題……“冬休みの自分達の宿題を決めよう”

(2) 議題選定の経過……議題案は『クリスマス会をやろう』と『冬休み……』の2つに選ばれた。12月ということもあり、最初は30:10くらいで『クリスマス会……』の議題の希

望者が多かった。しかし「せっかくよその学校の先生方が見に来てくださるのだから、この学級にしかないことをやろう」「宿題を自分達で決めているような学級は他にないと思うよ」「それにクリスマス会の議題だと話し合いが長びきそうだ」等の意見が出された。その結果、急速に方向が変わり、当日の議題は『冬休み……』にする、その前の学級会で『クリスマス会……』を議題にとりあげる、ということになった。

(3) 本時のねらい……単に個々が意見を述べあうのではなく、互いの意見を“聞き合う”姿勢を深め、決定事項が個々の成員にとって納得のできるものになることをめざす。

(4) 実施計画

第15回 学級会 実施計画 12月8日(木曜日)			
議題	冬休みの自分たちの宿題を決めよう		
提案者	中山・荒井		
提案理由	夏休みの時も自分たちのやることをきめて、それをもとに、二学期になって作品コンクールをやったことが、とてもたのしかったので冬休みにもまた、やってみたらたのしいだろうと思って提案しました。		
司会グループ	司会・中野 議長・木島・竹森 記録・岡田・伊藤 時計・橋本	計 画 委 員	・中野 ・岡田 ・木島 ・伊藤 ・竹森 ・中山 ・橋本 ・荒井
話し合いの計画	<ul style="list-style-type: none"> ・ はじめの言葉 話し合いのはしら 1. 宿題にするとしたらどんなものが考えられるか(10分) 2. やってきた宿題を、三学期にどのような形で発表するか(15分) 3. 宿題はいくつするか (5分) 4. 何にするか (10分) ・ 先生のお話 		

(5) 指導上の留意点

内容が児童にとって、その自治的能力の範囲を逸脱しないように配慮する。

(宿題は本来教師主導で行なわれるべき性格のものである。本学級では夏休み前の学級会で、秋に夏休みの作品コンクールを開こうと工作・絵画を創作してこようと学級会を開いた経緯がある。本議題もその延長であり、決して児童に教科学習の内容を含めて宿題内容決定権を委ねたわけではない。)

(6) 評価……人の意見をよく理解しさらに自分の考えを加味することができたか。決定事項に対して個人としての興味関心は高まっているか。

6. 指導後の児童の変容

衝動的な言動が見られた当初に比べて、全体に落ち着きが出てきた。学級でのけんか等は全く見られなくなり、男女間の会話も増してきた。学級会の活動についても、4～5月には話し合いの活動一回あたり一人平均0.6回の発言であったものが、11月頃には2回を越えるようになった。活動に対して『楽しい』と答える者は4月の15%から90%に、『学級会は大切である』と答える児童は23%から87%に増えた。授業時にもほとんど発言しない女子が4月には4名いたが、その子達もついに学級会で発言するまでになった。これらのことは、ひとつに子供達が、学級集団が自分にとって安心できる集団であると感じるようになってきたこと、また、学習と異なり、能力的な負担を感じないで活動できることが原因のように思える。

7. 反省と今後の課題

活動を充実させたいと願う意識から規定以上の時間を与え過ぎた反省がある。また、活動のマンネリ化は避けられない現実があるが、それをどう打開してゆくかが今後の課題である。

Ⅲ 研究の反省と今後の課題

昨年度は「ひとりひとりが役割を意識し活動する学級会活動」というテーマで、一つの学級の3回の実証授業を通して、個々の児童の意識の変容と集団としての質の高まりを継続してきた。この研究を通して、学級会活動が、児童の学校生活の全てと大きく関連していることが改めてわかった。このことは、ともすると見逃しがちであるが、重要なことである。

本年度は、昨年度の反省に基き「学級経営を基盤とした学級会活動の在り方」の研究を通して都特活の研究テーマ「豊かな人間性を育てる特別活動」に迫ることにした。

「研究の経過」でもわかるように、研究の中心を授業におき“こんな学級経営をしたら、こんな学級会になる”という傾向を明らかにしようと努力してきた。

なお、学級会活動の指導の基本は、(1) 児童ひとりひとりを生かす (2) 児童の自主性、自発性を育て伸ばす (3) 実践を生かす、ということ部員相互で確認した上で研究を進めてきた。

特に本年度は、新しいテーマの一年目であったので、授業研究を通して、学級経営と学級会活動との関連を解明するための糸口をつかもうとした。

実践記録を読んでいただければわかるように、主題設定の理由、指導の実際に各授業者の苦心の跡がうかがえるものと思う。しかし、紙面の都合でもりだくさんな内容がおさめられなかったことは残念である。

授業研究では、各授業者が、指導案に、学級経営の方針や、学級目標などを入れて、学級会活動との関連づけをした。そのことによって、授業者の学級経営そのものが、授業に色濃くにじみ出て、参観者の参考になったと思う。

私達は、授業そのものを、単なる一時間だけの授業研究でなく、これまでの学級経営と学級会活動の指導の経過をふまえて、児童の変容をみるためのものとしてとらえた。そのことによって学級経営を見直し、よりよい児童の自主性を育てることを念願し研究を進めてきた。

一年目のまとめをするのに際して、まとめ方の指針が十分把握できないまま、研究に臨んだので、首尾一貫した研究になりにくい点があった。次年度は、テーマ究明の二年目になるので、十分な共通理解をもって、試行錯誤しながら、研究を進めていきたい。

今後の課題としては、学級経営の中で、学級会活動がどういう役割を果たすか、また、どう位置づけたら良いかということが残された。そのことは、非常に難しい問題であるが、それを解明するため研究を次年度もおし進めていきたい。

終わりに、この一年間、研究のために出席くださった先生方、進んで授業研究を引き受け実践記録を書きあげてくださった部員の先生方、研究会場を提供してくださった校長先生はじめ各先生方に厚く感謝いたします。また、研究授業のさい、快く講師をひき受けていただいた先生方に厚くお礼を申し上げます。

Ⅱ 児童会活動

テーマ 「児童会活動の特質をふまえた望ましい指導のあり方」

I 研究の視点	35
1. 主題設定の理由	35
2. 研究の進め方	35
II 授業研究（実践事例）	36
1. スポーツ大会の計画を立てよう	36
— 代表委員会のとりくみ —	M市O校
2. おめでとう集会（開校70周年を祝う会）	40
— 全校集会にむけてのとりくみ —	M区H校
III 児童会活動の特質にかかわる問題点	44
1. 年間指導計画，実施計画	44
(1) 年間指導計画の立てかた (2) 実施計画の立てかた	
2. 児童会活動の組織と運営	46
(1) 組織づくり (2) 任期 (3) 公選の問題点 (4) 委員会の種類と設置方法	
3. 議題例と活動過程	50
(1) 代表委員会の望ましい議題例 (2) 活動過程	
4. 児童会活動と学校行事，及び「ゆとりの時間」の関連	52
○児童会活動と学校行事 ○児童会活動と「ゆとりの時間」	
5. 児童会活動の特質をふまえた指導	54
○見通しをもった指導のあり方	
IV まとめと今後の課題	56
1. 研究のまとめと成果	56
2. 今後の課題	56

○ 研究の経過

- 58. 5. 26 (木) 定期総会, 分科会, 組織づくり, 本年度の研究方針
- 58. 6. 14 (火) 研究計画 研究日程
- 58. 6. 18 (土) 研究主題 研究方法
- 58. 7. 5 (火) 研究の視点 仮説決定
- 58. 9. 22 (木) 授業研究 (実践事例: 1) (武蔵野市立大野田小学校)
「スポーツ会の計画をたてよう」
- 58. 11. 4 (金) 授業研究 (実践事例: 2) (港区立東町小学校)
「開校70周年おめでとう集会」
- 58. 12. 12 (月) 集録の編集計画
- 58. 12. 20 (火) 集録の編集計画, 執筆者決定 執筆内容の検討
- 59. 1. 10 (火) 執筆内容の検討 発表者決定 役割分担決定
- 59. 1. 21 (土) 執筆内容の再検討
- 59. 2. 17 (金) 研究発表会の発表原稿作成, 打ち合わせ
- 59. 2. 25 (土) 研究発表会準備, リハーサル
- 59. 3. 1 (木) 研究発表会

— 研究・執筆者名簿 —

部長	星野 隆治	中野・桃園三小		銀杏 陽子	中野・新山小
(副)部長	今野 正保	新宿・淀橋三小	前部長	渡辺 寿	練馬・北西小
"	有村 久春	中野・東中野小		矢野 裕一	品川・芳水小
"	中川 秀男	港・青南小		門馬 茂	豊島・文成小
(司)会	柏村喜久子	板橋・若木小	(発表者)	小幡 賢司	港・東町小
"	味村美恵子	品川・杜松小		矢根 保	中野・新井小
(発表者)	佐々木善光	文京・真砂小		山品 照一	足立・栗原小
(記録)	鈴木 秀雄	江東・香取小		大内 篤	保谷・碧山小
	青山 啓子	品川・小山小		鈴木 悦子	府中・四小
	川島 直子	品川・大井一小		山崎 誠二	台東・竹町小
	若林 彰	板橋・板橋四小	(記録)	岩堀 早苗	江東・越中島小
	野田 智子	" . "		池谷 隆子	荒川・第三峡田小
	安田 康隆	東久留米・小山小		佐々木 功	葛飾・小菅小
	佐々木元子	小金井・二小		石川 和子	狛江・五小
	安田紀志江	" "		畠山恵美子	多摩・多摩二小
(発表者)	山田 雅子	武蔵野・大野田小		豊田 朗	武蔵野・大野田小
	佐藤 治子	三鷹・四小		関戸 慶子	練馬・北西小

I 研究の視点

(図書誌実) 実証研究 II

1. 主題設定の理由

学校行事と児童集会との混迷、「ゆとりの時間」の活動と児童会活動とのかかわらせ方の問題など、現場にみられる特別活動の実践には、まだまだ多くの隘路がある。特別活動の領域への「ゆとりの時間」の流れこみ現象から、教育活動全体に「ゆとり」がなくなってしまったなどの言葉も聞く。特別活動本来の性格づけをあいまいにしてしまい、それぞれの特質を生かした教育活動が展開されているとは言いきれないもどかしさが残るのである。

一方、特別活動、とりわけ児童会活動の特質の一つである児童の自発性や自治性が、思うほどに望ましい方向に育っていかない要因は何であろうか。現代に生きる児童の生活実態を見きわめ、児童を生かす適切な指導がなされていたであろうか。学校としての指導体制の組み方、教師集団の問題意識・共通理解の方法に甘さはなかったか。など、教育課程全体からその構造的なとらえ方を見直す時機とも言えよう。

本研究部で設定した「児童会活動の特質をふまえた望ましい指導のあり方」の研究主題も、上記のような今日的な課題にせまるものであり、いわば、児童会活動の特質を明らかにして、望ましい児童会活動の「あるべき姿」を実践を通して学ぼうとするものである。

2. 研究の進め方

- (1) 児童会活動が、各校で根づいていかない要因を探る。
 - 各校の指導体制や組織・運営の問題、児童の自主性を伸ばす教師の適切な指導とはどういうことかなど、授業研究を通し解明していく。
- (2) 児童会活動の特質にかかわる問題点を事例を通して考え、その基本的事項を明らかにする。
 - 児童会活動の指導計画はどうあるべきか。また、実施計画をどう作るかなど。
 - 委員会の構成や任期、代表委員会の選出方法など、現場の問題性にふれていく。
 - 代表委員会で取り扱われる議題例とそのすい上げ方、活動の過程に即応した指導のあり方などをつかむ。
 - 児童集会と学校行事、児童会活動とゆとりの時間による教育活動など、それぞれの独自性と相互の関連性をつかむ。
 - 児童会活動における教師の「適切な指導」とは何か。いわゆる「見通しを持った児童会活動の指導」について、その特質をふまえ事例を通して言及する。
- (3) 本研究部会員が、広く資料や実践事例を持ちより、事例を通し特質にせまるようにする。
 - 最初から「望ましい姿」をえがくのではなく、数多くの実践の中から「あるべき姿」をつかむようにする。
 - 素朴な質問に答える、Q and A の形式を採り入れ、現場に役立つ資料事例のスタイルで編集する。

II 授業研究（実践事例）

※ 実践事例は見開きで構成してあります。

＜事例 1＞ 「スポーツ会の計画をたてよう。」 — 代表委員会のとりくみ—(M市O校)

1. 本校児童会活動の概要

本校の場合、右に示したような生活時程と組織のため、代表委員会には各委員会からの参加はなかった。

司会グループは8名で、その選出は5・6年の各学級代表から互選で決定する。任期は半年で10月交代である。学級での選出は各学級にまかせてある。

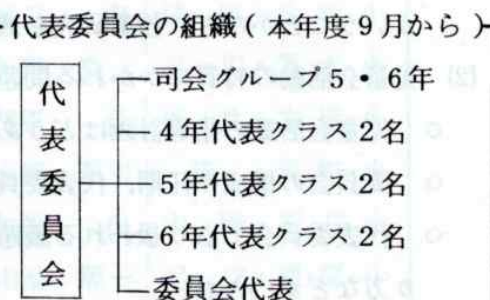
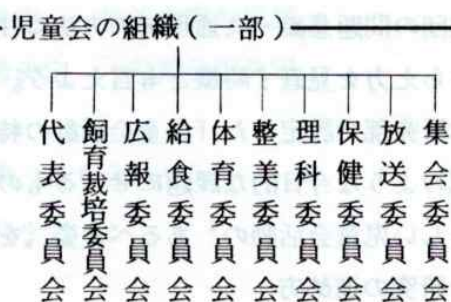
次に代表委員会の実態であるが、月1度の話し合い活動は今までの議題をみると生活目標からおろされたクラス目標の発表、運動会参加のきまり、夏休み、冬休みの過ごし方などであり、提案は殆んど教師側からである。ロングの集会なども集会委員会が担当し、みんなで話し合っけて開くというような事はない。

代表委員会と各学級、代表委員会と各委員会とのつながりはうすく、代表委員会の存在や必要性も十分理解されていなかった。

そこで今年から教師間の共通理解を深めながら、ロングの集会を代表委員会でとりあげることにした。また、議題の選び方、会の進め方、話し合いのし方なども指導してきた。その結果7月の七夕集会では子ども達に意欲がみえはじめてきた。9月から、委員会代表も代表委員会に参加させ、議題も昨年経験したスポーツ会を自分たちの手でやろうということになった。

生活時程の中で

○クラブ活動	金曜日	6校時
○学級会活動	木曜日	5校時
○委員会活動	第一火曜日	6校時
○代表委員会	第一火曜日	6校時



3. 指導のねらい

- (1) 自分たちの手で、スポーツ大会の計画を立案できるように育てる。
- (2) 代表の一人として、学級の意見を発表することができ、また話し合いによっては、学級の意見にこだわらず、自分の意見を発表できる態度を育てる。

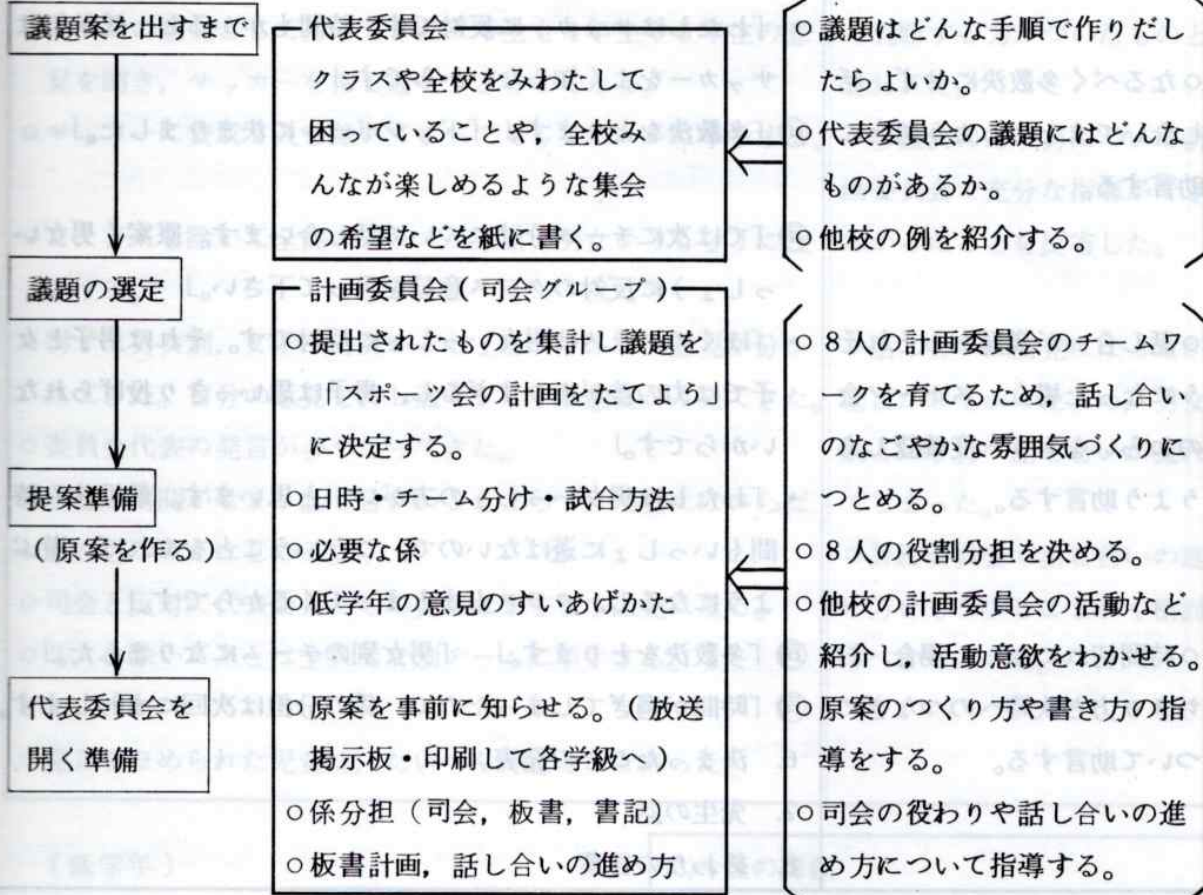
4. 授業展開

指導の手だて	活動の過程
○どうしてこの議題がとりあげられたのかの説明は、くわしく発表させる。	<ol style="list-style-type: none"> 1. はじめの言葉 「これから第6回代表委員会を始めます。」 2. 出席確認 「出席をとります。4年1組，4年2組……。」 3. 議題のたしかめ 4. 提案理由の説明

2. 本時にいたるまで

概要で述べたように議題を自分たちの手で作り出すことがわからず、学級へ議題をもちかえって討議するという経験もなかった。あせらず、子どもたちの出きる範囲から取り組ませた。しかし時間の確保などの困難な面や、子どもたちも慣れていないこともあって、代表委員会を開くまでの準備がたいへんであった。

(1) 活動過程



(2) 教師への働きかけ

ア. 計画委員会の活動状況を知ってもらうため、その都度職員朝会などで報告した。

イ. 各学級で日時などについて話し合う時、的確な助言をしてもらうよう、スポーツ会のねらい、内容について共通理解を深めた。

ウ. 各委員会の分担について、仕事の内容を一覧表にして掲示、指導を依頼した。

児童の反応	考察
○提案者は5年生のA男、歯ぎれのよい話し方ではなかったがスポーツ会をやりたい、スポーツ会を通して男女の仲を更によくしたいという、計画委員会のねがいを、真げんに話していた。	○言葉はつたないが真げんさが伝わったようでみんなまじめに聞いていて、話し合う雰囲気作りができたようだ。

指導の手だて	活動の過程
<p>○賛成・反対と分けずにどんだん意見を発表させるよう司会に助言する。</p> <p>○なるべく多数決にせず、話し合いでまとめるよう司会に助言する。</p> <p>○話し合いが議題からそれぞれになった場合、スポーツ会のねらいをもう一度確認しあうよう助言する。</p> <p>○時間切れになった場合、打ちきり方と次時へのつなぎについて助言する。</p>	<p>5. 話し合い</p> <p>㊦「ドッジボールに反対のクラス意見を言って下さい。」</p> <p>㊦「ドッジボールに賛成のクラス意見を言って下さい。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ぼくたちのクラスはドッジボールに賛成です。それはみんなのできるし時間もあまりかからないからです。」 ・「わたしはサッカーに反対です。時間もかかるし、低学年はサッカーをよく知らないからです。」 <p>㊦「多数決をとります。」「ドッジボールに決まりました。」</p> <p>㊦「では次にチーム分けについて話し合います。原案(男女いっしょ)に反対のクラス意見を言って下さい。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ぼくのクラスは男女いっしょに反対です。それは男子と女子では力の差がありすぎるし、男子は思いっきり投げられないからです。」 ・「わたしは男女いっしょの方がいいと思います。最近休み時間もいっしょに遊ばないので、こういうことをやれば、遊ぶようになるし、クラスもまとまってくるからです。」 <p>㊦「多数決をとります。」「男女別のチームになりました。」</p> <p>㊦「時間が過ぎてしまったので、係の分担は次回にまわします。」</p> <p>6. 決まったことの発表</p> <p>7. 先生の話</p> <p>8. 終わりの言葉</p>

5. 活動の成果と今後の課題 —— 「スポーツ会の実施」 ——

(1) 実施まで

(2) 当日の取り組み (中学年・高学年)

再度代表委員会開く
係の分担を話し合った。
委員会代表が活発に発言し、最終的に各委員会が希望で各係を分担した。
そのため当日まであと一週間しかなかったが、各委員会が意欲的に取り組み、ムードを盛りあげていった。

準備・整列・開会式と、すべての係が児童の手によって行われた。応援もさかんで、コート移動も素早く行なわれ、時間内にきちんと終えることができた。

<p>私は計画委員でした。スポーツ大会を楽しくするたけいろいろと苦心して考えました。種目、係の分担。そしてどうすればみんなが楽しめるかなと。スポーツ大会の当日はどの学年も仲良く楽しそうにやっていたので苦心して取り組んだかいがあったと思います。</p>	<p>ぼくは代表委員として、ししげんの係をやった。話し合いはなかなか進まなかった。ししげんはとて、まずかしくてちゃんとや、てあげようと思ったからししげんは、おわったとき、ほとした。またスポーツ大会をや、てほしいと思う。</p>
---	---

児童の反応	考察
<ul style="list-style-type: none"> ○サッカー・キックベースがいいという意見が4クラスからでる。ほとんどは原案のドッジボールに賛成である。 ○ドッジボールに賛成するより、サッカーやキックベースに反対する意見が多くでる。 ○クラスの意見として持ってきた6年生も4年生や5年生の意見を聞き、サッカーを押し通そうとしなくなる。 ○サッカーに賛成2人を除いてすべてドッジボールに挙手する。 ○2クラスを除いて全部のクラスが原案(男女いっしょ)に反対する。 ○男子は男女別、女子は男女いっしょというふうに意見が分かれてきた。自分の意見を押し通そうとする態度がみえてきた。 ○委員会代表の発言が多くなってきた。 ○予定の時間がせまり話し合いがまとまらず、司会にはいらだちの色がみえはじめる。 ○司会と反対に代表委員たちの発言はますます活発になる。 ○2人を除いてあとは全員男女別チームに挙手する。 ○発言をほめられた児童は、たいへん得意そうであった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○話し合いを進める中で正しく判断する力がついたものと思われた。 ○多数決のあり方について計画委員会で十分な指導ができなかったことを反省した。 ○話し合いは活発になったが助言がおそかったため、男女別という方へ話し合いが流れてしまった。 ○計画委員会で話し合いの進め方をもう少しこまかく検討すべきであった。

(低学年)

体育の時間中に教師を中心にして実施された。しかし集合の整列などは、休み時間中に係の児童の手によって行われた。



勝ったときはうれしかったけど、まけたときはくやしかった。でも、とても楽しかった。(一年生の日記より)

(3)今後の課題

今回のスポーツ会は、各委員会が仕事を分担する初めての取り組みであったが、自分たちでやりとげた自信と喜びをそれぞれが持てたようだった。しかし、代表委員会そのものにはまだ、組織のこと、運営のしかた、議題の決め方、計画委員会の指導、任期、学校行事との関わり方など問題が多く残されている。年度半ばに、代表委員会の構成を改善するなど教師間の協力体制もみられたが、今後更に共通理解をはかるための手だてを考慮し努力を続けたい。

〈事例 2〉「開校70周年を祝う会」——おめでとう集会——（M区H校）

1. 事例の概要

※ 事例は見開きで構成してあります。

今日までの本校の全校集会活動の内容は、その多くがスポーツ的集会でしめられていた。地域の父母からも「スポーツのさかんな学校」と言われており、この種の経験の多さによって、児童も運動を好み、いかにもスポーツマンらしい素直な人がらを見せている。しかし、この一方でスポーツ集会の運営が勢い教師主導型にならざるを得なかった実態から、本校の児童会活動は必ずしも望ましい方向へ展開しているとは言えない現状であった。

今年度はじめて集会委員会が設けられ、月一回程度のショート全校集会の実践ができるようになったという段階である。また代表委員会にしても実質開かれる回数も少なく、話し合われる議題もいわゆる生活指導的な内容が多かった。

上のような実態をふまえて、今回、たまたま本校の開校70周年に当たることから、この学校行事としての周年行事に対して、児童会の活動として参加できる内容と範囲を見極め「みんなの児童会、みんなの代表委員会」の意識を育てることをねらいとして、本事例を展開したものである。

11月の「おめでとう集会」の実施を前提に、6月から準備を始め、二つの大きな活動内容の柱が設けられ実践された。「校内のふん囲気作り」と「おめでとう集会の実践」の二つである。今までのいわゆる「やらされる児童会」から「自分たちでやりとげる児童会」へ、わずかではあるが前進することができたように思える。それは、代表委員会を中心に各委員会がそれぞれに関わりを持つことによってもたらされた成果であったと考えられる。

3. 指導のねらい

- 話し合い中心の代表委員会から、行動する代表委員会への脱皮を通して、児童会活動への意欲を育てる。
- 児童自らが、工夫し活動する場を可能な限り多く設けることを通して、自発的・自治的に活動することの成就感を味あわせる。

4. 授業の展開 — 事前の話し合い — （代表委員会の話し合い活動）

指導の手だて	活動の過程
<p>○開校70周年のお祝いをみんなにわかってもらうために校内のふん囲気づくりを相談させる。</p> <p>○学級から集められた意見をよく考え、歴史やねがいなどをまじえた周年の意義にふさわしいスローガン、内容を選ばせる。</p>	<p>1. 代表委員会を開く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○スローガン（めあて）をつくろう。 ○ポスターをつくろう。 ○記念誌で子どものページをつくろう。 <p>2. 代表委員会を開く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○スローガンを決める。 ○ポスターを選び校内掲示 広報委員会と運営部（議長団）がやることにする。

2. 本時にいたるまで

代表委員会、学級会、特別活動部会、職員会などの諸会合を相互に関連させながら、6月から11月4日（本時）にいたるまで、様々な話し合いを実施してきた。それらの話し合いを通して、児童会の活動として、次の二つの柱を中心に実践してきた。

(1) 校内のふん囲気作り（6月～9月）

① 児童会としての周年行事についてのねらいづくり（6月～7月）

各学級から「ねらい文案」を集め、代表委員会での話し合いをふまえて決定した。さらに代表委員の発案により、そのねらいをポスターに書き校内に掲示することにした。

② 周年記念誌への児童会としての参加（9月）

一定の指導助言を前提にしながらも、記念誌に児童会のページを設定することが職員会で了承された。これを受けて、代表委員会で話し合い、次の項目でそのページを構成することが決定された。

- ・ 全体の「ねらい」を受けた各学級ごとの「ねらい」を決め、学級ごとの寄せ書きを工夫すること。
- ・ 学級の写真を掲載すること。

(2) おめでとう集会の準備（9月～11月）

① 集会の名称の決定

② 呼びかけにうたいたい内容の公募

③ 地域の人々の声の集録

④ 呼びかけ台本の作成

⑤ 集会の係分担の決定

⑥ スライドの編集

⑦ 集会プログラムの決定

⑧ 集会のリハーサル

（学級会、計画委員会、臨時の代表委員会を重
ねて一つずつ決定され準備が進められていった。）

児童の反応	考察
<p>○学級会で話し合ってみよう。○めあてはいいのですか。</p> <p>○大きさはどうするのか。○枚数。○色えんぴつでもよいか。</p> <p>○写真を入れたい。○ことばを書く。○自由に絵などをかく。</p> <p>○スローガン「これからも大きくはばたけ東町」が、なんとなく広がる感じで、これからもつづくようがいい。（決定）</p> <p>絵も学校があり、風船もふくらみ夢があっていい。</p> <p>○「スポーツで体をきたえていつまでも」はどうですか。行事があって楽しい学校だから。</p>	<p>○代表委員会に出席することは、学級の代表であり、しっかりと学級に伝えなくてはならないということでメモを取る子どもがずいぶん目立った。</p> <p>○70周年の歴史も考えたが、スポーツ行事が多いので、それにかかわったスローガンが多かったのはうなずけた。</p>

指導の手だて	活動の過程
<p>○記念誌にのせる内容は、学校で遊び、学ぶ様子などが楽しく父母にも読めるように考えさせる。</p> <p>○周年の意味をよく考えて、1時間をかけた全校集会の内容や方法の工夫にはどんなことがあるか考えさせる。</p>	<p>3. 学級会で話し合ったことを代表委員会で発表する。</p> <p>○学級1ページのわりあてをどう工夫して使おうか。</p> <p>○委員会、クラブは写真を入れたり、カットも入れたい。</p> <p>○スローガンと関係ある学級の目あてを大きく書いてのせる。</p> <p>4. 代表委員会を開く。</p> <p>○会の名前をどうする。○めでたいが歴史は大切だ。</p> <p>○係分担と人数をわりあてる。</p> <p>○時間や準備・練習はどうなるのか。</p>

おめでとう集会

<活動のようす・児童の声>

上記のような流れをふまえて、11月4日体育館で第5校時：全校児童 485名の集会を実施した。

<プログラム>……流れと委員会の係

○会場準備……椅子ならべ、スライド準備(体育、栽培)

○司会進行……集会の進行(集会)

1. 会場への入場……移動指示、連絡(放送、整美)

2. プログラム

○はじめの言葉……集会の意義を話す。(運営委)

○校長先生の話……暗幕、場内灯、スポット、

(広報、図書、保健)

よびかけ「東町小学校のあゆみ」—スライド—

(スライド：給食、録音：放送、コール：運営委)

～ テーマ曲・スローガン・開校時の校舎・当時の教科書・朝礼・卒業生・震災時の正門・臨海学園・出征兵士・集団疎開・疎開の話(地域の人)・焼けた校舎のあたりを語る(地域の人)・復興校舎・当時の遊びを話す(卒業生)・旧プール・オリンピック年の運動会・学校の目標・高見順文庫(先生)・通信簿・みんなの広場・旧校舎取り壊し・プレハブ校舎・現鉄筋校舎・新体育館、プール・新校庭・新遊具

○よびかけで説明 — 全員でコール

○終わりの言葉……反省をふくめて、

3. 退場……照明、換気、出口への指示、



集会に慣れていないこともあり、静かにして下さいという注意が多い。移動中の指示に適切さが無い。よびかけをあわてた。しかし、係児童は緊張と責任感で満足気であった。お兄・お姉さんたちの言葉がはっきりしていた。戦争がない時に生まれてよかった。昔の教科書が写った時ワーッという声があった。文房具屋のおじさんが出てよかった。東町小がこんなに古いとは思わなかった。上級生がこんなに立派とは知らなかった。校長先生に拍手をした。

児童の反応	考察
<p>◎将来の夢はとってもいい。行きたい所。東町小の行事を書きたい。友達のこと。クラスの特徴。あつめているもの。うれしかったこと。大会の記録。子どもの学校案内。先生へのことば。70周年の詩を書く。</p>	<p>◎文集づくりの経験がよくあるようである。行事と大会の記録のことができたのは、スポーツ行事に大変興味・関心を示しているからであろう。</p>
<p>◎めでたいからおめでとう集会がいい。70周年の歴史をやろう。よびかけ。おまつりやバザーをやろう。ゲームをしよう。風船をとばしたい。スライドがいい。係などは、委員会がやり、学級の代表も入れる。みんなが楽しめてあきないようにする。</p>	<p>◎よびかけは集団のまとまりを示す。スポーツ行事が多い本校では、まとまりにはよい力を示すと考える。</p>

5. 研究協議会から

(1) 学校行事と児童会活動との関連の問題

実際の集会の内容の多くが、参加児童の活動として「見る活動・聞く活動」であったことから、この集会はむしろ学校行事ではないかとの指摘を協議会参加者から受けた。この指摘を基に、学校行事としての集会的活動と児童会活動としての全校集会の活動との相違およびその関わりについて討論された。

① 子どもの側から

次のように学校行事と児童会活動との相違を押えておくことはできないだろうか。学校行事は児童にとって「参加する活動」、児童会活動は「創意工夫する活動」というふうにである。

② 教師の側から

学校行事は結果が評価される。児童会活動では、むしろ過程が大切である。このことは児童会活動における教師の指導性の内容に関わってくる。学校行事では、児童のより主体的な参加意欲を高めるための児童への働きかけがその主な内容となるが、児童会活動では、子どもの活動を援助してやるという立場に立つのである。

(2) 指導の見通しを持つということ

全校集会には、おおまかに言って現在3つのタイプがあると言える。子どもの活動にまかせた純然たる児童会集会、学校行事として行われる全校集会、あいまいな全校集会（ゆりの時間なども含まれながら）

それぞれの態様は、その時点での学校の実態にもよるのであろうが、その時々での指導のねらいを明らかにし、どのような水準の活動に引き上げようかという指導の見通しを持たない実践は望ましいものとは言えない。

この「おめでとう集会」を通して獲得した代表委員会活動の質の水準を、次にはどのような活動を展開させることを通して引き上げてゆくかという見通しを持つべきだと教えられた。

III 児童会活動の特質にかかわる問題点——事例からの学び——

1. 年間指導計画と実施計画

(1) 年間指導計画

S校では、保健委員会の児童が、厚着調べをすることになり、給食準備の時間に各クラスを回りました。4年のあるクラスへ行った児童が、「いきなり来て、内容もよくわかりません。クラスにも予定があるので困ります。」と断られてしまいました。指導計画によってあらかじめ教師の共通理解が図られ、児童の実施計画がしっかり作られていたならこんなことにはならなかったでしょう。

<なぜ指導計画を作るのでしょうか>

- ① 指導者が児童会活動の特質に基づいた適切な指導ができるようにするためです。そのことによって、児童に見通しをもった活動が期待でき自発的・自治的活動も可能になります。
- ② 児童の作る年間実施計画に適切な助言や示唆を与えることができるようになるためです。
- ③ 先生方の共通理解をあらかじめ図っておくためです。

<どのように作ったらよいでしょう>

ここ数年の実施記録を基にします。その学校で伝統的に(校風として)行われている活動をまず組み入れ、他に予想される活動を入れます。なお予想される活動は実施予定の回数より少し多めに用意しておきます。

<指導計画の項目としてはどんなものが必要でしょう>

代表委員会活動				委員会活動			
① 組織	どんなメンバーで組織するか。			①	ねらい		
②	活動回数, 活動日			②	活動時間 定例日と常時活動		
③	任期, 代表委員選出の方法(含役員)			③	編成の方法と人数の見通し		
④	予想される議題, 活動内容			④	任期		
⑤	議題集めの方法			⑤	活動内容		
⑥	活動内容						
	月	議題	集会活動	学校行事	委員会	自発的自治的活動	当番的補助的活動
	4	1年生を迎える会の計画を立てよう	1年生を迎える会	入学式 始業式	飼育	○委員会のシンボルマーク作り ○鳥や魚の紹介 ○うさぎの名前アンケート	○小動物の世話
⑦	その他の予想される活動例				図書	○本の紹介	○貸し出しの世話
⑧	指導上の留意点						
	ア 児童の手にまかせられる範囲						
	イ 経費の見通し						
							⑥ 指導上の留意点

(2) 実施計画のたて方

<どんな形式がよいのでしょうか>

学期や年間の計画か、一単位時間の計画かによっても異なりますし、話し合い活動か集会活動かによっても違ってきますので、形はさまざまです。児童が活動しやすいように、なるべく具体的に作るとよいです。

<児童に作成させる時に、どんな観点で助言したらよいでしょう>

- ア 児童の学校生活上の問題であり全学年に共同の問題か
- イ 児童の能力に合い、児童の手で実践する見通しのある内容か
- ウ 自治的活動として児童にまかせられる内容か
- エ 児童の必要と要求による内容か
- オ 創意工夫の余地をもつ内容か

<例1 代表委員会の話し合い活動> 配慮事項

第 回 代表委員会実施計画	
議題	
提案理由	
日時	場所
司会	(副)
ノート書記	黒板書記
提案者	
話し合いのめあて	
話し合いの順序	<ol style="list-style-type: none"> 1. はじめの言葉 2. 出席の確認 3. 議題を選んだ理由の説明 4. 提案理由の説明 5. 話し合い <ol style="list-style-type: none"> ① ② ③ 6. 決まったことの実表 7. 先生の話 8. おわりの言葉
準備する資料	

〇〇についての抽象的なものより、
 「〇〇の計画をたぼう」
 「〇〇のほい方をきめよう」
 などの行動目標的な書き方がよい
 みんなの問題であることがわかり、4年生にもわかる書き方
 議題をより具体化したこと。
 「〇〇の割りあて表をみる」「〇〇の解決策を出す」など
 議題によって順序がよい場合と、原案を用意した方がよい場合がある
 みんなが考える時の参考になるもの
 「アンケートの結果」「場所の図」など

※ 年間または学期の実施計画には次のような項目を入れるとよい。

- ・めあて
- ・活動計画
- ・議題の集め方
- ・計画委員の役割分担

<例2 集会委員会の集会活動>

集会名	風の子集会		担当	C班	会場図
日時	12月10日(土) 8:30~8:50		場所	校庭	
準備するもの	マイク2本、行進曲のテープ、歌のテープ、指揮台、号令用ふえ				
係	司会(佐久見) 放送(田村) はじめの言葉(金子) 終わりの言葉(中島) 整列(中村高橋) 指揮(小谷津) ゲーム説明(高橋) プリン作成(金子)				
時間	プログラム	活動すること	係		
8:30	集合・整列	集合のテープを流す 整列させる	佐久見、田村、中村、高橋		
8:33	はじめの言葉	台の上に立つ	金子		
8:34	歌 風も雪も友だちだ	台の上に立って指揮する 歌のテープを流す	小谷津		
8:37	ゲーム 子とりおに	ゲームの説明をする 合同をする	田村		
8:46	終わりの言葉	台の上に立つ	高橋		
8:47	退場	行進曲のテープを流す	中島		
先生から	子とりおにが楽しそうですね。1年生にもわかるようにやり方説明してあげてください。				
反省	歌のテープがながなが出なかった。司会が、ちがう方法で進めればよかった。				

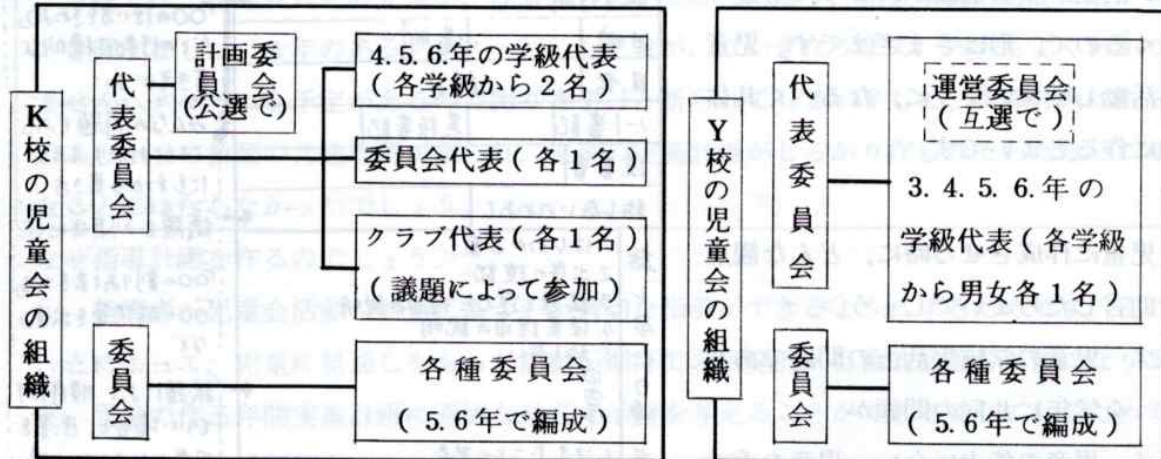
※ この他に次のようなことを入れることもある。
 ・ゲームの説明
 ・各学年へのお礼
 ・前日までの仕事
 ・次の予定

2. 児童会の組織と運営

(1) 組織づくり

うちの学校の代表委員会は学級代表だけで構成されています。委員会やクラブの代表も入れたいと思うのですが、組織づくりはどうすればよいのでしょうか。

<組織のあり方>



<組織づくりについて>

代表委員会には自発的・自治的活動を促進し、円滑な運営を進めるための組織があります。それは、計画委員会・運営委員会・プログラム委員会・議長団・司会者グループなどと呼ばれています。また、代表委員会を代表する子どもは「議長」や「会長」などと呼ばれています。組織とその名称は、① 簡素であること。② 子どもに分かりやすいこと。③ 役割が自覚できるものであること。などに留意してつくることが大切です。

代表委員会は学級代表が多数を占めており、主な構成者です。ですからときには学級代表の質が活動を左右することがあります。一般的には各学級から男女各1名の計2名が選出されていますが、任期が問題となることがあります。通年制・前後期の2期制、学期交代の3期制があります。議題によって代表が交代して出席するという学校もあります。問題となることは代表の子どもに代表委員としての自覚が欠けていると活動が停滞するということです。代表者には学級の代表であるとともに全校の立場で考えなければならないことをしっかりと理解させることが大切です。

委員会・クラブの代表は、代表委員会が全校的な活動を進めるうえで重要な役割を果たします。代表委員会の人数が多すぎるとか、各種委員会の常時活動に支障があるとかの場合を除いてはできるだけ出席できるようにしたいものです。

<時間のとり方との関係について>

代表委員会に各種委員会やクラブの代表を参加させていない学校の実態を見ますと、委員会活動と同じ時間に代表委員会を行っていることが多いようです。代表委員会だけを開く時間が週時程表に確保されていないのです。このために全校の児童や教師の代表委員会への興味・関心が薄くなり、活動が低調になっていくように思われます。代表委員会が本来の機能を発揮で

きるようにするためには、週時程表に時間を確保することが必要です。また、臨時に開けるようにしておくことも大切です。時間的な保障があれば、K校のような児童会組織も可能になると思います。

<S区立O小学校の例>

運営委員会……代表委員会の議長団となり計画を立てる。選挙によって選ばれる議長1名(6年)・副議長2名(5・6年各1名)・書記2名(5・6年各1名)と、選挙ではなく4・5・6年の各学年1名ずつ出てきた学年代表との計8名で構成される。任期半年・委員会の時間に活動する。

代表委員会……4年から6年までの各学級2名の代表委員・各委員会の委員長が出席する。月1回を定例とする。任期は半年。

教師の参加……代表委員会にはできるだけ各学年一人ずつ参加してもらおう。教師間の共通理解が得られなければ子どもたちの願いをかなえてやることは難しい。

(2) 同じ委員会に所属できる期間(任期)

今は通年制でやっています。先生方から前・後期交代の2期制にしたいという意見が出ています。どのように考えて決めたらいいのでしょうか。

現状を見ると、1年間あるいは2年間同じ委員会に所属できる学校、1年を前・後期に分けて年間2つの委員会に所属できる学校、2年間で3期に区切って3回所属を替えることができる学校などがあります。指導書には「1年間は同一の委員会に所属して活動することが望ましい」と書かれています。

S区立Y小学校では、以前は前後期に分けて10月に所属替えをしていました。2期制にしていた主な理由の一つは、2年間のうちにできるだけ多くの委員会活動を経験できるようにする、二つめは、子どもの希望を生かし意欲的に活動できるようにする、でした。しかし2期制には次のような問題点がありました。① 委員会内の人間関係が深まらない。② 期間が短く見通しを持った活動がしにくい。③ 成就感が得られないことが多い。④ 役割意識が低く、交代時の引き継ぎが円滑に行われず活動が停滞する。

これらのことを検討した結果Y小では通年制に変えました。変えるに当たって最も留意したことは所属を決める際の指導のあり方についてでした。しっかりした考えを持って希望を出す子どもは多いのですが、一方では「目立つ」「かっこよい」「楽しそうだ」という委員会に人気が集中したり、「友だちが入るから」という安易な気持ちで希望を出す子どももいました。こうした弊害を少なくするために委員会活動の紹介を行ったり、学級指導でしっかりと所属の決め方を指導したりしました。

通年制にして委員会内の人間関係は深まり、見通しを持って自主的に活動するようになりました。しかし、評価がいい加減になると活動が形式的になりマンネリ化してきます。また、委員会に不満を持つ子どもには適応指導が必要です。

Y小の例を参考にし、それぞれの長所・短所を踏まえて任期を決めることが大切です。

(3) 児童会役員公選の問題

直接選挙によって児童会役員を選出していますが好ましくないのでしょうか。

大別すると、(I) 何らかの方法で役員を選出している学校、(II) 役員に変わるものとして、計画(運営、プログラム等)委員会を設定している学校の2つに分けられるようです。

又、(I)は、代表委員会に出席する学年の全児童による直接選挙と代表委員会内による互選の2つに分けられ、大部分の学校は、これら3つの型のうちのいずれかをとっているようです。

ここでは、計画委員会から直接選挙に変更したA校と、逆に直接選挙から代表委員会内の互選そして、計画委員会へと変更したB校を例にとって考えてみたいと思います。

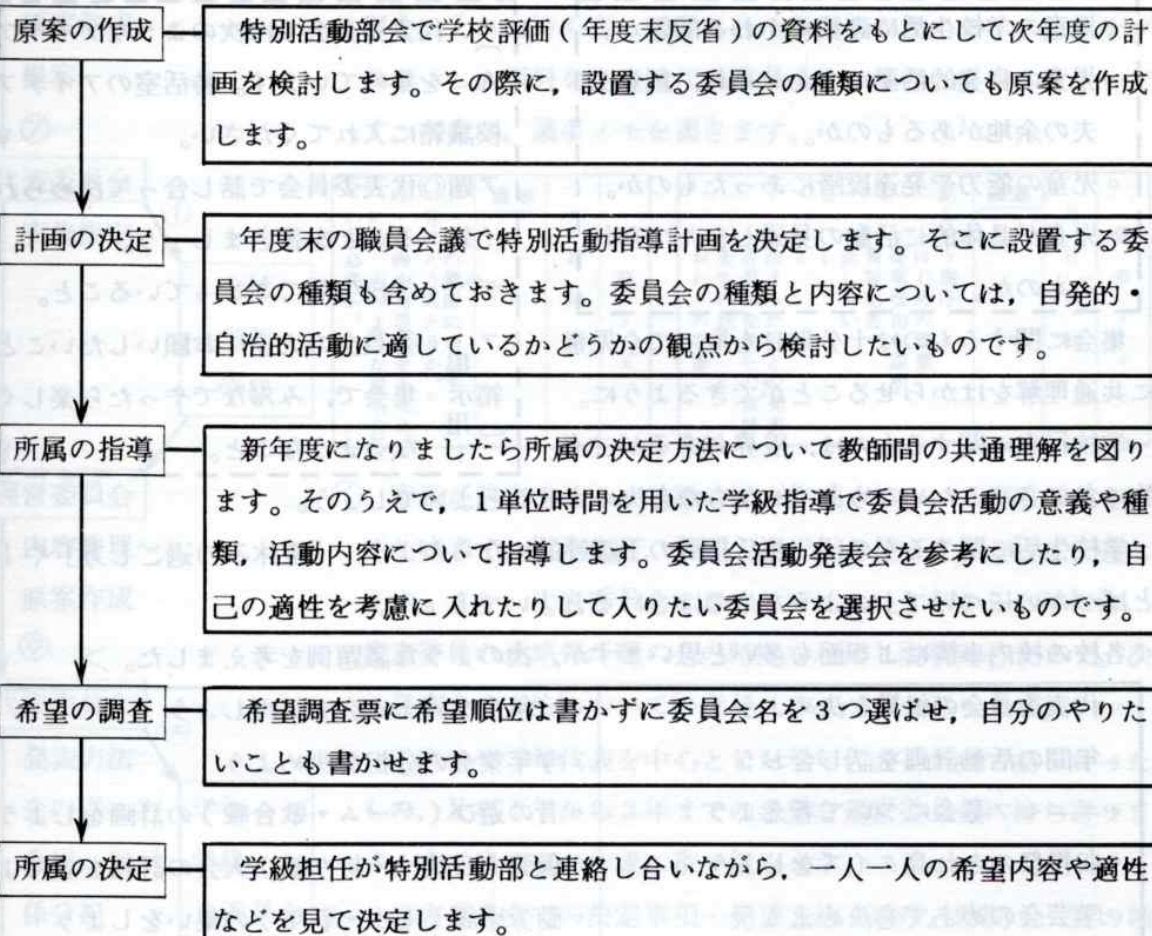
	A校<計画委員会→直接選挙>	B校<直接選挙→互選→計画委員会>
変更前 の実態	<ul style="list-style-type: none"> ○計画委員会で、議題の選定・実施計画を作成し、代表委員会で検討・決定をし代表・計画及び関連する委員会で、実施という方法をとっていたが、計画委員会の活動が充実するに従い、代表委員会が形式・形骸化してしまっ。その結果、代表委員会に対する興味・関心は薄れ、不活発なものとなってしまった。 ○「子供は、小さな大人である」としておとなのする投票を経験させその意味を理解させたいという教師側からの意向。 	<ul style="list-style-type: none"> ○直接選挙では、候補者の内容よりも、むしろ、人気投票的な傾向が強くなってしまい、児童会に対する興味・関心も一時的で上滑りなものになってしまった。 選挙自体が、目的となり当選した児童が、エリート意識を持ってしま。 ○いわゆる児童会三役と称する会長・副会長・書記で構成され、児童会活動に関するすべての運営や企画立案がまかされてしま。当然、児童の自発的・自治的な範囲をこえ、教師の指導性が強まってしま。
主な指導	<ul style="list-style-type: none"> ○教師間で、選挙の目的に対する共通理解を持ち、十分な学級指導を行なう。 ○児童会役員は、代表委員会に対する「縁の下の力持ち」的存在であることを十分に理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○代表委員会と計画委員会の活動内容・性格の違いや関連のさせ方を明確にする。 ○代表委員会のメンバーが、いくつかのグループを組み、互いに一定期間計画委員会や議長団の役割を果たすようにする。
変更後の 成果	<ul style="list-style-type: none"> ○選挙活動やそれに伴う学級指導等によって、児童会に対する興味・関心が高まった。 ○役員は、代表委員会の一機関となり、活動の主体が、代表委員会に移行し、代表委員の活動意欲が高まった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○代表委員会の話し合いの効率化が図られ内容が充実した。 ○代表委員会の一機能としての計画委員会のはたらきが円滑となり、また所属する成員が交代で、その役割を経験でき、充実した活動が可能となった。

一般的に、計画委員会や議長団は、代表委員会での互選が、望ましいと言われていますが、選挙制だけを取り上げて問題にするのではなく、選挙制を含めた児童会活動に対する教師間の共通理解の有無・児童会活動に対する十分な学級指導が行なわれているか、又児童の興味・関心はどうか等児童の実態を考慮し、学校の実態に合わせ総合的に判断することが必要です。

(4) 委員会の設置手順と種類, 所属決定の方法

児童の活動をより自発的・自治的にするためにはどのような手順で委員会を設置し、どのようにして所属を決めたらよいでしょうか。また、一般にはどんな委員会があるのでしょうか。

<設置手順と所属決定の一方法>



<委員会例>

- 集会委員会 ○新聞委員会 ○放送委員会 ○保健委員会 ○図書委員会 ○飼育委員会
- 運動委員会 ○栽培委員会 ○美化委員会 ○掲示委員会 ○給食委員会

<E区立M小学校の例>

M小では、10の委員会を設け、5、6年生の児童で組織し、通年制で行っています。まず年度末に特活部で反省をふまえて問題点を確認し、整理し、その解決を図るための年間指導計画の原案を作成します。それを全職員で検討し、補足・削除等をするなどして共通理解を図って決定します。

これに基づいて各委員会の人数を決めます。子どもには委員会の種類と内容、人数などを知らせるとともに所属についての指導を行います。それから希望カードに第1希望から第3希望まで記入させます。学級担任は人数がかたよりすぎないように全体を見ながら、一人一人の子どもの意向を確かめて所属を決めます。

3. 代表委員会の議題例と活動の流れ

(1) 望ましい議題例

代表委員会の議題を集めると、集会に関する議題が多くなってしまいますが、どのような議題で話し合ったらよいでしょうか。

<議題として取り上げるための配慮はどのようなことがありますか。>

- 児童の学校生活に直接かかわる問題か。
- 児童の自発的活動にまかせられ、創意工夫の余地があるものか。
- 児童の能力や発達段階にあったものか。
- 児童が具体的に活動の見通しをたてられるものか。

代表委員会では次のようなアイデアAをまとめています。特活室のアイデア箱に入れてください。

議題◎代表委員会で話し合っ
て決められたい箱

ることを書きましょ
う。

◦ 学校生活でこま
まっていること。

◦ 委員会の人達
にお願いしたいこと。

◦ 集会で、みんな
でやったら楽しくなるようなこと。

集会に関するものは十分期日を取って全児童に共通理解をはからせることができるように。

学校行事に関するものは、限界はあるが主体的に参加させるためのめあて的なものを決めさせるとよいでしょう。

学校生活に関するものは、生活指導の下請け的にならぬよう、「夏休みの過ごし方」や「ことばづかいについて」のようなものはさけるとよいでしょう。

<各校の校内事情による面も多いと思いますが、次のような議題例を考えました。>

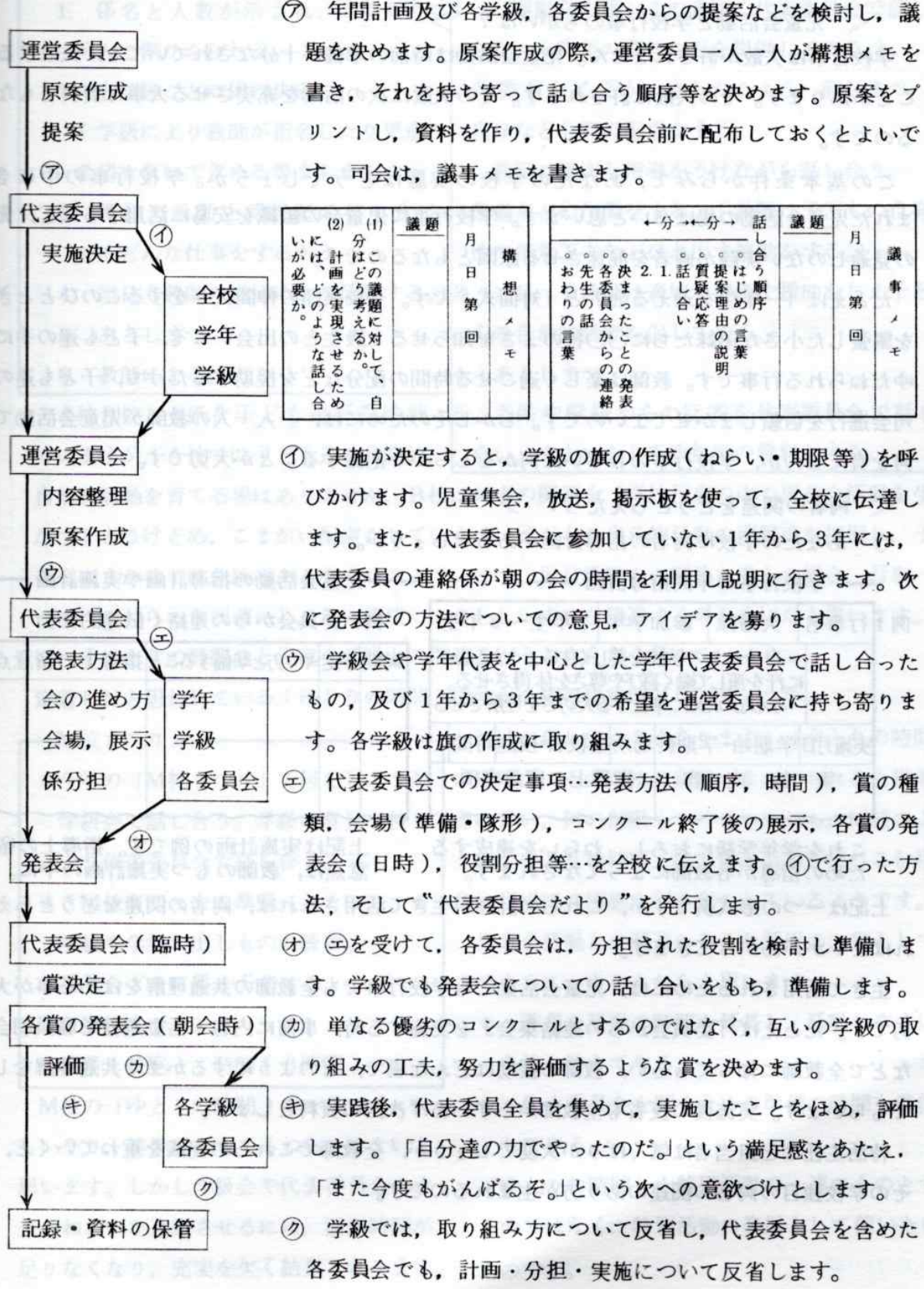
◦ 代表委員会の組織を決めよう	◦ 一年生を迎える会を計画しよう
◦ 年間の活動計画を話し合おう	◦ 学年集会の分担を決めよう
◦ ユニセフ募金について考えよう	◦ 昔の遊び(ゲーム・歌合戦)の計画をしよう
◦ 収穫祭のとれ高クイズをしよう	◦ 仮装(日焼け・折り紙)大会の計画を立てよう
◦ 学芸会のめあてを決めよう	◦ 勤労感謝(七夕・新年)の集いをしよう
◦ 学級新聞のコンクールをしよう	◦ スポーツ(縄とび)大会を計画しよう
◦ 学級の楽しい遊びを紹介しあおう	◦ クラブ(委員会)活動の発表会を開こう
◦ 代表委員会掲示板の使い方を決めよう	◦ 読書感想(〇年生の希望)発表会をしよう
◦ 運動会の応援団をつくろう	◦ 代表委員会の一年間のまとめと反省をしよう

<全校児童や、教師への広報のしかたを工夫しましょう。>

「代表委員会だより」に毎月話し合ったことと、決定事項、翌月の議題、学級で話し合うことをのせ、印刷します。集会等の計画案は早めに出し、学級・学年で決める事や、注意することは項を起こして書きます。プリント類は学級の代表を集めて配布し、口答発表をさせてから掲示します。低学年には、高学年等が各教室に行って説明したり、ゲームなどの練習をさせます。「特活部だより」で特活部で話し合ったことなどを書き、教師間の共通理解をはかります。その他、委員会集会で発表したり、朝や、昼の放送を利用し、全体によびかけます。広報活動をくり返し行うことで全校児童へ浸透させ、次の議題提出の意欲を持たせることが大切です。

(2) 活動の流れと指導の手だて

代表委員会が中心となって、「学級の旗コンクール」を行うことになりました。実施までに、どのような話し合いをしていけばよいのでしょうか。



㉞ 年間計画及び各学級、各委員会からの提案などを検討し、議題を決めます。原案作成の際、運営委員一人一人が構想メモを書き、それを持ち寄って話し合う順序等を決めます。原案をプリントし、資料を作り、代表委員会前に配布しておくといひです。司会は、議事メモを書きます。

(2) 分は、この議題に対して、自己が必要か。	(1) 計画を実現させるためには、どのような話し合いが必要か。	議題	月 日	構 想 メ モ	議 事 メ モ
			第 回		

話し合う順序	議題	月 日	議 事 メ モ
はじめる言葉		第 回	
提案理由の説明			
質疑応答			
話し合い			
2. 決まったことの発表			
1. 各委員会からの連絡			
先生の話し言葉			
おわりの言葉			

㉟ 実施が決定すると、学級の旗の作成(ねらい・期限等)を呼びかけます。児童集会、放送、掲示板を使って、全校に伝達します。また、代表委員会に参加していない1年から3年には、代表委員の連絡係が朝の会の時間を利用して説明に行きます。次に発表会の方法についての意見、アイデアを募ります。

㊱ 学級会や学年代表を中心とした学年代表委員会で話し合ったもの、及び1年から3年までの希望を運営委員会に持ち寄ります。各学級は旗の作成に取り組みます。

㊲ 代表委員会での決定事項…発表方法(順序、時間)、賞の種類、会場(準備・隊形)、コンクール終了後の展示、各賞の発表会(日時)、役割分担等…を全校に伝えます。㉞で行った方法、そして“代表委員会だより”を発行します。

㊳ ㊲を受けて、各委員会は、分担された役割を検討し準備します。学級でも発表会についての話し合いをもち、準備します。

㊴ 単なる優劣のコンクールとするのではなく、互いの学級の取り組みの工夫、努力を評価するような賞を決めます。

㊵ 実践後、代表委員全員を集めて、実施したことをほめ、評価します。「自分達の力でやったのだ。」という満足感をあたえ、「また今度もがんばるぞ。」という次への意欲づけとします。

㊶ 学級では、取り組み方について反省し、代表委員会を含めた各委員会でも、計画・分担・実施について反省します。

4. 児童会活動と学校行事及び「ゆとりの時間」の関連

児童会活動と学校行事との関連を、どのように考えたらよいでしょうか。
また「ゆとりの時間」とどう関連させたらよいでしょうか。

< 児童会活動と学校行事のちがいは？ >

学校行事は失敗が許されません。児童会活動は時前の準備が十分なされていても、失敗することがあります。その失敗は許されます。その失敗は次の活動を充実させる大事な資料ともなるのです。

この基本条件からみて、あなたの学校の実態はどうでしょうか。学校行事の中に含まれた児童会活動の場は多いと思います。学校行事に児童会の組織を安易に活用するなど、先の見通しのない実践が両者を混迷させる原因ともなるのです。

たとえば「一年生を迎える会」と「対面式」です。全校集団の仲間入りをするこのひとときを緊張した小さな弟妹たちに〇〇校のよさを知らせる上級生との出会いこそ、子ども達の手にゆだねられる行事です。教師は楽しく過ごせる時間の配分などを援助するだけで、子ども達の司会進行を信頼しまかせてよいのです。しかしそのためには、一人一人の教師が児童会活動で何を育てるのか、学校行事のねらいは何かをしっかりと把握することが大切です。

< 両者の関連をどうとらえたら？ >

◇ あなたの学校に両者の指導計画があるでしょうか。

—— 学校行事の年間指導計画 ——

例1	行事名	大掃除	参加学年	2年生～6年生
		○自分たちの学校を美しく住みよくするために汗を流して働く喜びや尊さを体得させる。 ○みんなのために奉仕する大切さを理解させる		
	実施月日	学期始・学期終	場所	全校舎・校庭
	実施内容	指導上の留意事項		

—— 児童会活動の指導計画や実施計画 ——

例2 委員会からの連絡（伝達的集会）

時間	予定	やり方と準備すること	指導上の留意点

これを学年学級におろし、ねらいを達成するための指導が各教師によってなされます。

上記は実施計画の例です。指導上の留意点は、教師のもつ実施計画の中に。

上記は一つの形式例ですが、これらの計画が生きて活用されれば、両者の関連をどうとらえればよいかかわってきます。

生きて活用されるためには、児童会活動でも学校行事でも全教師の共通理解をはかる事が大切です。たとえば「委員会からの連絡集会」を実施する時、事前に内容・活動過程を職員朝会などで全教師に知ってもらい、教師の援助はどんな場で、どのようにするかまで共通理解をしてもらいます。実施後の反省も全教師からすいあげ次回の資料とします。

特活主任など担当者は気づきが大変でしょうが、全教師でこれらの実践を重ねていくと、その学校独自の両者の関連のあり方が生まれるのです。

◇ 具体例から望ましい関連をさぐる

—— 運動会の係 ——

A 校	B 校
<ol style="list-style-type: none"> 1. 係名と人数が示され、5年6年に何人と割りふられる。 2. 各学級ごとに係の決定 (学級により教師が指名したり児童の希望をきいてきめる等まちまち) 3. 係担当教師と係児童の打ち合わせ(どんな仕事をするか) 4. 当日(教師の指示により活動する。) 5. あとしまつ 6. 教師による反省 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「運動会の係」この議題で代表委員会で話し合う。(昨年の資料などを提供してやる。) 各委員会に係がいきわたるよう、前日まで、当日など分担の配慮をする。 2. 教師の適切な指導をうけながら話し合う。 準備などの作業をする。(教師は子どもの自発性や創意工夫などひき出す援助をする。) 3. 当日(教師は適切な評価や援助を与え子どもの自治的活動を促してやる。) 4. あとしまつ 5. 各係や学級からの反省を代表委員会で話し合い。まとめをして次年度の資料とする。

A校B校とも係を子ども達が受け持っています。A校では子ども達の自発的、

自治的活動を育てる場はありません。B校は両者の関連を「学校行事の中で児童会活動を生かす」とうけとめ、こまかい配慮をしています。子どもの自治的活動の困難度を把握し、子どもにまかせては危険である事をおさえています。児童活動との関連を考えた場合、行事一つ一つのねらいを明確にし、その達成にふさわしい内容を精選する事も大切だと思います。

< 『ゆとりの時間』と児童会活動との関連をどうおさえたら? >

定着したと思われる「ゆとりの時間」ですが各校の現状はどうでしょうか。

「M校まつり」

- 今年の「M校まつり」で何をしようか学級会で話し合う。学級の意見を持ちより代表委員会で話し合う。
- 「M校まつり」の準備学級や学年の出しものの練習。委員会ごとに係を分担する。
- 「M校まつり」場所(校庭) 時間(3時間)

M校の「ゆとりの時間」の一例です。おもしろい、連帯感を育てるねらいはよいと思います。しかし学級会や代表委員会の本来のねらいを達成させるには、活動時間が足りなくなり、充実を欠く結果となります。

M校に似た例は多くあります。「ゆとりの時間」の活用は、その学校の創意にまかせられると指導書は言い、何の制限もつけていません。M校のように「ゆとりの時間」に児童会活動が流れこむ現象は現場での困惑を引き起こしているようです。児童会活動との関連からみた活用の一例として次のように、とらえたらと思います。

- 委員会活動の時間を延長し、活動しやすい条件を整えてやる。
 - 代表委員会を開くための準備の時間を確保してやる。
- 「ゆとりの時間」を特別活動の一連のものとするのではなく、特別活動の発展として使いたいものです。

5. 見通しをもった指導

児童会活動の特質をふまえた適切な指導とはどんなことでしょうか。見通しをもった指導が必要だと言われてはいますが具体的な事例を通して、その特質をつかみたいのですが。

活動の主体である児童自身に活動に対する見通しをもたせることが大切です。以下、次の4つの観点から述べてみたいと思います。

話し合いの中で具体的な活動のイメージをわきたたせる。

→ 代表委員会でも委員会でも、実践の過程を話し合いの中で児童が納得していく必要があります。

ある代表委員会で、「手作り遊び集会の計画を立てよう」という議題で話し合いが進められました。この話し合いのために下のよ

うな実施計画が作られました。この計画による話し合いの一部です。「全校のみんなから、どんな遊びをしたいか募集するといいい」、「募集した遊びのコーナーの中から10個ぐらいのコーナーをつくるといいい」、「遊びの内容は各コーナーごとに6年生が中心になるといい」、「10個ぐらいのコーナーだと校庭の方がいいと思います。広いからのびのびやれる。」

このような話し合いを通して、どんな集会をしていくかを確認し合います。特に実施計画の①の柱を中心に代表委員の成員一人一人のもつ活動へのイメ

ージをつくりあげていきます。事前の活動(計画委員会等)で活動の筋道がある程度できている場合でも、具体的にどうするかを1つ1つ確かめるようにして話し合うことが大切です。

成員の一致協力を大切に育てていく。(温かい人間関係の支え合い)

→ 四月の第一回委員会活動の時間に、「ぼくは、ジャンケンに負けてしまったのでこの委員会になりました。」と、述べる子がいます。この子にとってその委員会は、存在価値の極めて低いものであり、構成メンバーとの協働性も育っていきません。

ある栽培委員会では、曜日ごとに花壇への水当番を決め、当番日誌の中に「次の当番へ」という連絡項目を作りました。そこに、「きのうの丸山さん達が花だんの草取りをしてありました。私達もやりましたが、まだ残っています。植村さんを中心にしてがんばって下さい。」「もう2~3日でチューリップが咲くと思います。大切にしてくださいね。」などと記載されました。日誌の一つのメモらんが少しずつメンバーの所属意識を高め、「自分がこの委員会にいないては…」という気持ちを育てていきました。

子ども達は活動の事実を通して、人間関係を育て、次の活動はどうしたらよいかを自らの力で開拓していくのです。この栽培委員会では、一学期のメモらんをまとめて、二学期の活動計画づくりの参考にしました。この時点では、更に一步高い次元での一致協力ができ、「自分たちの力で菊づくりをしよう。それを校舎内に飾ろう。」という活動へ発展していきました。

＜ 実施計画 ＞ (概略)

③ 当日までの準備の仕方をどうするか。 (あと2週間の予定を考える)	・ポスター係など ・リーダー ・司会 ・各コーナーの準備係	② 役割分担を決める ① どの集会をするか	話し合いの柱 議題「手作り遊び集会の計画づくり」
---------------------------------------	--	--------------------------	-----------------------------

相互に、個の役割を
理解させる。
(役割分担の明確化)

代表委員会も委員会も月に1~2回しか設定されない学校が多いと思います。特に常時活動を主体とする委員会活動では、個の役割を成員相互がどう理解し合っているかが重要なことです。

図書委員会のS男は、毎週水曜日に実施している「読みきかせ会」の読み手にはじめて選ばれました。日ごろ目立たないS男は、読み手になれた喜びをもち、「どんな本を、どう読んだらいいかな」などと迷っていました。このとき、となりのクラスと同じ図書委員のK男から「1,2年もS男君が読んでくれるのを楽しみにしているよ。ポスターに君のことを書いておいたからね。」と声をかけられました。S男は、当日までに何回も読む練習をしました。そして、当日1,2年生に大きな拍手をもらったのです。

個の意欲を成員相互が支えることによって、個は自分の役割に目的意識をもつと考えられます。自分の為すことをみんなが知っていてくれると実感するとき、活動の1つ1つに自信を深めていくものです。

< 個人カード >の例

「わたしの役割」 (5の1)	
(上田ちえ子)	
活動名	学級の歌 発表会をしよう
役割	司会(当日),インタビュー(前日まで)
当日までの計画	<ul style="list-style-type: none"> ◦各クラスをまわって、曲の紹介内容をまとめておく。(100字くらい) ◦他の係と協力して、ポスターをつくる。(5~7枚くらい)

また、代表委員会のあと、個々の役割を「個人カード」(右図)にして、掲示板にはっておくようにしました。このことによって、話し合ったことを自ら認識(役割の自覚)するとともに、成員相互に理解し合って活動を展開していけます。

活動の成果を十分に
還元し、成就感や満足
感を味わわせる。

1つの活動を体験したとき、児童はその成果・喜びを次の活動に生かそうとします。「計画委員会するとき、うまく原案を作ったから、3・4年生もうまく発言していたよ。」(議長団へ)、「記事集めのポスターが低学年にとっても喜ばれていたよ。先生もほめていたね。」(新聞委員会へ)などの事実の成果を具体場面を通して認めていくと、「よし、この次もこう活動してみよう」という意欲に基づく見通しをもつものです。

児童が、代表委員会や委員会で積み重ねた「活動の財産」をそのままにせず、どういうふうによかったのか、どこを改善したらよいかなどとふりかえらせる必要があります。

全校的な集会を企画実践したあとの代表委員会で活動をふりかえる話し合いを行いました。「各委員会ごとの司会や準備・放送などの役割を分担したことがよかった。」「3年と4年の学級代表の人が、1年生への連絡をうまくやってくれた。」などを相互に確認し合うことで、児童は役割分担の仕方、低学年への連絡の方法を理解し合うのです。この認め合いが、(やったよかった)→(この次はこうやろう)という活動過程をつくっていくのです。すなわち、(計画)→(実践)→(評価)→(計画)…というサイクルを児童自らが生み出していくのです。また、教師の「君の司会はうまいね。会がスムーズにできたよ。」「いいポスターだね。」といったその場面でのほめる助言が活動を充実したものにしていきます。

IV まとめと今後の課題

児童会活動研究部では、「実践からの学び」を大切にしながら「児童会活動の特質をふまえた適切な指導のあり方」を求めて研究をすすめてきた。全体テーマを受けとめての第一年次の研究の成果として、次のようなことが挙げられる。

1. 研究のまとめと成果

(1) それぞれの学校の実態に根ざした、活動実践の積み重ねが大切である。

理想ばかり掲げても、実践のともなわない教育活動の効果はあり得ない。それぞれの学校が、特別活動を教育課程にどう位置づけ、何をねらいとする教育活動であるかという構造的な背景をしっかりとつかむ必要がある。そして、それぞれの学校の実態をふまえ、それぞれのねらいに即した教育活動を確実に実施することが大切である。ややもすれば、特活の時間が他教科にふり換えられたり、ねらいとはずれた教育活動が展開されていたりしてはいないかという見直しをするとともに、“なすことによって学ぶ”という特別活動の特質をより一層大切にしたい。

(2) 児童会活動の基本的な特質は、“児童の活動”であることを銘記すべきである。

児童自ら気づき、計画し、実践し、評価、反省し、向上していく活動、それが児童会活動の基本である。従って、子どもの能力や経験から考え、高度なものを最初から期待してはならない。試行錯誤が許される唯一の教育活動として、指導者のよき協力者としての役割が必要である。経験の浅い子どもたちに多くの情報を提供し、自ら実践する意欲を高める適切な指導助言の面で指導者の資質が問われているのである。

2. 今後の課題

一年次の研究から、今後の課題として多くのことが残された。主なものは次の通りである。

(1) 「実践からの学び」を大切に研究する方法では、「これが望ましい指導のあり方だ。」という結論づけはできない。児童会活動に関する特質の洗い出しもまだまだ不十分であったと考える。

(2) いわゆる「ゆとりの時間」の教育活動と児童会活動のかかわりについても、今年度の研究はその緒についたばかりで多くをふれてない。今後は全都的なアンケート調査などからその実態をつかみ、研究を深めていかなければならない。

3. おわりに

今年もまた、各地区の研究部の方々のご協力を得て、授業研究ができたことを感謝しております。特に授業公開校となりました大野田小、東町小、桃三小の校長先生をはじめ職員のみなさん、区市の研究部の方々にお礼申し上げます。終わりにりましたが、この一年間、本研究部の講師として適切にご指導ご助言をいただきました中田前会長、外村副会長には心から感謝申し上げますとともに、今後のご指導もよろしくお願い致します。

III クラブ活動

テーマ 「クラブ活動の特質を高める集団活動のあり方」

I	まえがき — 研究のテーマについて・研究へのとりくみについて	58
II	クラブ活動の実践	59
	1. 組織について	59
	ア. 構成のあり方	59
	イ. 選択指導	61
	ウ. 種類の変化	63
	2. 運営について	65
	ア. クラブ内の組織のあり方と役割分担	65
	イ. 伝統を生かしたクラブのあり方	68
	ウ. 発表の場の多様化	70
III	クラブ活動の実態調査と分析	72
	ア. クラブ活動の現状調査から	72
	イ. クラブ活動の意識調査から	76
IV	研究の反省と今後の課題	80

研究・執筆者名簿

	部長	関口 照治	墨田・菊川小		鈴木日出子	中野・桃園第二小
	副部長	後藤 治司	荒川・第二瑞光小	(発表)	長田 信彦	豊島・高松小
	副部長	湯田 耕司	三鷹・井口小		山崎 玲子	北・第三岩渕小
		原田喜美子	千代田・千桜小		鷺尾みよ子	北・第三岩渕小
		樋口 恵子	港・竹芝小		小野 幸子	荒川・四日暮里小
	(記録)	野口 アヤ	新宿・淀橋第六小		窪田 正規	練馬・光ヶ丘一小
		安藤 千景	文京・金富小		中井由貴子	足立・梅島小
		菅野 靖江	台東・東泉小		近藤 和子	足立・花畑西小
	(記録)	中嶋美沙子	墨田・緑小		広瀬 信彦	江戸川・篠崎小
	(発表)	塚越 正昭	墨田・両国小		宇都宮 透	八王子・陶鎔小
		橋本 京子	品川・第三日野小		山本 浩	八王子・稲荷山小
		金子小夜美	目黒・八雲小		長田 路子	武蔵野・桜堤小
		横越 光伸	太田・馬込第二小		岡田 一男	三鷹・第二小
		竹内 宣	世田谷・武蔵丘小		依田 雅江	昭島・富士見丘小
		佐々木裕義	渋谷・臨川小		上川 正徳	町田・小山田小
		佐藤 正吉	中野・北原小		佐久間英明	稲城・第八小

I まえがき

1. 研究のテーマ

都特活の研究主題は「特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成」である。昨年度の反省(1)選択指導をより充実し子どもの本音をよりの確につかんで指導を深める。(2)クラブ活動の具体的な評価の方法を工夫し、改善点を持ちよって研究を深める。(3)集団活動を高めるための指導者の役割や、予算の研究の充実に努めることに基づいて、「クラブ活動の特質を高める集団活動のあり方」を昨年に引き続き研究テーマにした。

2. 研究へのとりくみについて

クラブ活動の特質を(1)学年のわくをとらない集団活動。(2)同好の児童の集団活動。(3)共通の興味・関心を追求する集団活動。(4)計画や運営を児童自身とする集団活動と考え、クラブ活動の目的である健全な自主性の育成、豊かな社会性の育成と個性の伸長を達成するために、つぎのことを中心に研究を進めることにした。

- ①集団構成の工夫 ②集団内の組織、運営の研究
- ③クラブ活動の授業の研究 ④クラブ活動の実態調査の充実

区部、市部の幹事の連絡を密にして、各学校の問題点を集約し検討することによって、今後のクラブ活動の方向をみつけるようにしてきた。

○ 研究の経過

- 58. 5. 26(火)・本年度組織づくり打ち合わせ
- 58. 6. 3(金)・本年度研究テーマの検討、テーマ決定、実態調査
- 58. 6. 30(木)・本年度組織づくり、研究計画、クラブ活動の問題点提起
- 58. 9. 13(火)・各校のクラブ活動の問題点、クラブ活動の指導計画の検討
- 58. 10. 13(木)・墨田区立両国小学校のクラブ活動の見学
＜子どもの希望を生かしたクラブ活動＞ 種類の多様化
講師 墨田区立第二寺島小学校 木庭清八校長先生
- 58. 11. 28(月)・新宿区立淀橋第六小学校のクラブ活動の見学
淀橋第六小学校のクラブ活動の報告、クラブ活動の問題点検討
講師 都立教育研究所 指導主事 井上裕吉先生
- 58. 11. 31(木)・研究集録の内容検討
- 58. 12. 5(月)・研究集録の内容決定、執筆者の決定
- 58. 12. 9(金)・研究発表の役割分担の検討
- 59. 1. 14(土)・研究集録原稿しめきり
- 59. 1. 23(月)・研究集録の校正、研究発表者決定、役割分担確認
- 59. 2. 10(金)・研究のまとめ、研究発表準備(発表内容検討、資料準備等)
- 59. 3. 1(木)・研究発表会

II. クラブ活動の実践

1. 組織について

ア. 構成のあり方

児童ひとりひとりが、意欲を持ってクラブ活動に取り組み、活動後の満足感・成就感を体得するには、児童の要求や希望を満たした活動でなければならない。そのために、クラブの種類・活動の内容や方法の多様化を図ってきたが、クラブの所属決定の際に、児童の希望がかたよるため、男子或いは女子ばかりで構成されるクラブや、6年生或いはある学年が一人も参加していないクラブができて、そのまま発足してしまうことがある。

「健全な自主性・豊かな社会性」を育成するためには、同一クラブ内に各学年の男子女子が適当に混在している事が望ましいと考える。

この問題を解決するために、クラブ員の構成にかたよりのあるクラブに所属している児童に対して、アンケート調査を実施し、意識を調べてみた。

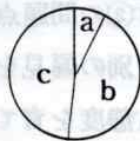
クラブ数 19

〔意識調査〕 実施日 58年12月 調査数 豊島区T校 対象児童 190名

男子だけのクラブ—8クラブ 122名	4年生のいないクラブ—2クラブ 25名
女子だけのクラブ—4クラブ 68名	6年生のいないクラブ—1クラブ 10名

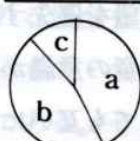
(4・6年生のいないクラブは、男子、女子だけのクラブと重複する)

(1) あなたのクラブには女子がいませんがその事について思う事を書いて下さい。



a : いたほうがいい 7%
b : いないほうがいい 45%
c : どちらでもいい 48%

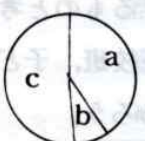
(2) あなたのクラブには男子がいませんがその事について思う事を書いて下さい。



a : いたほうがいい 41%
b : いないほうがいい 46%
c : どちらでもいい 13%

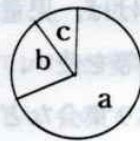
自分の所属しているクラブに、男子或いは女子がいないほうがいいと答えた児童は、男子女子合わせて45%になる。それらの児童の理由を聞いてみると、自分のクラブの内容が、男子或いは女子の活動であると考えている児童が、男子で42%、女子で65%になる。ほかの児童は、いないと静かだし、ケンカにならないというのが主な理由である。

(3) あなたのクラブには4年生がいませんがその事について思う事を書いて下さい。



a : いたほうがいい 36%
b : いないほうがいい 12%
c : どちらでもいい 52%

(4) あなたのクラブには6年生がいませんがその事について思う事を書いて下さい。



a : いたほうがいい 70%
b : いないほうがいい 20%
c : どちらでもいい 10%

6年生がいたほうがいいと答える児童は、教えてもらえるとか、難しい事を手伝ってもらえると考えている。4年生がいたほうがいいと答えている児童は、さびしいと感じている。また、どちらでもいいと答える児童は、下級生の存在については、無関心である。

児童の声

- 女の方は、あまり卓球が好きじゃないから、仕方がないと思う。
- 希望したクラブに入れるので、男も女も関係ないのではないか。
- 男子がいると、うるさくてほかの人のじゃまになるので、いないほうがいい。
- 男子が手芸をすると、なんとなくおかしい。
- 6年生がいないので、できないところをやってもらえないのでたいへん。

児童の意識の中で

- ① クラブの種類・活動内容によって、男子のクラブ女子のクラブと区別していること。
- ② 今のクラブに満足し、下級生と共に活動する楽しさ、下級生の良さを知らないこと。

この二点が、大きな問題点である。

新年度のクラブを発足させる場合、まず、児童からクラブ所属希望調査をとるわけであるが、①の意識を持ったまま実施すれば、男子女子がかたよったクラブ構成となってしまうのは当然である。また、②の事のくり返しも出てきてしまう。このような状況下では、「健全な自主性・豊かな社会性」の育成は達成されない。

対応策として、クラブの選択をさせる際に、男子女子や学年の人数の枠をあらかじめ決めて所属させていけば、バランスのとれたクラブを構成することが可能である。しかし、児童ひとりひとりの活動への意欲が高まるかという新たな大問題を引き起こすことが予想される。では、どのように対応すればよいのであろうか。

クラブ選択時の児童の希望を優先するという前提を崩すことなく、①・②の問題点を解決していくためには、児童の意識から、クラブの種類・内容に対する性別の偏見を取り除き、異学年同士であっても互いに尊重し合い、協力していこうとする態度を育てていくことが大切である。その方法としては、クラブ活動時間だけでなく、学年・学級・男女の交流を計ることを基底とした、全教育活動を展開する必要がある。例えば、全校遠足において事前に他学年との交流会を計画し、下級生の面倒をみることによりやさしさを学んだり、共に遊ぶ事の楽しさを知ったりする事。また、たて割り清掃の実施により、下級生への指導の喜びを感じたり、力を合わせる事の素晴らしさに気付いたり、上級生への信頼が深まったり、男だから女だからといった性区別を取り除いたりするような全教育活動を実践していけば、児童の意識の中に必ずや変容を期待できるものと考えられる。他にも、ゆとりの時間等を使い、学級の枠をはずした学年集会、登下校班、子ども会、スポーツ集会、たて割り集会など各学校独自のものが考えられるであろう。

このような、児童の意識面、心情面での掘り起こしを続けていけば、前述の①や②の児童の意識としての問題点も、しだいにうすれていき、望ましいクラブ構成のあり方へ近づくと考える。

イ. 選択指導

児童はクラブ活動が大好きである。そして、自分が希望するクラブに入部できるかどうか、実際の活動以前の関心事である。この結果いかんによって、児童のクラブ活動に対する期待感や活動意欲が大きく違ってくる。そして、それが児童のクラブ活動への満足感や成就感へ大きな影響を与えている。だからクラブ活動における選択指導は、児童の活動意欲と直結するだけに、大変重要なものである。

したがって、児童のクラブ活動に対する理解を深めさせることが大切であると同時に、また教師の今までの、実際の活動が始まらなければクラブ活動ではない、といった考えを変えていく必要がある。そして活動以前のこの選択指導から、“児童のクラブ活動は始まっている”という認識のもとに、教師の選択指導に慎重に取り組まなければならない。

選択指導には、年間を通して長期的に取り組む指導と、クラブ活動の所属を決める直前の指導がある。

① 年間を通しての指導

クラブ発表会・毎週朝のショート全校児童集会・学芸会等の学校行事 日頃のクラブ活動の発表紹介を中心に行う。

展示・掲示 全校の児童の目にふれる場所であること、次にクラブ活動のコーナーが常設されていることが望ましい。活動している児童の次への励ましにもなるので、是非とも発表の機会を多くしてやりたい。

このほかにも、学校放送・ビデオを利用した放送・校内新聞がある。年間を通して全校児童がクラブ活動についてふれる機会を多くすることが大切である。それは、自分にとって好きなもの、興味あるもの・おもしろいもの・やりたいものはなんなのかを自覚するよい機会となるのである。そして、3年生以上についてはそれを何度かくり返すうちに、その中でも印象に残ったクラブだけが、選択にあたって児童の心に働きかけてくるのである。またこのクラブならやれるといった確信のようなものが、児童の心に生まれてくるものである。

② 選択直前の指導

3年生を対象とする選択指導 クラブ見学会・クラブ一日入部がある。見学会についてはどの学校でも行われているようだが、事前に学級指導を通して、クラブ活動を理解させておくことが大切である。そして見学会や一日入部を通して、児童の考えを徐々にしぼる方向にもっていく必要がある、そのステップをふむうちに、児童は自分の考えが明確になっていくのである。

設置希望クラブ調査・所属希望調査 親の考えや好きな人が入るからといった考えでなく、自分の考えを優先して考えさせる指導が必要である。また年度によっては希望したクラブがなかったり、人数の制限で希望通りにできない事情も児童

に十分説明した上で用紙に書かせること、また第1～3希望をどのように取り扱うのかも、ていねいに説明することを忘れてはなるまい。

④⑥を通して、マンガクラブに入部してきた児童の声を次にのせる。

— 児童の声 —

- ・ぼくは第1希望でマンガクラブに入ってきた。いろいろなマンガの主人公をまねて書くのはうまかったので入った。それにクラブ見学に行ったとき、いろいろなマンガの主人公を書いているから、これは楽しそうだなと思った。今、楽しんでやっている。これからもっともっと楽しいクラブにしていきたいと思う。(A児)
- ・ぼくは、マンガクラブに好きで入ったわけではないけれど、おもしろい。本当は工作クラブに入りたかったけど、クラブ発表会1のとき人がいっぱいいたので、第一希望に工作と書いたら落ちるだろうという気がして、工作を第2に、そして工作と同じに人数の多いマンガクラブを第1希望にした。今、希望通りにみんなが入れたのをみると、クラブを選ぶときあれこれ考えず書けばよかったと思う。来年は絶対第1希望に工作クラブと書く。(B児)
- ・球技クラブが第1だったが多かったので、第3希望のマンガクラブになってしまった。いぜん廊下にマンガクラブの作品がはり出されていて、それを見たとき、おもしろそうだなと思った。実際入ってみると、おもしろくなかった。その理由は絵がうまく書けないので憂うつになるからだ。(C児) 以上S区E校

～は、児童がクラブの選択にあたって参考となったものである。クラブ発表会クラブ見学会、廊下の掲示物である。年間を通した指導も大切なことがわかる。A児のようにできることが望ましいが、B児のように第1希望外でも、入部後の活動内容等が本人にとって満足できるものでありたい。しかしC児のような例もある。児童の希望通りにいかない時は、クラブ担当者が学級担任と連絡をとり合い、その辺の事情について担任が十分話し、本人納得の上で所属を決定することが望ましい。また希望通りにいかなかったという不満が残るようにならない配慮をすることはいうまでもない。その上で入部してきてどうしても活動についていけない児童が出たら、転部ということも考えてあげる必要があると考えられる。

クラブ活動への導入段階は、学級担任と児童のふれ合いの中で進められることがほとんどである。したがって学級担任のクラブ活動への考え方が、児童への指導に大きく影響してくるので、クラブ活動についての深い理解が要求される。学級担任はひとりひとりの児童の個性もわかっているだけに、その児童にあったきめ細かな指導助言が大切である。学級担任の効果的な学級指導を期待したい。それが児童のクラブ活動への意欲的な活動へ結びつくからである。

ウ. クラブの種類の変化

調査数 25校 新設・廃止のあった学校 9校

廃止のあった学校 4校

新設のあった学校 6校

a. 新設, 廃止されたクラブと理由

< 廃止されたクラブと理由 >

児童の希望がない	囲碁 △将棋 器械運動 鉄道 焼物 文芸 △科学 放送劇 ダンス 体操 ゲーム 書道 △美術(図工) 手芸 演劇 算数パズル 写真
指導者の問題	写真 サッカーボール
施設・設備の関係	バスケット 体操
その他(費用)	料理

< 新設されたクラブと理由 >

児童の希望が多い	書き方 アニメ △鉄道 バスケット 陸上・水泳 音楽 体操 人形劇 郷土
児童の希望と指導者側の配慮	文芸 △なわとび 応援・軽運動 自転車 マジック けん玉 ゲーム 一輪車 演劇 読書 お琴
指導者の特技	ラジオ製作 もけい飛行機 まんが 陸上 碁・将棋
施設・設備の確保	創作あそび
統合・合併	美術 球技

(△印は2校以上にあったもの)

- ・ 廃止されたクラブで2校あったもの。将棋 科学 美術
- ・ 廃止されたクラブの最大の理由は「児童の希望が少ない」ということである。これは、活動内容上の問題について更にくわしく調べる必要があると思われる。
- ・ 廃止されたクラブは圧倒的に文化的クラブに多い。
- ・ 廃止された体育的クラブの理由は、「指導者がいない」「運動場, 体育館の広さから活動が無理である」といったものである。ただし器械運動などは, 年々児童の希望が減ってきているということであった。
- ・ 新設されたクラブの理由として「児童の希望が多い」というのは当然のことといえるが, その内容は, (1)希望調査の結果多かったので新設した。(2)希望が多いことと, 教師側からも希望が多い。というように若干の違いがあるといえる。
- ・ なわとびクラブのように校内体力づくりの発展という形で実施したり, 運動会の際に特設クラブとしていたものを応援・軽運動クラブとして実施したのものがある。

- ・ 児童の人数を分散化させるということで、自転車クラブ、なわとびクラブ、マジッククラブ、けん玉クラブと分けてしまったものもあった。
- ・ 新設されたクラブは圧倒的に文化的クラブに多い。これは、校庭、体育館など施設面で体育的クラブの新設が不可能なためであると考えられる。

b. クラブの新設・廃止についての考察

- ・ クラブの新設・廃止を毎年のようにする学校がかなり多いことが、ここ2・3年の調査から現れている。こうした事実をクラブ活動の目的から考えた場合、改めて検討する必要があると思う。すなわち「すでにクラブ活動参加の経験のある児童には、次年度も同一のクラブに所属し、下級生の指導に当たり、伝統のあるクラブを作り上げることが望ましい」（「児童活動指導上の諸問題」昭和57年 文部省）という点にこそ、クラブ活動の特色を生かしつつ、特別活動の目標である「集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的・実践的な態度を育てる」ことになると考えるからである。
- ・ クラブの新設・廃止がかなり多種類にわたっていて、しかもその傾向をこの調査だけから結論づけるのは無理である。しかし、鉄道クラブのように、廃止した学校も、逆に新設した学校もあるというのは、児童の好みだけではクラブとして存続できないということを表しているといえよう。すなわち、所属しているクラブに対して不満があるなど、その事情をよく調べ、学級担任とクラブ担当の教師が連絡を密にとりあうということから解決できることもあると考える。
- ・ 一般的な傾向としては(1)児童一人一人が自分たちで計画し、実践できるという意味での自主性 (2)互いに協力し、仲間と行動できるという社会性、という点で児童全般にやや問題点もあると考えられよう。現代の児童の好みを十分に考慮してクラブのワクというものを広げて考えていくことも大切である。また、例えば剣道クラブというと竹刀を持って打ち合うということのみ活動を固定化して考えてしまうことにも再考の余地があると思う。

—— クラブコーナー —— 楽しい活動のくふう ——

◎ 指導担当者はクラブにとじこもらない。

基礎知識や基礎技術の習得をある程度必要とする場合がある。クラブの担当教師はそれぞれ適切に配置されているのであるが、それでもなお特殊な面ではそれぞれの特技がある場合があろう。それをうまく生かしていくのである。「〇〇は〇〇先生にききなさい」とか、10分とか20分交代して指導するとかである。子どもたちは多くの先生から指導を受けるのを案外よろこぶものである。

本筋ではないが、たまには校外から指導を受ける機会をつくることも一つの方法である。この時には、指導者は担当教師であることをはっきりとらえていなければならない。

2. 運営について

ア. クラブ内の組織のあり方と役割分担

(1) 組織づくりにあたって

クラブ内の組織を決める時、まず初めに、指導者（クラブ担当者）が留意しなければならないことは、民主的な話し合いの中で決めるということである。ややもすると、指導者がクラブ長を指名したり、推せんして決めてしまいがちである。

しかし、選出のために多少時間がかかっても、クラブ員の総意のもとに、クラブ内の組織を決定し、必要な役割分担を決めることが大切であると思う。では、クラブ内の組織をつくるにあたって留意点をまとめると、つぎのようになると考える。

- ① クラブ員全員で話し合っで決める。
- ② 前年度の組織も参考にしながら、新年度の組織を決める。
- ③ 年間の活動計画を考えながら、組織を決める。
- ④ 役割分担は、6年生に片寄ることのないように、5年生や場合によっては、4年生にも割り当てるようにする。
- ⑤ できるだけ多くの児童が、交代でリーダーの経験ができるように、活動内容や指導を工夫する。
- ⑥ 役割は固定せず、1年間にいくつかの仕事が分担できるようにする。

(2) クラブ長・書記の活動例

◆ クラブ長（合唱クラブ） クラブ活動前の仕事

- ・ 来月、みんなで歌ってみたい曲の希望をクラブ員に聞き、まとめる。
- ・ 決まった曲について、担当の先生に報告し、楽譜の用意をお願いする。
- ・ ピアノ伴奏者（児童）に楽譜を渡し、練習してきてもらう。
- ・ 各パート練習のために、注意することを担当の先生に聞いておき、各パートの責任者に伝えておく。

◆ 書記

書記の活動としては、一般的につぎのような仕事が行われている。

- ・ 年度初めの年間活動計画を立てる話し合いをするとき。
- ・ 学期末のクラブ活動の反省をするとき。
- ・ 毎回のクラブの活動内容の記録。

しかし、上記のような活動の他にも、書記の仕事を積極的に指導している学校では、つぎのような活動をしているところもある。

- 毎回のクラブ活動で、話し合ったことを記録し、大切なところをまとめ、最後にクラブ員に発表している。このことにより、話し合った大切な内容について、クラブ長をはじめ、クラブ員に明確に理解させることができた。

(3) 役割分担のいろいろな例

各クラブの役割分担は、クラブ長・副クラブ長・書記・グループリーダー（班長）などが考えられる。しかし、それぞれの役割については、学校によって違いが認められる。そこで、東京都の3つの学校の例からクラブ活動の役割分担の仕方について考えることにする。

例 1

A区 N校（児童数 約600人、クラブ数 16）

N校では、各クラブのクラブ長・副クラブ長を、いくつかに分けたグループの数と一致させるようにし、クラブ長・副クラブ長がグループのリーダーを兼ねるようにした。

その後、クラブ長、副クラブ長が、クラブ全体の運営のみならず、各グループの活動がよくわかり、みんなの希望や意見が活動によく反映するようになり、民主的な雰囲気で行われるようになった。

- N校の「ポートボールクラブ」のグループ分け

（6年 18人、5年 10人、4年 4人、合計 32人）

グループ	リーダー	6年	5年	4年	グループ	リーダー	6年	5年	4年
A	クラブ長	4人	3人	1人	C	副クラブ長	5人	2人	1人
B	副クラブ長	4人	3人	1人	D	副クラブ長	5人	2人	1人

上記のように分けておき、クラブの所属は原則として1年間を通して変えないことにしている。ただし、リーダーであるクラブ長、副クラブ長は2期制にして、できるだけ多くの児童にリーダーの経験を積ませるように心がけている。

例 2

M市 I校（児童数 約900人、クラブ数 21）

I校では、クラブ長・副クラブ長・書記などは置かないで、グループ長が交代で、クラブの運営にもあたるようにしている。

I校の「むかしあそび研究クラブ」のクラブ運営

（6年 13人、5年 10人、4年 11人 合計 34人）

クラブを6つの班に分け、各班から班長、副班長を選び、班長の合議でクラブの運営にあたっている。

班の代表が、クラブの運営にあたるので、比較的クラブ員の意見や希望が運営に反映されやすいが、クラブ長をおかないため、クラブ運営の責任がはっきりしないこと

になり、まとまりに欠けるようになる。また、班長の自覚が希薄だと、無責任なクラブ運営になる傾向があるので、十分に注意して指導する必要がある。さらに、合議制をとっているため、班長同士の意見がまとまるまでに時間がかかることが目立った。

例 3

T区 B校（児童数 350人、クラブ数 10）

B校は、クラブ長・副クラブ長・書記などの組織とグループのリーダーと2本立てにして選び、クラブを運営している。

B校のキャプテンノートの活用

ソフトボールクラブ（6年 13人、5年 15人、4年 9人 合計 37人）

ソフトボールクラブなので、グループを9人程度とし、それを1グループとした。毎回の実施計画は、みんなの希望を聞いて、クラブ長が中心となり、担当教師と副クラブ長とで立案するように心がけてきた。

各チームのキャプテンは、あくまでチーム内のことだけに関係するので、クラブ全体の運営と切り離れてしまう。そのためクラブ長とキャプテンの間の意見調整が難しいことに問題があった。

そこでこのB校のソフトボールクラブでは、つぎのような工夫をして、クラブ運営をするように努めた。各チームのキャプテンにクラブ終了後に「キャプテンノート」を書いてもらい、それを担当教師・クラブ長・副クラブ長と一緒に目を通し、各チームや個人の希望や困っていることなどを把握し、つぎのクラブ活動に生かすようにした。

キャプテンノートより

つばさチーム キャプテン 岡山 かおる 9月13日（木）

きょうは、最初に守備の練習をした。いつもセカンドを守る4年生の石渡君は、今日にかぎってエラーが多いので、6年生の宮島君がつきっきりで教えてあげた。これからも続けて練習すれば、上手になると思うので、時間をとって練習しようと、みんなまで話し合った。つばさチームは、打つのはまあまあだから、守備を練習すれば、もっと強いチームになると思う。

新星ファイトースチーム キャプテン 金子 文夫 10月27日（木）

きょうのクラブは、守りの練習をする時間が長かった。ぼくたちのチームは、もう少し打つ練習をしたいという意見が、5年生からあった。また、今月中に練習試合をやって、打つ力が伸びたか確かめたいという希望が多かった。

イ. 伝統を生かしたクラブのあり方

・クラブの伝統とは何か

設置されるクラブは、児童の希望と、様々な校内事情とが加味されて決定されているものである。もし、児童の希望だけが最優先し、クラブの設置に当たって何の指導も加えられないのでは、クラブ活動のねらいを達成させることは難しい。また同じクラブであっても、毎年いちから活動内容の検討をしているようではロスが大きい。昨年度の活動を実績として残し、その上に立った今年度の活動でなければ、興味や関心を追求していく上で、また自発的・自治的活動を促す上で、払わなければならない無駄が大きく、クラブ活動をより発展させていくという観点からも、問題が大きいといえよう。

クラブにおける伝統は、時間的な長さだけではなく、『昨年度の活動実績を、今年度の活動計画に生かす』ということから始まるといえるのである。その地道な繰り返しが、児童の支持を集めていくはずである。もちろん、その学校にしか存在しない特殊なクラブにおいてもまったく同じことがいえるのである。また、児童が2年、3年と継続して同じクラブに所属するよう働きかけていくことも、児童から児童へ引き継いでいく内容も多いだけに大切なことである。

・クラブにおける伝統の果たす役割

伝統が、クラブ活動の特質を生かすために、大切な役割を担っていることは前述した通りである。しかし、新設されて間もないクラブであっても、その特質を十分にふまえた活動を展開していかなければならないのは当然のことである。

伝統あるクラブは、少なくとも数年間、その学校の教育課程に位置づけられ、教育目標の実現を目指して歩んできている。当然その過程で、あるいは近い将来において、その学校らしさを発揮していくはずである。いわゆる校風を築いていくことに寄与できるのである。3年で、5年でという時間的な長さを、ここで規定することはできない。クラブによって、運営の仕方によって、あるいは校風の質によって違ってくるからである。

クラブが校風を築いていくことと同じように、校風もまた、クラブの設置や活動内容に影響を及ぼしていく。このように、クラブにおける伝統は、校風と密接な関係があるといえることができる。

・伝統を育てる手だて

伝統を育てるためには、ふだんの活動の様子を全校児童に知らせたり、クラブ発表会や見学等の広報活動を活発にしていくことが大切である。そのことによって、それぞれのクラブの特色や独自性、あるいは存在の必要性を主張していくことができるからである。

また、地域の教育活動や特色を、学校の教育活動の一環として導入していく姿勢も

大切なことである。例えば、郷土芸能の盛んな地域では「郷土芸能クラブ」、伝説等が多く残されている地域では「伝説研究クラブ」、また、いわゆる「郷土クラブ」は地域に密着したクラブということがいえる。このように地域に根ざしたクラブは、これからの学校が歩いて行くべき方向のひとつでもあり、また、児童にとって最も身近で、その学校以外では深めていくことができないという特色を持っている。また、後述する記録の重視という点でも、伝統を育てていくために、大変有効なクラブであるということができる。

しかし、えてして郷土クラブには華やかさが乏しく、探求心旺盛な一部の児童にしか支持されないという場合が多い。児童の入部希望者が少ない時に、すぐ廃部にしてしまうのでは郷土クラブに限らず、クラブの伝統は育つものではない。児童の意識の中からそのクラブが、完全に消え去ってしまうからである。そこで、入部希望者が少なくクラブとして成り立たないような時には、休部として残すような工夫をしたいものである。そうすることによってその年度はともかくとして次年度、設置されるクラブの候補として、児童に意識付けや働きかけが可能となり、クラブの伝統を育てようとする方向に向かうようになるのである。

・活動記録を生かす

クラブ活動は、自発的・自治的な集団活動であることに大きな特質がある。しかし、活動のすべてを児童に任せることは、このような特質を生かしていることにはならない。

なかでも、活動記録のとり方や活用の仕方については、十分な指導を加えていく必要がある。とかく活動そのものに重さがおかれ、記録面がおろそかにされてはいないだろうか。活動記録は、その年度に使われるだけでなく、次年度の計画作成の段階で活用されてこそ、初めて生きた記録として価値を持ってくるのである。そのためには、「楽しくできた」「ふざけている人が多かった」という、印象面だけの記録にとどまることなく、その原因や理由、そしてできるだけ多くの所属員の声を残しておきたいものである。また、工夫した点や改善した点、グループ編成の仕方、部長・副部長の選出の仕方等を記しておくことも、次年度の計画を立てる時に役立ち、クラブの伝統を育てる一助になっていくのである。

・所属員相互の交流

所属員同士の望ましい人間関係の確立や、技術の継承も、クラブの伝統を育てていくために見逃すことのできない要素である。児童は、「もっとうまくなりたい」「もっとよく知りたい」という欲求を持って入部してくるものである。伝統のあるクラブでは、その欲求を上級生や、技術的に優れている友達が満たしてあげることができる。

このような目に見えない伝統の力は、自発性や自治性を助長するための原動力ともなっていくのである。

ウ. 発表の場の多様化

クラブ活動の成果を発表する機会を設けることは、児童のクラブ活動への意欲を高めるためにも、クラブ活動を充実、発展させるためにも有意義なことである。また、クラブ活動に参加していない学年の児童に、クラブ活動の内容を理解させ、期待と意欲を持たせる大切な機会にもなると思われるので、活動の様子や成果を全校児童に知らせるような場をできるだけ継続的に、あるいは数多く作ることが望ましいと思う。

多くの学校で、3学期の終わり頃になると、クラブ活動のまとめとして「クラブ発表会」を持っているのではないだろうか。学校の実情にもよるであろうが、それぞれのクラブの特質に応じて、効果的な発表の場や、時間、方法が工夫されているであろう。次に紹介するものも、一つの実践例である。

A区U校は、中規模校で、クラブ数は15種類ある。12月から1月にかけて「クラブ長会議」が発足する。これは、毎年3月に行う「クラブ発表週間」の計画、実践のために持たれるクラブ代表者の集まりである。

以下は、3学期に行われたその活動のあらましである。

日 程	ク ラ ブ 長 (代 表 者) の 活 動
12月 ○日	<ul style="list-style-type: none"> ・クラブ長の顔合わせ ・クラブ発表の日程と大まかな計画を話し合う
1月 ○日	<ul style="list-style-type: none"> ・クラブ発表の方法を何種類かに限定する（VTR・展示・舞台・校庭） ・クラブ発表の希望調査用紙を作り、各クラブで検討してもらう
1月 ○日	<ul style="list-style-type: none"> ・クラブ発表方法の希望を集計し、調整する。 ・必要な係りを話し合い、分担する（広報係・VTR係・舞台の司会係・準備係・掲示係 等）
1月 ○日	<ul style="list-style-type: none"> ・全員での作業（ポスター・発表会用のパンフレット・クラブ活動紹介文などを作成）などを作成
2月 ○日	<ul style="list-style-type: none"> ・各係ごとに打ち合わせをし、練習をする。 ・パンフレットを印刷する ・ポスターを校舎内に貼り付ける
2月 ○日	<ul style="list-style-type: none"> ・VTR希望クラブの撮影をする ・司会の練習 ・アンケート用紙を作る
2月 ○日	<ul style="list-style-type: none"> ・パンフレットとアンケート用紙を各学級に配布する
3月 ○日	<ul style="list-style-type: none"> ・展示用パネルと長テーブル等を準備しクラブ毎にわりあてる <p>（クラブ発表週間始まり）</p>

	(クラブ発表週間)
	テレビ、ラジオ放送は給食時・舞台、校庭の演技は特設時間・展示観覧は随時
3月 ○日	(クラブ発表週間終わり)
	・後かたづけ
	・アンケートの集計
3月 ○日	・反省会

クラブ長の活動は、クラブ担当教師と共に、主としてクラブ活動終了後(放課後)に行なった。発表の準備、かたづけ等はやむをえずに休み時間を使った。クラブ長だけでなくその時の都合によりいろいろな児童がクラブ代表者として適宜、参加した。協力し合って活動を進め、発表週間は成功のうちに終わった。次年度の入部希望者の増減に大きく影響するのでどのクラブの児童も熱心だった。

しかし、上記のような特設された発表会しか発表の場がなくて、こういった発表会がクラブ活動の目的のようになってしまうことは望ましくない。クラブ活動の本来の在り方からだんだんかけ離れたものになってしまう恐れがある。発表の成果にとらわれ、特にうまい子を選んで発表させたりすることがあってはならないのであって、年間を通して、同好の仲間全員があくまでも参加し発表し合えるようにしてゆくべきである。

また、発表は、やはり特定時期に持つだけで済ませない方が良く思う。クラブ活動は原則として通年制になっている訳であるから、その活動の様子を日頃から、あらゆる機会に全校の児童へ知らせてゆく手だてを講じねばならない。

例えば、児童会活動として、代表委員会で話し合い、委員会活動の力を借りるのも効果大きい。放送委員会に依頼してVTRを撮ったりして校内放送で紹介してもらい、新聞委員会に依頼してクラブシリーズを連載してもらい、掲示委員会に依頼してクラブ専用の掲示板やコーナーを作ってもらい、集会委員会に依頼して児童集会の活動計画に組み込んでもらい……等々いろいろな工夫ができるであろう。これらの方法は、クラブ間の交流や各種委員会の相互理解を深める良い機会にもなり、児童の学校生活をより豊かなものにしてゆくであろう。

また、種々の学校行事の中に、クラブ活動を積極的に参加させてゆくことも考えられる。例えば、運動会では特別種目として、器楽クラブやバトンクラブ、陸上クラブ、体操クラブ等の演技が可能であろう。学芸会では、演劇クラブや幕間係としてのゲームクラブ等の活躍が期待できる。音楽会でも器楽クラブ、合唱クラブ等が、展覧会でも工作クラブや絵画クラブ、写真クラブ等の作品が会を盛り上げることであろう。しかし、これらは参加できるクラブにとっては、その特質をいかす最適の方法であるが、他のクラブとのバランスを考える時に問題も残る。担当者は、全体を見渡して配慮する必要がある。また、クラブ本来のねらいからそれないように常に注意し、児童中心の活動にしなければならない。

III クラブ活動の実態調査と分析

ア. クラブ活動の現状調査から

クラブ活動の特質を高め、特別活動におけるねらいを達成するためには、個々のクラブの運営と共に全校的な見地での環境設定を配慮しなければならない。クラブ活動を指導、計画するに当たり、学校のもつ種々の条件を把握して有効に活用することが集団の質を高める必要条件とも思われる。以下、6月に実施した現状調査をもとに、都内小学校におけるクラブ活動運営の実態を集計し、分析、考察した。

1. クラブの構成 (集計結果は、都内31校の6月現在による)

a. 全校児童数

児童数	100 <small>人</small>	200	300	400	500	600	700	800	900
校数	1	2	2	4	6	4	7	3	2

b. 学級数

学級数	10以下	～12	～14	～16	～18	～20	～22	～24
校数	3	3	4	4	5	2	6	4

今回の調査数の規模は、以上のように児童数500～700名、学級数17～22を中心に最少は、児童数102名6学級、最多は、940名、24学級となっている。児童数1000名以上の大規模校の資料は紹介できず調査校数も少ないが、都内の学校規模については幅広く平均的なケースをとらえていると思われる。

c. クラブ参加学年

調査31校すべて4、5、6年の3学年で実施している。

d. クラブの実施曜日

曜日	月	火	水	木	金	土	計
校数	17	5	1	3	6	0	32

月曜日が17校と調査校中の過半数をしめている。56年度の同様の調査でも23校中9校と最も多かった。これは、各校の週時程の組み方で研究会、職員会の多い水曜日と週末の土曜を除いた曜日であるという条件の他は、月曜が適当と思われる絶対的な理由は定かでない。ある区の調査資料では、木曜実施が32校中24校という例もある。

また、表中の水曜実施校は、隔週実施のもの。計32校となったのは、月曜と金曜の2回実施している学校が1校あったためである。

実施曜日については、その理由についての調査が残されるが、各校各地区の実状に合わせた設定と思われる。

e. クラブ実施時間と校時

時間(分)	40	45	50	55	60	45～60	90
校数	1	14	4	1	9	2	1

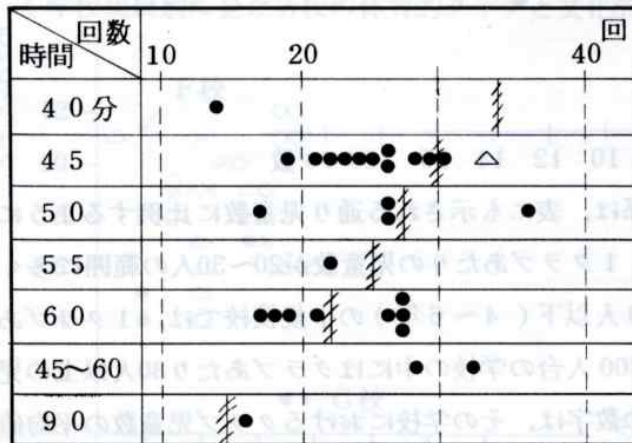
実施単位時間は、45分間が最も多く、教科授業に合わせているようだ。その他は、50分、55分、60分、45～60分と実施時間を少しでも多くできるよう配慮されている。

また、90分間の学校は、5～6校時を使い隔週の実施となっている。

実施校時については、6校時に実施が23校、5校時が6校で、週2回行う1校の例が曜日により5、6校時を使いわけている。いずれも実施日の最終校時を利用しているが、これは、おそらく例外はないと思われる。

f. クラブ実施回数（年間）

実施時間数と関連が強いので合わせて表にする。なお、回数は年間の予定数ではなく、57年度の実施数である。（29校）



(1) ●は、各校の分布を示す。

(△校は、新設校のため予定数を表示。)

(2) 表中の###線は、45分×30回（1350時間）を基準に各実施時間で割った回数の目安を示す。

表からわかるように、同単位時間であっても学校間での実施回数には大きな開きがある。単位時間45分の例では、最低19回から最高30回となり、他の時間例でも同様の結果を示している。これら調査校の年間予定回数は、単位時間45分に換算して大部分が30回前後を予定していた。しかし、その中でも予定数或いはそれ以上のクラブ活動時間を実施できた学校は、10校足らずであった。そして、多くは7回、平均して3、4回は予定を下回る結果となっていた。これは、実施曜日が月曜日のところが多く、振替休日の影響を受けたことなども考えられるが、学校運営上削られた場合も少なくない様である。

2. クラブ数と学校規模

クラブ数については、学校規模との関わりが強いと思われる。今回の調査では、学校規模について幅広い範囲の事例が集まったので、その関わりをもとにクラブ数への影響を調べてみた。

a. 4・5・6年生の児童数

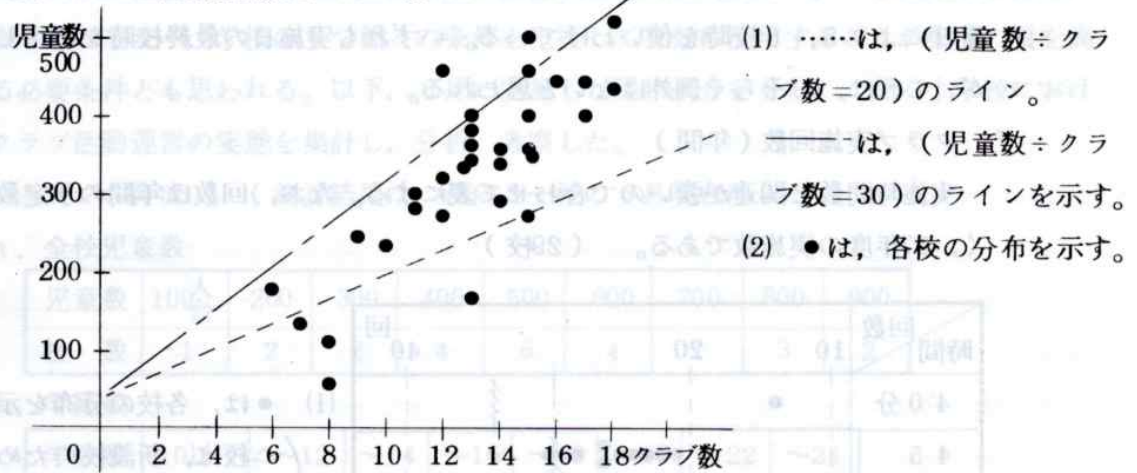
児童数	100名以下	100～	200～	300～	400～	500以上
校数	1	4	7	11	7	1

児童数については、1. a. で全校児童数を示したが、ここではクラブ参加の4～6年生の児童数を対象にして検討する。

b. クラブ数

クラブ数	6	～8	～10	～12	～14	～16	～18	19
校数	1	3	2	5	9	6	3	2

c. 4～6年生児童数とクラブ数



児童数とクラブ数の関係は、表にも示される通り児童数に比例するようにクラブの数も増えている。そして、1クラブあたりの児童数が20～30人の範囲に多くの学校が分布している。児童数200人以下(4～6年)の小規模校では、1クラブあたり10人台が大部分だが、児童数400人台の学校の中にはクラブあたり30人以上の児童をかかえるものが4校ある。この数字は、その学校におけるクラブ児童数の平均値なので、実際には40～50人以上の児童をかかえるクラブも数多く存在している。しかし、所属児童数が多くとも、担当教員数、施設、活動の内容などによっては質、量的にも十分な活動は可能と考えられる。

各校の設置クラブ数については、上の表に示される通り、児童数は同様でもその数の幅が大きい。これは、学級数の関係で担当教員数に幅があること、また、施設(特に運動)の違いなどもその原因として大きいと考えられる。

d. 担当教員数とクラブ数

クラブ指導には教員が担当する関係から、教員数とクラブ数の関係は大きい。ここに、4～6年生児童数200人台の5校の例を示す。

学 校	A 校	B 校	C 校	D 校	E 校
児 童 数	266	268	280	285	295
ク ラ ブ 数	15	12	11	14	11
担 当 教 員 数	22	17	18	21	20
全 校 学 級 数	17	14	15	14	14
全 校 児 童 数	544	483	535	470	527

E校を除き大体教員数が多いとクラブ数も多くなっている。そして、教員数は学級数との関係からその幅も大きい。また、1クラブあたりの担当者数、1担当者あたり

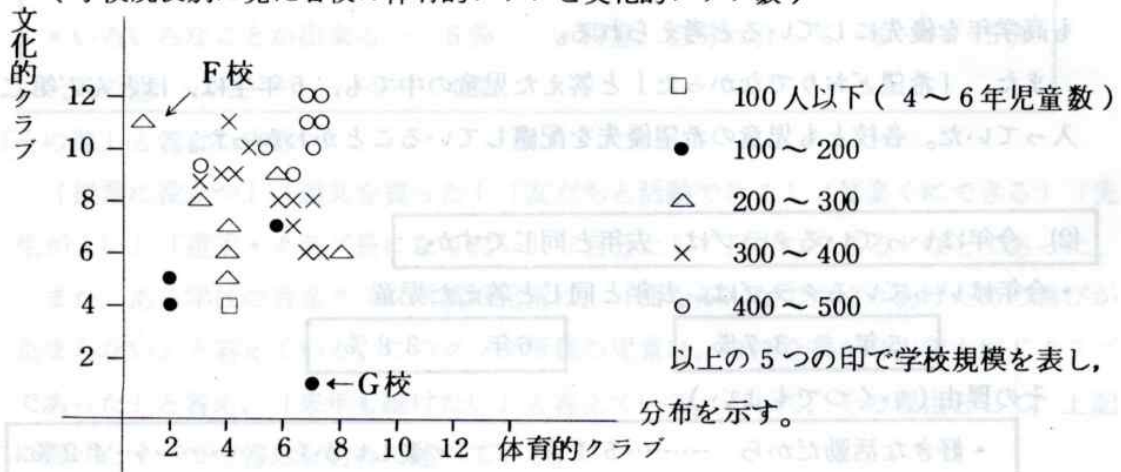
の受け持ち児童数も年度によって変動が大きい様である。

1クラブあたりの担当者数は、クラブの活動内容、児童数によって配慮がされている様だが、担当者1人のクラブを多くしてクラブ数を極力多くするケース、逆にクラブ数を抑えて担当者を多くするケースと両面がある。調査校の平均では、1クラブあたり担当者約1.6人という結果であった。

3. クラブの種類と学校規模

クラブの種類は、体育的クラブと文化的クラブに分けられる。その種類は多く、調査31校でも、体育的クラブが34種類、文化的クラブで70種類におよぶ。児童の希望は体育的クラブに多く集まるが、施設面での条件からその数が増やせない現状のようだ。

(学校規模別に見た各校の体育的クラブと文化的クラブ数)



体育的、文化的両クラブ数の割合で目立つ例は、体育的クラブ1に対して文化的クラブ11のF校(表中に表示)。逆に、体育的7に対して文化的1のG校である。F校は、全校480余名14学級であるが、体育クラブとして4人の指導者が別々に分かれて活動を持っている。また、G校は、全校260名9学級の小規模校だが、音楽クラブの他はバスケット、サッカー、バドミントン、卓球、テニス、ソフトボール、陸上・水泳と幅広い体育的活動を行っている。体育的クラブが4以下で文化的クラブとの差が大きい学校は、都心部の中規模校であり、施設面で制限される苦しい実態であろう。その反面、体育的クラブが多い学校は、比較的児童数が多くとも合わせて施設面の条件に恵まれている様だ。今回の調査では、1校あたりの体育的クラブ8種類が最高になっているが、条件設定の上でもこれ以上は実状として困難とも考えられる。

4. クラブの評価

31校中、形式ありが8校、形式なしが21校、新設校のため未定が1校、無答が1校。

昨年度の集録で詳しく紹介したが、今後も検討を続け合理的な方法を提供したい。

以上のように、学校規模を中心にクラブ構成等の実態を集計、分析した。その結果、クラブ運営における環境設定の条件は多く、その実態は様々で幅が広いことから、今後その配慮の方法については、クラブ活動に対する意識改善を含め検討の必要を強く感じた。

イ. クラブ活動の意識調査から

(昭和58年11月現在、都内16校の特定クラブや4年以上の合計数)

4年	441名	5年	642名	6年	672名
----	------	----	------	----	------

(1) 今年、あなたが入っているクラブは、自分の希望どおりでしたか。

・希望どおりと答えた児童

4年	88%	5年	92%	6年	94%
----	-----	----	-----	----	-----

・希望どおりでなかったと答えた児童の中で

a. 第二希望は 70% b. 希望がとおらなかった者 30% であった。

「希望どおり」と答えた児童が、6年・5年・4年の順に少なくなっているのは、各校とも高学年を優先にしていると考えられる。

また、「希望どおりでなかった」と答えた児童の中でも、6年生は、ほとんど第二希望に入っていた。各校とも児童の希望優先を配慮していることがわかった。

(2) 今年はいっているクラブは、去年と同じですか。

・今年はいっているクラブは、去年と同じと答えた児童

5年	37%	6年	38%
----	-----	----	-----

その理由(いくつでもよい)

・好きな活動だから …… 51%	・楽しいから …… 42%
・おもしろいから …… 27%	・得意だから …… 20%
・最後までやりとおしたい… 20%	・去年やってわかるから… 13%
・その他 …… 4%	

「その他」と答えた内容

「希望がとおらなかったのしかたなく」「楽器を買ってしまったので」「道具を買ってしまったので」「ほかにいいクラブがなかったの」と、消極的な意見が多かった。

・今年はいっているクラブは、去年とちがうと答えた児童の理由(いくつでも)

・ちがうクラブもやってみたい… 75%	・自分に合わない …… 9%
・自分の考えでできない …… 7%	・希望したクラブに入れない… 3%
・今年、そのクラブがない… 3%	・その他 …… 7%

「その他」と答えた内容

「友だちとうまくいかない」「先生と合わない」「場所が狭くて思いきりできない」「つまらない」「転入してきたから」という意見であった。

ほとんどの児童は、現在所属しているクラブへの不満というより、他のクラブを経験したいという気持ちをもっている。今年のクラブ所属が「希望どおり」と答えた5年生92%、6年生94%という高率であったにもかかわらず、児童の意向は、より多くの

経験をしたいということであろう。

(3) 今のクラブを来年も続けたいですか。(6年生は、もう一年いると考えて書く。)

・今のクラブを来年も続けたいと答えた児童

4年 38%

5年 45%

6年 56%

その理由(いくつでもよい)

- | | |
|---------------------|---------------------|
| ・楽しくておもしろい……………61% | ・好きだから……………13% |
| ・もっと上手になりたい……………7% | ・最後までやりたい……………6% |
| ・いろいろなことが出来る……………5% | ・得意,自分に合っている……………5% |
| ・その他……………4% | |

「その他」と答えた内容

「授業に役立つ」「道具を買った」「友だちと活動できる」「気楽にできる」「先生がよい」「選手・クラブ長になりたい」「自分たちで自由にできる」などであった。

また、ある学校の音楽クラブ所属の児童は、「曲をみんなでつくりあげた時の喜びがたまらない」と答えている。このクラブ所属の児童は、ほぼ全員が「去年と同じクラブであった」と答え、「来年も続けたい」と答えている。そして、その理由として、上記に掲げたすべての答えを含めて述べている。

・今のクラブを来年はやめたいと答えた児童。(いくつでも書いてよい。)

- | | |
|------------------------|--------------------|
| ・いろいろなクラブに入りたい……………47% | ・つまらない,あきた……………27% |
| ・その他……………15% | |

「その他」と答えた内容

「先生と合わない」「やることが大変」「自分と合わない」が一番多く、ほかに「やりたいことがやれない」「お金がかかる」「場所が狭い」「6年生がふざける」「運動クラブに入りたい」「活動が単純」「先生が教えてくれない」「同じことばかりやる」「男(女)一人だから」「もうやり方を覚えた」「希望でないクラブだから」「クラブ長がいばる」「人数が多い」などであった。

自分の「希望」で入ったクラブであっても、次に選ぶ時には、他のクラブを「希望」する傾向にある。追跡調査によると、今入っているクラブが「去年と同じ」と答えた児童は、来年も同じクラブに入りたいといっている場合が多いことがわかった。

児童が何年も同じクラブに所属するためには、児童の「希望」を優先的に取り入れ、充実したクラブ活動を通して満足感、成就感を体得することによって得られることがわかった。

(4) 今入っているクラブは、楽しいですか。

・楽しいと答えた児童

4年 57%

5年 58%

6年 63%

その理由(いくつでもよい)

- | | |
|--------------------------|--------------------|
| ・好きな活動ができる …………… 51% | ・親しい友だちがいる …… 36% |
| ・友だちと協力してできる …………… 33% | ・自分の力を十分出せる …… 30% |
| ・自分たちで計画を立てて活動できる …… 25% | ・自分たちで進められる …… 24% |
| ・クラブ長などがしっかりしている …… 15% | ・活動時間が長い …… 22% |
| ・その他 …………… 4% | |

「その他」と答えた内容

「先生がいい」「気楽でいい」であったが少なかった。

「希望どおりに入った」と答えた6年生の約6割の児童は「楽しい」と答えている。

「希望を優先にする」ことの大事さと同時に、「希望」で入ってはみたものの、活動内容や計画・運営等によって、約2割の児童が「楽しくない」と答えていることは、一考しなければならない。

・楽しくないと答えた児童の理由(いくつでもよい)

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| ・クラブ長などがいばる …………… 29% | ・上級生がやることを決める …… 24% |
| ・先生が「こうやりなさい」という …… 21% | ・友だちがいじわるをする …… 19% |
| ・時間が短い …………… 18% | ・先生がよく教えてくれない …… 16% |
| ・下級生を教えていて | |
| 自分の活動ができない …………… 7% | ・その他 …………… 30% |

「その他」の理由

「活動がつまらない」「時間が長い」「クラブ員がいうことを聞いてくれない」「先生と合わない」「人数が少ない」「場所が狭い」などがあつた。

今のクラブを去年から継続しなかった理由、来年も続けない理由、現在楽しくない理由には、同じような意見が多い。このことを学校や教師側からとらえると、児童の希望の優先、施設・設備の充実、クラブ活動指導計画の作成、児童の自主的・自発的活動の尊重などがあげられるのではないだろうか。

(5) 今のクラブをやって友だちが増えたか。

・増えたと答えた児童

4年 58%

5年 63%

6年 64%

5年・6年生は、継続してクラブ活動を行っている児童に「増えた」という答えが多かった。また、男女別で見ると、男子の5割、女子の7割が「増えた」としている。これは男子に比べ、女子の方が友人関係の影響をさまざまな場で受けていることがわかる。

(6) どうして、今のクラブに決めましたか。

その理由(いくつでもよい)

・楽しそうだから …………… 50%	・おもしろそうだから…………… 43%
・好きな活動だから …………… 34%	・友だちが入ると言ったから…………… 17%
・去年やったから…………… 17%	・担当の先生が好きだから…………… 6%
・その他 …………… 8%	

「その他」と答えた内容

「自分で道具を持っているから」「好きなものがつくれる」「希望のクラブができたから」「続けたかったから」「希望に入らなかったの」「先生が決めた」「お母さんが入るように言った」「ほかにいいクラブがない」「友だちが入っていた」「先輩が入るようにすすめた」などがあった。

この表では、学年毎の集計はないが、4年生は「楽しそう」「おもしろそう」「好きな活動だから」と興味・関心を主なものとして選ぶのに対し、5年・6年生になると、「去年やってよかったから」「やり方がわかっているから」「一度やりはじめたので続けたい」という理由をあげている。

このことから、初めてクラブ活動に入る4年生に対する入部指導の大切さと、一年経験した5年・6年生のクラブに対する見方が、単なる興味・関心だけでなく、一つのことを成しとげようとする意欲や、高学年としての自覚が理解できる。

○まとめ

児童が生き生きと活動するクラブ活動にするためには、まず、児童の希望を生かさなければならぬ。その希望とは、単に希望するクラブに入るだけでなく、活動内容等が児童の「希望」と合うものでなくてはならない。

今回の意識調査によると(数に表れなかった記述を含める)

- ① やる内容がはっきりしていて、目標はやや高く、やり終えた時の満足感がある。
- ② 教師の良き助言を得ながら、自分たちで計画し運営できる。
- ③ 高学年の良きリーダーのもとに仲良く行う。
- ④ 場所も広く自由に使える。
- ⑤ クラブの内容が授業に役立ったり、クラブをやって友達を増やしたり、何か毎日の生活が楽しくなることがある。
- ⑥ 活動時間は、クラブによって多少の幅もてる。
- ⑦ クラブの改廃は、できるだけ行わない。

という声があった。児童の回答、即クラブ活動の本質とはいかないであろうが、私たちが日頃問題として感じていることをあらためてこの調査から考えさせられた。

IV 研究の反省と今後の課題

昨年度の研究に引き続き「クラブ活動の特質を高める集団活動のあり方」の研究を深めてきた。研究経過のように幹事の所属する学校の現状を把握し、その中の問題点を研究するように努めてきた。都内各地に散在する幹事が一堂に集まることがなかなか困難であった。そのため2度3度と同じような問題（各校の現状把握）に時間を取られ、研究に今一步の不足を感じている。

1. クラブ構成のあり方

健全な自主性、豊かな社会性を育成するために、同一クラブ内に各学年や男女がまじあっている方が好ましい。この問題を解決するためには、クラブ内だけでは解決し得ない問題を含んでいる。それは、学校生活全般にわたり異学年との交流を深めたり、男女の意識を取り除くように努めていかねばならない。そうすることによって、クラブ構成においても、異学年や男女のバランスのとれた活動のやりやすいクラブになろう。

クラブの選択指導では、児童の声を中心に研究を深めるようにしてみた。児童の考えの多様化につれて、クラブの種類の変化の方向をつかみたいと考えた。継続して研究したい。

2. 運営について

クラブ長・副クラブ長・班長などクラブ活動のリーダーとなる児童のあり方を事例に基づいて研究してみた。一長一短があって、すべてよいということにはなかなかならない。そのために長所を伸ばし、短所をカバーするよい方法を今後の研究課題としたい。

クラブ活動が組織として円滑にすすめられていくためには、過去の経験を生かし、所属員同士の人間関係をよくし、技術の継承にも力を入れ、伝統あるクラブの育成に力をそそぐ必要があると考えている。それは、クラブの実態を児童自身がよく理解することによって達成される。発表の場の多様化を計り、クラブの地位向上へも努めたいものである。

3. 実態調査から

クラブ参加学年は、調査31校すべてが4年からである。実施時間は45分が最も多く、6校時をあてていることから延長を認めている学校が増えている傾向がみられた。

年間の回数を総時数でみると基準に達していない学校が多くみられる。学校行事やカットによる代替えが行れない場合が多い傾向がみられる。

今入っているクラブは「楽しい」児童が6割、「楽しくない」児童が2割もいた。上級生がいばったり、自分勝手に決めてしまうなど指導を考慮しなければならない点がみられる。

◎ 今後のために

実態調査から研究課題を求めていく方法はよいが、どうしても調査に追われ、課題研究に入る時期が遅れやすい。それで、年度当初に前年度の反省や今後の課題から研究課題に取り組み、実態調査はそれと併行して実施すると、もっと研究が深まるものとする。

終わりに、ご指導いただきました諸先生方心から厚くお礼申し上げます。

IV 学級指導

テーマ 「授業を通して、指導過程の在り方と資料の活用を考える」
展開部分の深め方の工夫

I まえがき	83
1. 研究主題について	83
2. 研究への取り組み	83
II 指導過程	84
・指導過程の基本型 ・指導過程の工夫 ・指導に当たっての留意点	
III 資料	87
・資料作成の基本的な考え方 ・望ましい資料の条件	
・資料作成の具体的事例 ・資料作成によせて	
IV 授業研究とその考察	89
1. 「わすれ物をなくそう」(4年)	89
2. 「自分の悪いところをなおそう」(5年)	92
3. 「よりよい学級を目指して」(3年)	96
V 資料の活用事例	100
その1. 「授業構成と資料活用事例」	100
その2. 「指導内容と資料活用事例」	102
VI 研究の反省と今後の課題	104

＜ 学級指導コーナー ＞

- | | |
|------------------------------|------|
| 1. 「行事の事前指導に6時間使ったA先生」 | (86) |
| 2. 「学級指導と学級会活動との関連」 | (91) |
| 3. 「埋もれた指導計画」 | (95) |
| 4. 「学級指導, 10~20時間?!」 | (99) |

○ 研究の経過

- 58. 5.26 (火) 定期総会, 部会, 組織づくり
 - 58. 6.10 (金) 情報交換, 研究への迫り方
 - 58. 6.28 (火) 研究テーマの決定, 指導過程と資料の基本的解明
 - 58. 9. 2 (金) 研究授業案の検討
 - 58.10.18 (火) 研究授業 世田谷区立代沢小学校 4年 朝倉学級
 - 58.11.17 (木) 研究授業 多摩市立東愛宕小学校 5年 二田学級
 - 58.12. 6 (火) 研究授業 大田区立入新井第一小学校 3年 藤本学級
- 研究集録の内容検討, 執筆者の決定
- 59. 1.12 (木) 執筆原稿内容の検討, 発表者決定, 役割決定
 - 59. 2.23 (木) 研究発表の準備, 発表内容の検討
 - 59. 3. 1 (木) 研究発表会

研究・執筆者名簿

部 長	米本 滋雄	葛 飾・梅 田 小	形部 操	足 立・千寿旭 小
副 部 長	鈴木 和子	港 ・白 金 小	中山美枝子	足 立・長 門 小
"	橋本 肇	豊 島・仰 高 小	赤岡 幸子	葛 飾・東柴又 小
"	森山 裕夫	三 鷹・井 口 小	吉田 幸子	葛 飾・新 宿 小
(発表)	重松 誠	港 ・高輸台 小	鈴木 恭子	江戸川・新 田 小
(記録)	飯田 良一	千代田・西神田 小	志田原節子	八王子・横山第一小
(司会)	篠原 昌子	中 央・月島第一小	(司会) 高松 和彦	武蔵野・第 四 小
	富田 嘉子	新 宿・東戸山 小	長沢 敬子	三 鷹・第 四 小
	棚木 敦子	新 宿・落合第三小	芦沢 智子	三 鷹・高 山 小
	池田 令子	文 京・礪 川 小	敦賀 笑子	三 鷹・南 浦 小
	新妻 則子	墨 田・外 手 小	青 正上	町 田・本町田東小
	土岐 光子	江 東・越中島 小	坪井ヤエ子	小金井・緑 小
	近藤 裕美	目 黒・中 根 小	田中 尚子	小 平・第 一 小
	藤本 仁	大 田・入新井 小	井上 芳子	小 平・第 十 一 小
	朝田 幸子	大 田・馬 込 小	市川ひろ子	東村山・東萩山 小
(発表)	朝倉深太郎	世田谷・代 沢 小	五ノ井 恵	国分寺・第 七 小
	剣菱美智子	北 ・滝野川一小	板澤 百代	東大和・第 九 小
(記録)	篠崎たか子	荒 川・赤 土 小	宝沢 政江	清 瀬・第 六 小
	阿部 好三	板 橋・上板橋四小	岡村由美子	清 瀬・第 七 小
	田中 豊一	板 橋・志村坂下小	(発表) 二田 孝	多 摩・東愛宕 小
	吉野 信子	練 馬・南 町 小	岡村 恵子	稲 城・第 八 小

I まえがき

1. 研究主題について

学級指導の指導内容が児童の身につくということは、単に知識として定着したことではない。学習した内容が一人一人の児童の心の中にしみ込み、即、生きて働く状態になったとき初めて言えるのである。「今日は、学校が楽しかった。明日、学校へ来るのが待ち遠しい」と学級全員の子どもが思っただけで帰路につく。このようなことは、子どもたちを取りまく学級集団が温かく、学習活動や学級生活が充実しており、教師をはじめ児童一人一人の心身が健康であって初めて成り立つものである。そのためには、常日頃から、好ましい人間関係を基盤にしながらい日常生活を営むために必要な行動様式を身につけさせ、集団の中で自己を正しく生かすことができるような手だてが必要である。ここに、学級指導を充実させていく意味がある。

私達は、数年来研究を重ねてまとめられた学級指導の意義、指導計画のあり方、学級生活や学校生活への適応に関する指導のあり方などの基本事項の研究を踏まえて、昨年度から授業のあり方に焦点をしばって研究をしてきた。

昨年度はテーマ「授業を通して、指導過程の在り方と資料の活用を考える」の研究の結果、導入段階の資料の内容および活用が、その時間のねらいを達成させるために欠かせない、問題の意識づけや課題の共通化を図らせるきめ手になるといわれていることを確かめた。しかし、せっかく意識づけや共通化を図らせても、その問題に対する原因や理由を追求・把握させたり、児童自身に意志決定させたり、あるいは解決のための方法や対処の仕方を考えさせるのに重要だといわれた展開段階での資料の内容や活用については問題として残された。

そこで本年度も、昨年度に引き続き、同テーマで副題として「展開部分の深め方の工夫」を設定して研究を深めることにした。そして、主題に対しての、児童の実態を把握した上で次の二点から主題に迫ることとした。

(1) 主題と実態に即した指導過程

(2) 精選された効果的資料

2. 研究のねらいと方法

- 学級指導の指導計画の在り方、学級・学校生活への適応に関する指導の在り方、望ましい資料としての条件等については、研究紀要(12~19集)を参考にする。
- 指導過程の基本型およびその類型について研究する。
- 資料作成上の基本的事項について研究する。
- 年三回の研究授業を行う。その際、講師を招き指導と助言を受けながら研究を深める。
- $\frac{1}{2}$ 単位時間の授業の指導過程のあり方について研究する。
- 実践事例を持ち寄り、研究の幅を広げる。

II 指導過程

学級指導は授業である。授業であるからには、「これだけはやめてもらいたい。」「これをぜひやって欲しい。」という教師の意図に児童がのってくるような指導過程を考えなければならない。学級指導の特質ともいえる即事性即効性をふまえ、授業終了後の児童がそれぞれに変容をみせるような授業展開を、1単位時間の指導、 $\frac{1}{2}$ 単位時間の指導にかかわりなく行うように計画を立てる。各教科の指導と同じく、導入・展開・終末の過程を通して、その時間のねらいが達成される。しかし、特別活動における学級指導としておさえると、展開の前後に重点をおいたもの、児童一人一人に行動の仕方を十分に身につけさせるため展開の後段に力を入れたもの等、ねらいに沿った指導過程を工夫しなければならないのは、言うまでもないことであろう。

1. 指導過程の基本型

学級指導は、「児童が現在当面しているか、近い将来に当面するであろうと思われる生活現象面の問題への対処の仕方、具体的な行動の仕方」についての指導を行う。

取り上げる生活現象面の問題は何か、それをどのように解決するか、について明らかにさせた上でその時間のねらいが設定される。児童全員が自分の問題として気づき、解決に向かわなければ大変なことになるという緊迫感を持たせることが導入段階の重要なことである。その問題について追求し、解決の方法を見出したり行動の仕方を具体的につかませる展開、そして、主体的に行動しようとする実践への意欲化を図る終末へと指導の手順を明確にしていくこと、それが指導過程の工夫と考えられる。

次に、基本型と考えられる指導過程と、それぞれの段階の内容を表にまとめてみよう。

導入段階	展開段階		終末段階
	前段	後段	
<ul style="list-style-type: none"> ○問題の意識化 ○問題の共通化 ・現在こういう問題がある。 ・将来こういう問題が起ころう。 ○ねらいとする生活現象面の問題を意識させる。 ○問題の存在に気づき焦点化を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○問題の原因や理由の追求や把握 ・なぜだろう。 ・どうしてだろう。 ○問題発生の原因や理由について、一人一人の児童に確認させ理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○問題の解決、対処の仕方の追求把握 ・では、どうすればよいのだろう。 ○問題解決の方法や問題への対処の仕方を理解させる。 ○具体的な行動の仕方や技術を習得させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○実践への意欲化 ・これからこのようにしていこう。 ・がんばって続けよう。

2. 指導過程の工夫

学級指導の内容は、「学級・学校生活への適応に関する指導」「保健・安全に関する指導」「学校給食の指導、学校図書館の利用の指導など」と学習指導要領に示されており、以上の例示の外に、「児童の具体的な生活に即して行われる道徳性の指導」「学校行事の事前・事後の指導」「長期休業の前後の指導」「日常の清掃」「環境美化」「貯蓄などについての指導」「学級指導としての集団視聴や読書指導」などが考えられる。このように幅広い内容をもった指導を、すべて指導過程の基本型にのっとって授業展開を進めることには、当然無理が生じる。展開の前段にウエイトをかけて、問題の所在を明確にし、なぜそのような問題が起こるのか、なぜそうすることが望ましいのかなど、原因や理由を正しく理解し把握させることから実践化が期待されるもの。展開の後段で動作化を取り入れ、具体的な行動の仕方や技術などを習得させて実践化へと導くものなどの、ねらいに即して効果的な指導を行うための指導過程を工夫していくことが大切である。

(1) 基本型に基づいて工夫した指導過程

型	導入	展開		終末	特徴・指導内容の例
		前段	後段		
A	○問題の意識化・焦点化・共通化	○問題の原因、理由の追求把握	○問題解決(改善)の方法、技術の発見、創造、練習	○実践への意欲化	○日常生活に必要な具体的な行動の仕方を理解させ、実践できるようにさせる型。 ・〇年生になって、わたしの悩み等の適応指導 ・長期休業の事前事後の指導等
B	○問題の意識化・焦点化・共通化	○問題の原因、理由の具象化 ・問題が生じる場面、状況の想起 ・問題が生じる原因、理由の具体的把握	○問題解決(改善)の方法、技術の確認、納得	○実践への意欲化	○展開の前段にウエイトをかけ、十分に原因、理由を追求させ、実践を可能にする型。 ・男女の協力、特性に関する指導 ・言葉づかい、礼儀に関する指導 ・姿勢、目の健康等の保健に関する指導等
C	○問題の意識化、焦点化、共通化	○問題の原因、理由の確認、理解	○問題解決(改善)の方法、技術の発見、選択、創造による具体化と理解 ○問題解決(改善)の方法、技術の習熟	○実践への意欲化	○展開の後段にウエイトをかけ、問題解決の方法や技術、行動の仕方を動作化や反復練習等を通して定着化を図る型。 ・遊具、施設利用の指導・横断の仕方、集団歩行等の交通安全指導・掃除方法の指導等

(2) 導入、展開、終末段階の指導の配慮事項

夫工の野般基計 上

- 導入段階では、解決、改善すべき生活現象面の問題を気づかせ、「何を」解決しなければならないかを明確にとらえさせる。これは、A、B、Cのどの型にも共通することである。B型では、その特徴からみて、教師の簡単な言葉による動機づけや課題の確認程度の極く短時間で行う場合も考えられる。
- 展開の前段は、問題解決の方法や技術を見いだす手がかりをつかむ段階であるので、問題の生じる原因や理由を具体的に理解させるようにする。B型はこの段階に重点をおくので、資料を活用して問題をより具象化することが大切である。C型は後段にウエイトをかけるので、原因や理由を児童一人一人にしっかり確認させ、後段の方法や技術の追求に移行出来るようにする。
- 展開の後段では、問題解決の方法技術を児童自身が発見し、最も望ましいものを選択し、更に新しいやり方をつくり出すようにさせる。B型では、行動の仕方や解決方法を確認して実践化へと導く段階であるので、指導時間や内容によっては扱いが簡単になる。C型では表のような過程を経て実践化を図るので、具体的な方法や技術を児童に発見させたり、つくり出させたりする過程を大切に、習熟に向かって動作化、個別化させる。
- 終末では、どの型も資料活用やカード記入等の方法を工夫し効果を高めて即効性を図る。

3. 指導に当たっての留意点

- 指導過程の面から考えられる指導上の留意点を次のように考えた。
- (1) 指導過程を固定的なものと考えず、常に弾力的な取扱いを配慮して指導に当たる。
 - (2) 児童の実態を正しく観察した上でねらいを設定し、達成のための指導過程を構成する。
 - (3) 教師が、すぐれた問題解決の方法や技術を準備した上で授業に臨む。
 - (4) 知的な理解にとどめず、日常生活で直ちに実践されるように直接的な指導を行う。
 - (5) 指導過程の中に適切に資料を位置づけ、効果を高めるようにする。

＜学級指導コーナー＞

行事の事前指導に6時間使ったA先生

B区では4年生で宿泊を伴う移動教室が2泊3日あり、行事の事前指導として学級指導を行うが、実際には、それに大変多くの時間が費されてしまうという先生の声がよく聞かれる。

A先生の指導内容

こう見ると、どれも移動教室を実施する必要のあるもの

1時 日程とねらい

ばかりである。しかし学級指導の授業としては、

2.3時 班分け、生活の注意

1時 ねらいと生活習慣の確かめ

4時 ハイキングとスポーツ

2時 班の役割分担と健康指導

5時 もちもの健康指導

上記以外は、学級での指導の時間やゆとりの時間を活用することで解決できると考える。

6時 荷物点検

III 資料作成の方法

1. 資料作成の基本的な考え方

学級指導の特質は、現在起こっているか、近い将来に起こることが予想されるところの児童の生活現象面の個々の問題を取り上げ、それを解決する仕方やそれに対処するための方法なり技術なりを指導することにある。この特質を生かすため授業の展開に当たっては、資料の活用が重要になる。また学級指導が単に教師のお説教の時間ではなく、授業としての定着を図るには適切な資料の作成が不可欠となる。児童に気づかせ、どのように具体的な行動そのものを変容させるかを考えたとき、導入をはじめ展開や終末の段階で活用される資料が極めて大切な役割を果たす。これらのことから適切な資料の研究と作成が学級指導の効果を高めるために重要であると考えられる。

2. 望ましい資料の条件

- (1) その時間の「主題のねらい」と密接に関連するもの
- (2) 資料の内容が児童に理解しやすく、具体的で身近なもの
- (3) 問題の解決方法や対処の仕方を考えさせる場合は、多様な考え方を示唆するもの
- (4) 保健・安全などの指導での基本的行動様式を身につけさせる場合は、具体的な行動を明確に示したもの
- (5) 一部の児童ではなく、学級全員に共通するもの

＜指導の効果を高める資料＞

- ① 気付かせる資料
- ② 学級の雰囲気をも高める資料
- ③ 教える資料
- ④ 考えさせる資料
- ⑤ 心情に訴える資料
- ⑥ 実践への意欲を高める資料
- ⑦ 実践を継続させる資料など

3. 資料作成の具体的事例

(1) 新聞の縮小版（電子コピー使用）

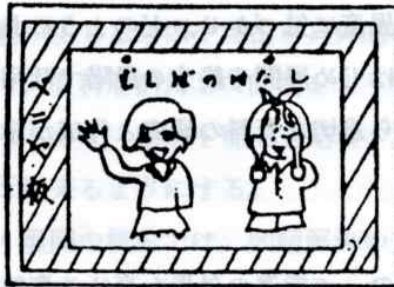
これは、安全指導「地震からの避難の仕方」で使用したTPシートである。昭和53年に起きた「宮城県沖地震」を報じた新聞を資料化したものである。このTPシートの提示で地震の恐ろしさと、身近なことであるとの意識化を図ることができた。

※現在のコピーは、原版（新聞紙）を縮小や拡大することも可能で、自由に自分が考えた大きさにすることができる。さらに、従来は指定された紙だけのコピーであったのか、現在はこれに加え、アクリルシートへのコピーも可能としている。これにより、身近にある新聞、雑誌、本、写真その他諸々のものも必要に応じて、手軽に資料化することができる。また、白と黒が明確に出るため、わかりやすい資料とすることができる。

(2) イラストのパネル（児童による資料の作成）



この絵は保健委員会が全校集会で使用したイラスト的なパネルであり、委員会の時間に苦心して作ったものである。イラストは模造紙にかかれたものであるが、教室に持ち込むことで保健指導の有効な資料とすることができた。児童もこの絵が上級生によって作成されたことを知り資料を身近なものと感じることができた。このように児童によって作成されたものも収集、保管しておくことで学級指導の有効な資料とすることができる。



例1. 虫歯で泣いている子



例2. よい歯は、ガリガリと



(3) 見開き表(観音開きにし、長所、短所を見開きで出すようにした。)

適応指導“友達の長所、短所”の展開部分で使用した資料である。事前調査による児童の長所、短所を表にした。この表を紙で被い、長所、短所を一つずつ、言葉ごとに見開きとして提示した。この工夫で児童の学習へむける興味、関心を引くことができた。授業への緊張感をほぐし、学級の実態を知り意識化、共通化を図る資料となった。

※表は、白ボールの全紙を使用。言葉ごとの見開きを円滑にするために板状の磁石をそれぞれにつけ作成した。(板状の磁石がない場合は、セロテープも考えられる。)

	長 所	短 所	
	だれとでも、なかよく遊ぶ	なかまはずれ、いじわる	
?			

	長 所	短 所	
みんな	だれとでもなかよく遊ぶ	なかまはずれ、いじわる	自分
楽しい	友達の気持ちを考えてすごす	かげろ、わる口、つげろ	か
な	友達が困まっているときはたすける	無視、しらん顔、しらんぶり	つ
い	きまりをきちんと守る	わがまま、きまま	て
く	当番や係の仕事を最後までやる	人まかせ、なげやり	に
ク	みんなで教え合いながら仕事をする	いじわる、不親切	ク
ス			ラ
			ス

4. 資料作成によせて

科学が日一日と進む現在、教育機器の開発も即応し進んできた。従来の作成方法に加え新しい教育機器の導入で資料化を図ることが可能となった。さらに利用方法を考えたい。

IV 授業研究とその考察

事例1

授業者 世田谷区立代沢小学校 朝倉 深太郎
4年 (適応) $\frac{1}{2}$ 単位時間

1. 主 題 わすれ物をなくそう

2. 主題設定の理由

学習の目標を十分に達成するために児童に求められることの1つとして、学習用具の準備がある。教科書をはじめノート鉛筆その他の用具のどれが欠けても目標を十分に達成することはむずかしい。学習面で一人一人の力をのばしていくために、忘れ物をなくしていかななくてはならない。

忘れ物をほとんどしないという児童もいるが、大多数の児童はしばしば忘れ物をする。特に問題なのは忘れ物が多い児童は限られていることである。児童が忘れ物をするのは、学校での指導の不十分さだけでなく、家庭での生活にも問題があると考えられる。例えばテレビの視聴時間が長い、就寝時間が不規則である、家庭での学習が行われず、学習準備時間をつくりださないなどである。そこで家庭に帰ってからの生活を見直すことで忘れ物を少なくできると考えた。そのために学習準備時間の設定、連絡帳やメモの利用、ランドセルの総点検、準備の再確認など帰ってからの生活の中で忘れ物をなくせる手だてがないかどうか考えさせたい。また忘れ物が少ない児童にとっても、より少なくしていくための視点となり、よりよい生活習慣を築くことにつながるであろう。

3. 本時のねらい

忘れ物をなくすために学習用具の準備時間を決めさせ、自分なりの方法を考えさせることで忘れ物を少なくさせる。

4. 展 開

指導過程	指導内容・学習活動	指 導 上 の 留 意 点	資 料
導 入	1. 忘れ物について学習することを 知る		(忘れ物 調べ)
展 開	2. 忘れ物をしないための工夫を 発表する。 ○メモ連絡帳の活用。 ○時間割を見る。 ○準備時間を決める。 ○確かめをする。	○準備時間を決めることと、連絡帳 やメモを見ることが大切であるこ とをわからせる。 ○作文を読ませる。 ○作文に書かれていること以外の工 夫があれば発表させる。	児童作文
	3. 忘れ物点検カードに記入 する。 ○準備時間	○準備時間は自分の生活に合ったよ うに決めさせる。	忘れ物点 検カード

	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりの工夫 	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりの工夫には、ノートを見かえず、ランドセルのものを全部だす、確かめをするなど。
	<p>4. 自分が注意することを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 取り入れられる点は記入 	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりの工夫が書かれていれば全体で認め合う。

5. 評価

- 準備時間を決め、自分なりの工夫を考えられたか。
- 準備時間や自分の工夫を守っているか(事後)
- 忘れ物が少なくなったか(事後)

6. 資料

(1) 「忘れ物調べ」

忘れ物については必要に応じて、学級での指導及び教科の中で扱っている。その時の結果を集計しておいたものである。忘れ物をした者の人数、忘れることの多い物を調べた。本時では導入での活用が考えられるが $\frac{1}{2}$ 単位時間であること、忘れ物については学級での指導で意識づけられていることから、資料の提示は行わなかった。ただし、展開の中では資料をもとに忘れ物の多い児童に対し個別指導ができるであろうし、事後の指導にも生かせるであろう。

(2) 児童作文

忘れ物の多い児童にもこれからは忘れ物をしないようにしよう、といった意識はある。しかし、どうしたら忘れ物を少なくできるかといった具体的な方法をとまわず、積極的な意欲へと高まっていない。そこで忘れ物をなくすための工夫や努力が書かれている作文を読むことで、自分にもできそうだ、自分ならこんなふうにやろう、といった具体的な方法を見つけることができると考えた。

また、その作文に、忘れ物の多い児童と少ない児童のとを取り上げた。忘れ物の多い児童でも忘れ物をなくそうと努力していること、少ない児童でもより少なくしようと注意していることを学級全体で認め合いたい。こうすることが忘れ物の多い特定の児童だけの問題ではなく、学級全体の問題として共通化することになると考える。

(3) 「忘れ物点検カード」

忘れた物の数や忘れた日数をかぞえているだけでは、忘れ物をなくそうという意欲と実際になくすための努力は、期待できない。そこで、準備時間や自分なりの工夫を考えさせた。自分で考えたことを毎日守っていくことが生活を正し忘れ物を少なくすることと考え、準備時間に自分が考え決めた項目を見ながら準備し、その項目が守れたかどうかを点検するカードとした。自分なりの工夫をしつつも、なお忘れ物が多ければ、改めて自分の生活を見つめなおし、また新たな工夫を考えさせるようにしたい。

児童作文の要約

A 私は時々忘れ物をしてしまう。なぜかというとすぐ遊んでしまうからだ。これからは帰ってからすぐそろえ、夜、もう一度見直しをしたい。

B 私は次のような工夫を考えた。

- ①宿題などをメモにとる。
- ②メモはふでばこにしまう。
- ③勉強の時間にメモを見て、時間わりをそろえる。

「忘れ物点検カード」

自分のくふう	時間割をみる	メモ・連絡帳をみる	じゅんぴする時間 () 時	注意すること 曜日
				日
				月
				火
				水

7. 研究協議から

(1) 資料の活用

- ア. 忘れ物を少なくしていくためには児童にどのような意識をもたせることが大切なのか。
- イ. 忘れ物が多いという意識はしているだろうが、それだけでは行動に結びつかない。
- ウ. 忘れ物をして困ったという経験をもつことが、忘れ物をなくそうという意欲につながる。
- エ. 忘れ物をしたら困ることがわかる資料(体験談・物語など)があればよかった。それはふだんの学級経営の中で忘れ物をした場合、どう指導しているかにつながってくる。
- オ. 忘れ物をして困った経験をし、困った状況の中で自分から解決していく力を育てることも大切である。

(2) その他

- ア. 忘れ物についての指導は年間計画の中でどこに位置づけたらよいのか。1年で必要だろうし中学年でも必要性を感じる。基本的な生活習慣にかかわることを6年間の中でいつとりあげたらよいか。
- イ. 地域や児童の実態に基づいて指導されるのが学級指導である。基本的な生活習慣である忘れ物の指導は、むしろ、学級での指導や個別指導として取り上げる方がよい。

〈学級指導コーナー〉

「学級指導と学級会活動との関連」

学級指導は、即事性、即効性が期待される教育活動であり、生活指導的発想が中心となり、学級会活動は、児童の自主的実践活動が中心におかれる。

たとえば、遠足の事前指導において、学級指導では、乗り物の実施指導や荷物のこと、時間のことなどが中心になり、学級会活動では、昼食時を楽しくするためにはどうしたらよいかなどを中心に討議され、実践に移される。しかし、実際の指導においては、関連して指導した方が効果的である場合もあるので、必ずしも分離する必要はない。

事例2

授業者 多摩市立東愛宕小学校 二田 孝
5年（適応） 1単位時間

1. 主題 自分の悪いところをなおそう

2. 主題設定の理由

ア. 児童の実態

第4学年から第5学年にかけて学級編成替が行われ、4学級から3学級に減ったこと、転入児童があったことなどで人数の多い学級である。

ソシオメトリックテストを行ってみると、強いグループ関係はないものの人間関係はかなり複雑であり、その中で、比較的友達からきらわれる傾向の強い児童が6名（うち女子2名）を数える。さらに、これらの児童以外でも学級全体の61%（28人）の児童が何らかの形で排斥の方で名前があがっており、表面に見える一見平穏な学級の様子とは別に、既に目に見えない範囲での小さな衝突は数多く起こっているだろうと考えられる。これらは放置しておけば、学級内でのグループ分裂化、さらにグループ間の対立などにも発展しかねない。実際に、友達関係に十分満足している児童は61%（28名）あったが、逆に不安に感じている児童も15%（7人）みられた。

イ. 教師の意図

望ましい学級集団とは、集団の成員各人が伸び伸びと活動し、自らの力を十分に発揮できる場、さらにお互いがお互いのよさを認め合って協力し、助け合って伸びることができる場であると考えられる。人間関係の不安や乱れは、集団としての機能を阻害し、学級生活および学校生活における自己の存在感、協力し合うことの喜び、協力して成し遂げたことへの成就感などを体験することをむずかしくし、ひいては生活意欲の低下にもつながるものと考えられる。

また、人間関係の問題は、単に排斥する側の特定の児童や特定の集団の問題として対処するだけでなく、排斥される側にも問題があるので、その指導も行いたい。

本時では、排斥する側が行いがちな友達に対する「批難」に目を向けさせ、友達のいやな点を自らに振り返らせ、逆に各人の悪い点を改善していこうとする授業である。これによって排斥される側の問題点を少なくすることで、学級内の人間関係がよりよいものになっていくことを願って本主題を設定した。また、本時に関連した事後の指導として「友達のよいところを見つけよう」という主題での学級指導を予定している。

3. 本時のねらい

これまでの友達に対する言動についてふり返り、友達にいやな思いをさせていた点に気づき、積極的になおすことができるようにさせる。

4. 展開

指導過程	指導内容・学習活動	指導上の留意点	資料
導入	1. 本時で学習することを知る。 ・児童作文(2点)を聞く。 無視, かげ口, 悪口	・実際に学級の児童がいやな思いをしていることを知り, みんなの問題であることに気づかせる。	児童作文 資料1 資料2
展開	前 段 2. どんなことをされていやな思いをしたかについて話し合う。 ・「人からいやがられる行動」の棒グラフを作る。 3. なぜこんなことをしてしまうのか話し合う。	・どのような行動が最もいやがられるのかを視覚にうったえる。 ・自分の問題としてとらえさせる。	棒グラフ 資料3
	後 段 4. 担任の願いを聞く。 ・こんな子ども, こんな学級になってほしい。 5. これからどのようなことに注意していくかを考えカードに記入する。	・自分も友達もそれぞれ悪いところがあることに触れ, 一人一人が気をつける姿勢ができればクラス全体がよくなっていくことに気づかせる。 ・資料3や展開3のことを考えて, これから注意していこうとする言動について, できるだけ具体的に記入させる。	反省カード 資料4
終末	6. 特に気をつけようとしたことを短冊に書く。	・短冊は「5年1組の木」に貼れるようにする。 ・実践への励ましの言葉を与える。	短冊 資料5

5. 評価

- ・各自が自分のよくなかった点に気づくことができたか。
- ・よくなかった点をなおしていこうとする意欲を持ったか。

6. 資料

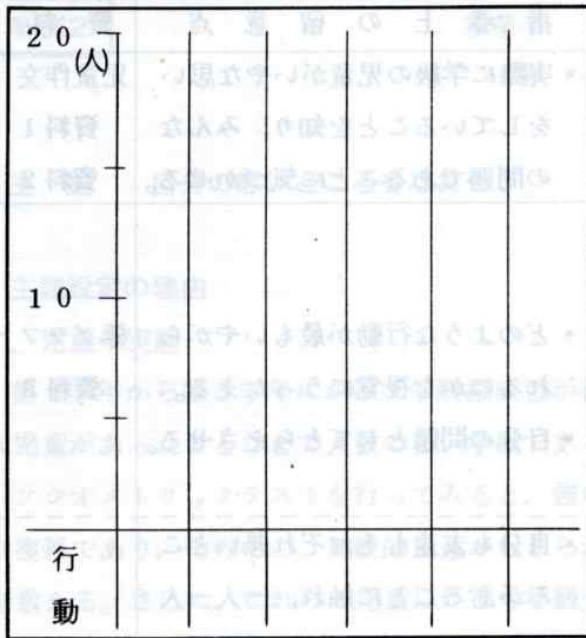
(1) 導入段階——児童作文1

本学級の女子の作文で, 友達との些細なことが原因で友達に無視され悩んだ体験を書いたもの。学級内における現実の問題の意識化, 共通化をねらって導入の段階で活用した。

児童作文2

これは教師の自作資料である。学級では悪口やかげ口に対する不満, それが原因で起こる言い争いが多いが, それに関わる児童作文で適当なものが見当たらなかったために書いた文である。活用のねらいは資料1と同様であるが, 内容が違っている点で必要と考え, やはり導入段階で活用した。

(2) 展開段階 —— 「人からいやがられる行動」の棒グラフ



「自己反省カード」

左図のグラフ用紙を黒板に貼布できるように作っておく。展開の前段でどのようなことが友達にいやな思いをさせているか（問題に対する原因，理由の追求）を知らせることをねらって棒グラフを作成していく。授業中にみんなで作っていくことによってより児童にとって新鮮で親密性，信頼性の高いものになると考えた。

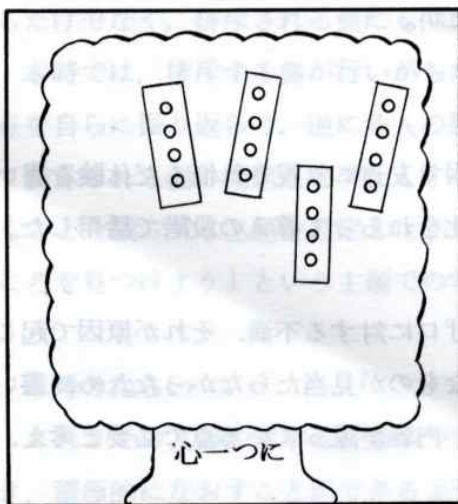
（すぐグラフが作れるように色画用紙を棒状に細長く切ったものを準備しておく。）

資料3をもとに，今までの自分のよくなかったところをまとめさせるための一人一人に配布するカード資料，さらにこれからどのようなことに気をつけていくかもこれに書かせるようにし，問題解決の一助となることをねらって展開の後段に利用した。

項目は次の3点である。

1. これまで自分がとってきた行動で，人にいやな思いをさせてしまったり，悲しませてしまったことはなかつただろうか。思いっただけ書き出してみよう。
2. これからも多くの友達といろいろなことをやっていこう。まわりの人たちのことを考えて，これからどのようなことに気をつけていったらよいか考えよう。
3. 「特にこれだけはやらないようにしましょう。」と思うものを書き出し，具体的にどのようなことに気をつけるのか考えよう。

(3) 終末段階 —— 短冊（「5の1，心一つに」の木に貼布する。）



資料4の中から特にこれだけは直していこうと考える事柄について短冊に記入させ，左図のような「5の1，心一つに」の木に貼り，教室内に掲示できるようにした。終末の段階で実践への意欲化をねらった資料であるが，掲示することによって，実践意欲の持続化，事後指導のための資料として利用できるようにした。

7. 研究協議から

(1) 資料の活用

- ア. 資料1, 2の児童作文は児童に読ませた方が児童の心情に近づき, 自分たちの問題としてとらえさせるには効果的である。
- イ. 資料3の棒グラフは事前に調べておいて導入に使用してもよかったのではないか。
- ウ. 資料3から教師の願ひにかけての部分は教師の話が多過ぎた。資料を活かす等して, もっと児童を活動させた方がよい。
- エ. 顔を伏せて, 無視したり, いじ悪をしたりした経験のある人が自分を見つめ直しながら挙手する場面があったが, その数を量的に示すのもよいだろう。
- オ. 教師の説話も広義で聴覚資料と考えられるが, この部分をもっとふくらませて欲しかった。脚色を加えてもよいから, 自分が子どもの頃に体験した事などを細かく話していくと, 説得力のある資料となって児童にとって深まるものになる。
- カ. 終末の段階では, 書かせた短冊などを活かして, しっかりまとめをしなくてはいけない。

(2) その他

- ア. 主題名は教師がこれから流そうとする授業の内容を的確に表したものがよい。できるだけ具体的で児童にも分かりやすい主題名にする。
- イ. 必要感に迫られた授業が大切である。クラスにとって適切な内容であつたらうか。
- ウ. 学級の実態からすると, 特に今すぐやらなければ, という内容ではなかったかもしれないが, 二学期の半ばにこのような人間関係を見つめ直すことは必要と思う。
- エ. 道徳としっかり区別して授業を行わなければならない。道徳的な部分も感じられたが資料5などによる具体的な行動の変容をねらった点で区別されるのではないか。
- オ. 学級内に疎外されている子が一人でもいたら, このような授業は行ってもよい。
- カ. 学級指導が楽しい時間になるように工夫していくことが大切であろう。

〈学級指導コーナー〉——埋もれた指導計画

本校で, 学級指導の年間指導計画を作成することになりました。全職員が分担し, 資料を集め, 討論されました。これまでの先生方の実践例を集めたり, いくつかの他校の例を参考にさせていただきました。そして労作も完成し, 印刷も立派にできました。

それから三年たちました。三年間の週案を開いてみると, 指導計画に沿った授業があまり見当たりません。『計画的な指導』はどこやら, 『事あるごとの学級指導』ばかりが目につきます。当然, 先生のお話が多くなります。お説教調の学級指導せめでは, 子どももたまらないことでしょう。立派に印刷された, 年間指導計画もきれいなままです。

年度末になると, 学校の教育活動について, いろいろと反省がなされます。そんなとき, 学級指導について, どれだけ時間が与えられているでしょうか。少しでもいいから, 指導計画を見直す時間があったらと思っています。

事例3

授業者 大田区立入新井第一小学校 藤本 仁

3年（適応） 1単位時間

1. 主 題 よりよい学級を目指して— クラスのためになる活動—

2. 主題設定の理由

3年生になって新しく編成替えをした学級である。「よく考えて行動しよう。みんな仲良くしよう」の学年目標に基づき、特に次の点を中心に学級経営を進めてきた。

健康学級 40人の仲間

(1) 心身共に健康な子ども
 ・みんなで遊ぼう ・みんなで学習しよう

(2) 汗をかく子になろう
 ・進んで仕事をしよう ・全力で物事に取組もう

この学級目標達成を目指して「連続大なわとび」の記録達成（現在117回）や、「はい」運動（どんな時でも「はい」と返事をする）などに取組んできた。

2学期に入り、「基になる態度」（基本的生活習慣の確立）を目標にかかげ、「今、健康学級はどこまで」（10項目評価）を中心に毎月子どもの変容を追求してきた。「私がいないと組の人が困ることがある」などの項目については、かなりよい方向に伸びてきているが、児童一人ひとりの人間関係（ソシオメトリックテスト、集団マトリックス）を表にして調べてみると、孤立児童が増加したり、周辺児がそのままの状況であった。このことは、児童相互の好ましい人間関係の大切さの理解が不十分で、児童一人一人が進んで実践していないと考える。健康学級の生活をふり返り、解決策を出すことで、好ましい人間関係を育成していくことが、今日、特に大切と思う。

そこで、10項目の1つである「私がいないと、組の人が困ることがある」を取り上げ、クラスのために役立つ活動を身に付けさせたいと願い、本主題を設定した。

3. 本時のねらい

児童一人ひとりが、友達の活動に関心をもち、クラスのために役立つ活動をするようにさせる。

4. 展 開

指導過程	指導内容・学習活動	指導上の留意点	資料
導入	1. 10項目調査結果を見て、良くなった点を話し合う。	・良くなった点についてみんなに認識させる。	調査結果の表
	2. 「私がいないと組の人が困ることがある」の項目を取上げて話し合う。	・話しがうわすべりにならないよう体験に基づく内容	T. P
前 展 段	良くなってきた理由を知るために経験を話し合う。	にさせる。	
	・個人の意識化 ・活動内容の明確化		

開 段	<ul style="list-style-type: none"> ・経験の有無 		
	3. 「私がいないと組の人が困ることがある」という意識のない人のことをみんなで考え話し合う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">友達や、クラスのために役立っていないかみんなで考える。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなに見えない行動 ・自分で気づかない行動 ・自然に役立っている行動 	<ul style="list-style-type: none"> ・特に意識していない児童を取上げ，問題解決を図る。 ・何げない行動について思い出させる 	
	4. 教師の話を書く。 <ul style="list-style-type: none"> ・児童一人一人から学んだために担任が助かったことを書く。 ・㊀ ㊁ ㊂ 運動の紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・学級指導メモカードに書かせる。 ・一人一人の児童を見ていることをわからせる。 ・実践意欲の手だてとさせる。 	メモカード
終末	5. 「知り合い会」を設定し，学級全体の取組みとして実践する。 <ul style="list-style-type: none"> ・実践意欲の高揚 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践方法を明確にする。 	ピクチャーパズル

5. 評価

児童一人一人が，友達に関心をもち，進んでクラスのためになる活動をする意欲が高まったか。

6. 資料

(1) 導入段階 常掲「今，健康学級はどこまで」

＜ 10 項目 ＞

- ・私は，自分が持っている力を最大限出しきろうとしている。
- ・困っていると，だれかが手をかしてくれる。
- ・答えをまちがえても，ばかにしたりひやかしたりしない。
- ・だれとでも気軽に話すことができるし，グループになれる。
- ・仕事を怠けたり，ずるしたりすると，互いに注意し合う。
- ・きまりを忘れていたりすると，気づいた人が注意してくれる。
- ・私がいないと，組の人が困ることがある。
- ・難しい問題については，みんなで考え合う。

1	6	7
2	7	7
3	7	7
4	7	7
5	7	7
6	7	7
7	7	7
8	7	7
9	7	7
10	7	7
11	7	7
12	7	7
13	7	7
14	7	7
15	7	7
16	7	7
17	7	7
18	7	7
19	7	7
20	7	7
21	7	7
22	7	7
23	7	7
24	7	7
25	7	7
26	7	7
27	7	7
28	7	7
29	7	7
30	7	7
31	7	7
32	7	7
33	7	7
34	7	7
35	7	7
36	7	7
37	7	7
38	7	7
39	7	7
40	7	7

- ・人を馬鹿にしたり，軽べつしたりする人はいない。
- ・自分のことだけでなく，友達のことを考えて生活できる。

(2) 展開段階 — 「私がいないと組の人が困ることがある」(T, P グラフ)

← のばそう		へらそう ←
15人	6	13人
28人	7	7人
26人	9	6人
30人	10	2人
33人	11	3人

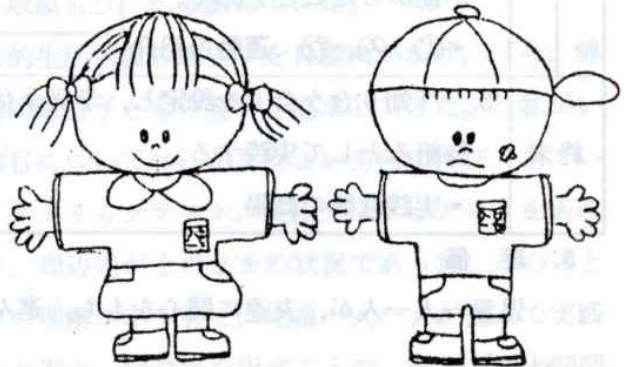
学級指導メモカード

学級指導メモカード 月 日

① ② ③ 運動カード (掲示用)

(3) 終末段階 — ピクチャーパズル

- ① 自分のために役立っている。
- ② みんなのために役立っている。
- ③ 何げない活動もみすごさないで生活しよう。



7. 研究協議から

(1) 資料の活用

ア. 導入部分のグラフは，日常掲示してある物でもいいと思うが，初めて見た資料の方が新鮮で，児童に訴える力があるのではないか。

イ. 展開部分の資料として，児童の活動場面などの写真，VTRなどを取入れるともっとわかりやすかったのではないか。

ウ. 資料には，二種類ある。

- ・どの学級でも使えるもの(共通・中心資料)
- ・この学級だけで使えるもの(補助資料)

更に，今日のように先生の話も1つの資料となる。先生自身のかかわり合った経験談をしていたので，児童の心情に訴えていた。

エ. 終末部分の資料は，決意に終わるものが多いが，今日は，ピクチャーパズルという形を取ったので，児童全体の方向が決ったのではないか。更に，その中に個人名など入れると，実践意欲が高まるように思う。

(2) 指導過程のあり方

ア. 問題点を，悪い面から解決していくのではなく，良くなっている面から更に良くする方法を考え出す指導過程を考えてあったが，とても難しいと考える。

イ. 7番目の項目に焦点をあてたようだが、「〇〇さんがいて助かった」という流れでは、2番目の項目との違いがわからない。

ウ. 自分のよい点はなかなか言えないもので、自分から見て役立っている活動を見る方が、わかりやすいと思える。

エ. たくさん出てきた意見を深め、まとめて、それを意欲に結びつけるような方法を考えるとよかったのではないか。

オ. 展開後段で、「どんな場面でどんなことができるのか」ということを入れるともっと具体的に子どもから出てきたのではないか。無理に、①②③運動に結びつけようとしているので、深まりがやや欠けた。

カ. 児童がどのようになってほしいかを考えて、教師は授業をする。その先生の意図にどう結びつけていくか、先生の意図にのってくる指導過程を考えるべきである。

キ. 終末で各児童の心情への意識化だけを考えてはいけない。全部の児童の意識化、先生の意図へ児童をもっていくのが学級指導である。

(3) その他

ア. 学級経営が学級指導の授業に生かされていた。

イ. 道徳・学級会・学級指導のねらいと指導方法の違いは何か、また評価は、ねらいのうら返しでいいのか。

ウ. 個人名が多く出されていたが、なぜそうしたのか疑問である。

エ. 主題は、もっと具体的な表現をとった方がいいのではないか、サブテーマの方がわかりやすくいいと思う。

オ. 今日の授業を学級会や道徳で行った場合、道徳では、各自の価値の追求でよいが、学級指導は、これだけはやめてもらいたいと、これだけはやってほしいというもので実践化を子どもが意識するものである。学級会としては好ましくない。

今日のことが明日から生かされればとても楽である。あらゆる機会をとらえ忍耐強くやっていくことが大切で、そういう芽を育ててやるのが大切だと考える。

—— <学級指導コーナー> —— 学級指導、10～20時間?!

「うちの学校は、学級指導の時間をしっかりと確保しています。年間20時間はゆうに越えています。」新年度の教育課程を編成する頃になると、こんな声を耳にします。もう少し詳しく時間についてたずねると、週時程の第1校時が始まる以前の時間に組み込まれている $\frac{1}{2}$ 単位の学級指導や朝の会の時間などの合計を学級指導の総時数にしている場合が以外と多いようです。

「学級指導10～20時間」は、時間割表の枠内に組み込まれた1単位時間の学級指導の時数の合計であることを再確認したいものです。

V 資料の活用事例

その1 授業構成と資料の活用事例

新宿区立東戸山小学校 富田 嘉子

学級の一人一人の児童が、主題に対する問題意識をもって学習に取り組めるなら、授業の目的の大半は達成されたと考えてもよいであろう。それは、当然、学級指導のねらいである学級内の好ましい人間関係の確立を目指す指導であり、問題解決にあたっては、即事即効性のある指導であり、学級内の児童全員を対象とした授業でなければならない。

しかし、ともすると、学校や地域社会の生活についてのルールやパターンを未消化のまま次々と教え込まれ、生活指導と同じ内容のものとして考えられ、授業されがちである。

教育課程に授業として位置づけられた学級指導では、学級内の児童一人一人が課題意識をもって授業に参加し、取り組めるような指導が望ましい。

それは、教師中心の随時随意指導であってはならない。指導内容は、あらかじめ年度当初に意図的計画的に指導時間を設定し、位置づけたものでありたい。これを基盤としてこそ、学級内の子ども達一人一人が自分自身の問題として受けとめることができ、学習内容の定着が期待される。私たちは、学級指導の授業を、子ども達一人一人の目が生き生きと輝くような授業にしたい。

そのためには、導入で、どんな資料をぶつけ、展開でどんな資料を用意し、問題の研究、解決を図っていくかを考え、綿密な計画を立てて授業に臨むことが何よりも大切である。学級指導の資料としては、より具体的に主題に迫れるもの、より切実感、緊迫感をもったものがよいと考える。

授業の展開の中で、いくつもの種類の資料を使うのは、児童の目移りがしてよくない場合が多かった。投げかけられた主題に対して学級の子ども達一人一人が、自己の問題として考えさせるためにも、訴える資料は、厳選して少くしたい。

その精選された資料を効果的に扱うために、指導技術を高め、指導の工夫を行いたい。次のような方法を考え、私は実践している。それは、動作化、表現化の方法を工夫し、取り入れることである。つまり、劇、お話、表現、ゲーム、音楽、イラストなどが持っている様々な要素に着目し、その構成、形成、素材、技術などを学習の中で活用するのである。

次にそれらを分類してみる。

- 劇化……動作化、ごっこ遊び、再現劇、パントマイム、かげ絵、指人形、ペープサート等。
- お話……読み聞かせ、絵ばなし、説話等。
- 表現……模倣、リズム遊び、創作。
- ゲーム……室内や屋外でのゲーム、しりとり。
- イラスト…絵かき歌、一筆画き、紙芝居など。

以上の内容を学級指導の授業の中で、それぞれ児童の発達段階に応じて活用していきたい。
以下その活用事例をあげてみる。

1. 主題名 「清そうのしかた」—適応—(1単位時間)5年生


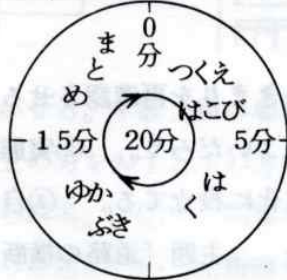
2. 主題設定の理由

- ① 時間内できれいにならない。② 男女がべつべつに仕事をする。
- ◎ 清そうの順序をきめてグループ内で協力してやれるようにさせたい。

3. ねらい

- ① そうじのやり方をくふうする。
- ② きめられた時間内できれいにそうじができるようにする。

4. 展開

指導過程	指導内容・学習活動	資料の活用																		
導入	1. トラブルのようすをつかむ。(テープであらそいの声)																			
展開	2. どんなことが問題なのか話し合う。 3. どのように改善したらよいか話し合う。 ・男女の協力 ・仕事の明確化																			
	4. そうじの順序にしたがって各グループ内の分担を考える。																			
終末	5. そうじ重点カードを作る。 ○そうじの歌を合唱する。	<table border="1" data-bbox="791 1352 1353 1487"> <thead> <tr> <th></th> <th>月</th> <th>火</th> <th>水</th> <th>木</th> <th>金</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A型</td> <td>A型</td> <td>B型</td> <td>A型</td> <td>A型</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ゆか</td> <td>つくえ</td> <td>ごみひろい</td> <td>ゆか</td> <td>かたづけ</td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>重点カード</p>		月	火	水	木	金	A型	A型	B型	A型	A型		ゆか	つくえ	ごみひろい	ゆか	かたづけ	
	月	火	水	木	金															
A型	A型	B型	A型	A型																
ゆか	つくえ	ごみひろい	ゆか	かたづけ																

5. 評価 男女仲よく、そうじをし、時間内に終わらせる決意が生じたか。

- ① <重点カード>について
- ② <そうじの歌>

A形 机を運ぶ、はく、床をふく、机をせいとんする、机、さん等の水ぶき、反省会。

B形 机を運ばず一人ずつごみひろいで終了。

6. 資料 5の3そうじの歌(ボーイスカウトの「すいかのめいさんち」のふしで歌う。)

そうじの時間だ、みんなでがんばろう。なかよく早くみんなでがんばろう。

まどをあけて、すいすいはきそうじ、ピカピカゆかみがき、楽しくがんばろう。

◎ あやつり人形や指人形はどんなテーマにも使えるので便利である。

その2 指導内容と資料の活用事例

武蔵野市立第四小学校 高松和彦

学級指導は直接学校生活に関する事柄や、極めて身近な場での問題を教材としてとり上げ、具体的な解決方法を通して実践化・意欲化を図る授業であるといえよう。従って、授業の中で使用する資料は、児童個々の日常生活に深い関連のあるものであることが望ましい。また、そのような資料を選択し適切な活用をすることによって、授業の効率を上げるだけでなく授業の内容そのものを豊かにしていくものとする。

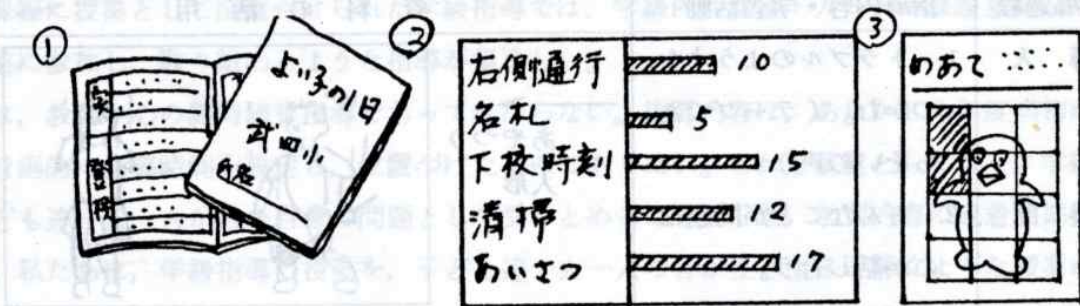
ここでは、 $\frac{1}{2}$ 単位時間における1つの資料の活用事例を示してみた。

(1) 適応 主題「学校のきまり」(6年)

学校のきまり

守りにくいきまり

目標カード



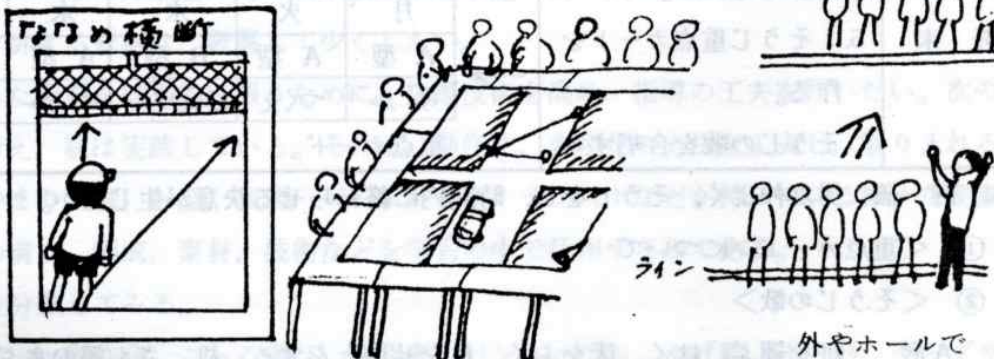
①学校のきまりを再確認させるために、「よい子の1日」をプリントして渡したり、TP化するのもよいだろう。②実態調査をしながらグラフ化して提示。傾向をつかませて話し合いの焦点化に役立つ。③自己評価により1日1ますずつぬりつぶしていけるカード配布。

(2) 安全 主題「道路の横断」(3年)

① T. P(図)

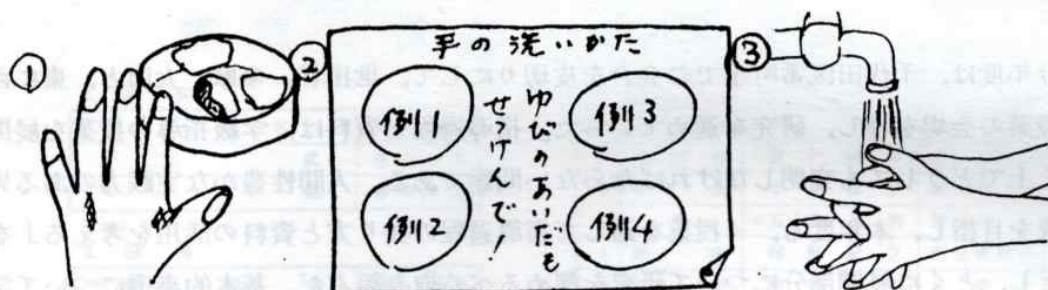
② 机を中央に集めて

③



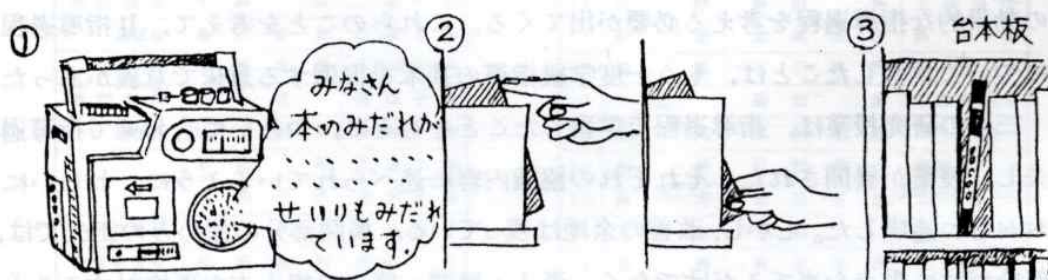
①「ななめ横断」のような新しい言葉は、図示してはっきりと認識させる。②模造紙に大きく道路図をかき、紙テープ等を使用して横断のしかたによって距離が大きく違ってくことを実測させる。人形を数個用意しておいて、個人の場合や集団の場合の正しく安全な横断方法について理解させる。③遠足や見学時に集団で道路を横断するときは、教師の合図で上図のようなわたり方を一斉にする場合もあるので、ライン等をひいて練習しておく。

(3) 保健 主題「きたない手」 (2年)



①休み時間の直後など、水やアルコールでしめらせた脱脂綿で指の間などもていねいにふか
せてみる。見ただけではわからないが、大変よごれていることに気づく。②手の洗いは、
順序を表した図でも、正しい正しくないを対比させたものでもよいだろう。この図は、手
洗い場にしばらく常掲しておきたい。③水道で実際に洗い、再度①で確認させてみる。

(4) 図書 主題「本が泣いている」 (4年)



①図書担当の先生や図書委員会の児童の話テープで聞かせる。学級文庫の場合は図書係の
作文や担任の話もよい資料となる。②取り出し方は、上の方をおすと下の方が出てくるの
で、そこをもって引き出すように。VTRの活用も考えられる。③ミニ図書ボックスを用
いて、実際に練習すると同時に台木板の使用や分類番号の意義についても指導しておきたい。

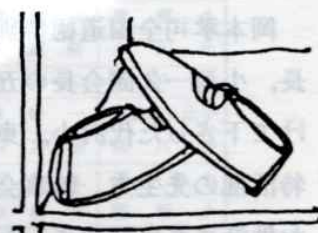
(5) 給食 主題「給食のあとしまつ」 (5年)

配膳のしかたや、食事の作方については関心もたれるが、後仕末はついおろそかになり
がちである。後片づけについても、協力の必要性と能率的な方法について考えさせていくた
めに次のような資料を使用した。

①給食を作る人、用具を洗う人の立場から思うことをテープなどで聞く。②ランチ皿、牛
乳びん・スプーン等の集め方や片づけ方を、グループごとに図や表にかかせる。③協業と
分業の確認をグループ内・クラス内でし、給食当番への協力のしかたをはっきりさせておく。

(6) その他 主題「くつをきちんと」 (1年)

①靴箱の写真でもよいが、靴の入れ方の乱雑であることを強調した。
TPも効果的である。②個人が困る点について話し合った後、全
体としての美しい統一のよさに気づかせる資料を用意したい。
③小さな箱を準備しておいて、2～3人の児童に靴を実際に入れさ
せてみた後、全員で靴箱に行って入れ直しをするようにするとよい。



VI 研究の反省と今後の課題

今年度は、千代田区番町小での会合を皮切りにして、世田谷、多摩、大田と、東に西に研究授業の会場を移し、研究を進めていった。指導過程と資料は、学級指導の授業を展開していく上でどうしても究明しなければならない問題である。人間性豊かな実践力のある児童の育成を目指し、本年度も、「授業を通して指導過程の在り方と資料の活用を考える」をテーマとし、とくに展開部分について研究を深めるべく取り組んだ。基本的事項について学ぶこともでき、授業を通し、実りの多い研究ができたが、問題の奥深さを改めてしらされた。

1. 指導過程について

学級指導は、各教科の指導と同じく、導入・展開・終末の過程を通してその時間のねらいが達成される。他教科と同様、学習内容を児童に理解させることが先決である。しかし、他教科と違うところは、即実践するところにある。従って、児童に意志決定をさせるための効果的な指導過程を考える必要が出てくる。これらのことを考えて、II指導過程の内容について学習したことは、もう一度学級指導の基本を復習する意味で意義があったと思う。

三つの研究授業は、指導過程で学習したことをもとに、ねらいに合わせて指導過程を工夫し、授業が展開された。それぞれの協議内容に述べられているように、ねらいについておおむね達成した。しかし、改善の余地は残っている。展開部分の深め方の工夫では、展開部分だけに視点を当てるだけでなく、導入・展開・終末の組み方を再検討することの大切さを感じた。指導過程と発問の吟味や $\frac{1}{2}$ 単位の授業についてさらに研究を深めたい。

2. 資料について

展開段階の前段では、問題について、原因や理由の追求をさせ、一人一人の児童に理解させること、後段では、問題解決の方法や問題への対処の仕方を理解させることが重要であるが、その理解を助ける働きをするのが資料である。III資料作成に記載した内容について学習したことは、資料についての基本的事柄を理解する上で役立った。

三つの研究授業では、展開部分の資料は、前段で、児童作文、模造紙による棒グラフ、TPによる棒グラフ、後段で、点検カード、反省カード、メモカードが使用された。それぞれに工夫され、学習内容を理解させ、定着させるのに効果があった。だが、教師の説話を資料として生かすなど、種々の方法が考えられるとの指導を受けた。資料の活用事例を二つ載せ、研究の幅を広げたが、資料の活用、保存についてさらに研究したい。

おわりに

岡本孝司全国道徳特別活動会長、佐藤弘都研幼児研究部長、石川和男庶務部長、外村近副会長、小河一久副会長の五先生、心のこもったご指導をありがとうございました。授業を引き受けて下さった代沢小、東愛宕小、入新井第1小の校長先生と諸先生方、世田谷、多摩、大田の特活部の先生方、幹事会に会場を提供下さった番町小、ならびに梅田小の校長先生、たいへんお世話さまになりました。厚く御礼申し上げます。

東京都小学校特別活動研究会 顧問・役員・理事名簿

1. 顧問

氏名	校名・職名
小谷 威	芝山小長
中田 英義	番町小長

2. 役員

役職名	氏名	校名・職名
会長	廣瀬 英二	滝野川小長
副会長	外村 近	東永山小長
"	古橋 宏	仰高小長
"	小河 一久	月島一小長
"	岩園 敏明	清水小長
庶務部長	石川 和男	平和小長
" 副部長	門倉 昭三	竹芝小頭
" "	松崎 繁	赤羽小頭
会計部長	大西 弘	二葉小長
" 副部長	島田 泰介	野増小長
" "	小野 真澄	下鎌田東小頭
専門部長	竹石 善一	蓮根小長
" 副部長	岩下 紀夫	天神小頭
" "	新倉 剛	千歳小頭
" "	安岡 正凱	泉新小頭
学級会部長	大谷 武夫	高輪台小
児童会部長	星野 隆治	桃園三小
クラブ部長	関口 照治	菊川小
学級指導部長	米本 滋雄	梅田小
事業部長	関口 主一郎	九小長
" 副部長	松野 彰夫	志村一小
" "	渡辺 寿	北町西小
編集部長	小川 国寿	檜町小頭
" 副部長	高見沢 豊栄	六小頭
" "	合原 渡	成増ヶ丘小
会計監査	北村 康富	篠崎小長
"	早坂 一足	栗島小長

3. 本部幹事

役職名	氏名	校名・職名
庶務	池田 令子	鎌川小
"	桜井 晴美	池袋五小
"	天田 隆	千早小
"	小林 千恵子	王子小
"	吉田 律子	滝野川小
"	剣菱 美智子	滝野川一小
"	小泉 信義	滝野川五小
会計	石塚 千恵子	滝野川小
事業	木場 住郎	多聞小
編集	小林 繁人	潤徳小
"	蛸井 聡	白金小
"	浅井 良久	戸越小
"	石岡 勝彦	第三砂町小
"	柴山 守	綾瀬小

4. 理事

区名	氏名	校名
1 千代田	・香川 昭男	富士見小
2 中央	小川 泰三	東華小
3 港	○五十島 良治	桜川小
4 新宿	河野 紀之	落台第四小
5 文京	池田 和栄	金富小
6 台東	○大高 正義	精華小
7 墨田	○木庭 清八	第二寺島小
8 江東	○長門 邦雄	扇橋小
9 品川	○岡野 高雄	源氏前小
10 目黒	○山田 一夫	東根小
11 大田	○廣江 信夫	東調布第三小
12 世田谷	○稲田 栄四郎	太子堂小
13 渋谷	辺見 弘	常盤松小
14 中野	飯田 晃	上高田小
15 杉並	金成 美枝	西田小
16 豊島	○石川 和男	平和小
17 北	池田 藤	第四岩淵小
18 荒川	那須 正義	第四日暮里小
19 板橋	松野 彰夫	志村第一小
20 練馬	沼田 定次	光が丘第一小
21 足立	○早坂 一	栗島小
22 葛飾	・前田 昭義	渋谷小
23 江戸川	○小笠原 探源	第四葛西小
24 八王子	宇都宮 透	陶銘小
25 立川	矢崎 昌寿	松中小
26 武蔵野	石上 俊一	第五小
27 三鷹	佐藤 治子	第四小
28 青梅	・土方 順蔵	河辺小
29 府中	○藤本 学	南町小
30 昭島	・家田 哲夫	中神小
31 調布	三浦 勝也	大町小
32 町田	八巻 八郎	つくし野小
33 小金井	河西 芳	東小
34 小平	○太田 弘四郎	第六小
35 日野	畑 中隆宏	平山台小
36 東村山	○吹毛井 啓一	東秋山小
37 国分寺	○守屋 博行	第三小
38 国立	赤池 正人	第五小
39 田無	・増沢 喜美夫	柳沢小
40 保谷	星 憲彦	保谷小
41 狛江	山内 五郎	第四小
42 東大和	・白井 明子	第八小
43 清瀬	・片岡 恵次	清瀬小
44 東久留米	安田 康隆	小山小
45 武蔵村山	○小林 昭二	第八小
46 多摩	○小林 耕一	北豊島ヶ丘小
47 稲城	佐久間 英明	第八小
48 西多摩	○松田 具久	羽村東小
49 大島	○島田 泰介	野増小

(○長・頭)

編 集 後 記

T区のV校で実施された研究会に、勇んで参加した青年教師が、自分の学校との違いに驚ろき、「一人一役制のクラブ指導は、より望ましい形なんじゃないか」と、疑問を投げかけてきた。日を違えて、同質の発表会でS区のM小学校では、2クラブを3人で指導していたし、1クラブ2人のものもあった。さて、果してどうなんだろう。

人間性豊かな児童の育成を目ざし、特色ある学校づくりに取り組んでから5年、より望ましい特別活動のあり方を求めて、現場は模索の連続であると言っても過言ではない。

クラブ活動ばかりではない。学級会活動が学級指導との混迷に悩み、児童会活動が学校行事や創意活動とのかかわりに隘路（あいろ）を感じているとすれば、これらを都特活をはじめ全国の特活同人が力を合わせ、真の姿を求めていかなければならないと思うわけである。

都特活は本年度、「豊かな人間性を育てる特別活動」というテーマで、特活が持つ特質や本質を見きわめながら、それぞれの専門部で実証授業を通し研究を重ねてきた。

学級会活動部にあっては、「学級経営」との深いきずなを追求し、5回にもわたる研究授業を通し、「学級経営の基盤性」に大きく目を向けたことは、異色であった。児童会活動部では、その特質をおさえながら、「望ましい指導のあり方」を究明しようとした。そして、前後2回の研究授業、12回の研究協議から、熱のこもった改善策が提案されている。クラブ活動部では、クラブ活動そのものの特質を価値づけ、集団活動のあり方を追求してきた。公開授業2回、研究協議12回の結果から、実態調査をもとに分析・考察が加えられた。学級指導部に於いては、「指導過程の在り方」と、資料の活用をテーマに、展開部分の深め方に工夫をこらし、研究授業3事例、9回の研究協議を重ね、問題点の解明を図ろうと努力が積み重ねられた。

このように都特活は、実践的な研究を積極的に進め、疑問や混迷、隘路（あいろ）を少しでも切り開こうと努力してきたのである。結論に到達するにはまだまだ道は遠い。しかし、その問題点が一つずつでも解明されれば、全都（国）の学校に資することが出来ると思える。

本年度の研究をしめくくるに当って、多くの困難や条件を克服し、研究授業或は実証授業を通しての積極的な研究を進められた四部門の各位に、心からの敬意をおくり、合わせて、多くの指導・助言をいただいた講師の先生方に厚くお礼を申し上げ、編集後記としたい。

S 59. 3.

専門部副部長 岩下 紀夫

研究集録 第20号

特別活動の特質をふまえた
豊かな人間性の育成

印刷 昭和59年2月25日
発行 昭和59年3月1日
編集 東京都小学校特別活動研究会
発行者 会長 廣瀬英二
(北区立滝野川小学校)

印刷所 株式会社 三誠社
代表取締役 茂呂彌兵衛
文京区本郷2-22-4
TEL 812-0241・811-2062